つて、惱ますと聞き及ぶ。もしや、賴光その類ひにて、物の怪の業ならんか。餘り不思議の蜘蛛切り丸、一見したい折柄に、招待なれば、參つたわやい。

園生　その蜘蛛切り丸の事は（ト思ひ入れあつて）成る程、御上覽に入れますでござりませう。

雷雲　して、君のお拾ひなされしこの嬰兒は。

園生　賴光とみづからの中に、出生なしたる男子なれど、親に祟る人相あれば、一旦は捨て兒となし、それを拾ひとれば、災ひを除くとあるゆゑ、京極通り藪の下へ捨てしを、取られしとあつて、それより館の騷動。

女一　その後お行くへを尋ぬれど相知れず。承はれば尊國樣には、お拾ひあつて御寵愛あると承はり

女二　それゆゑお貰ひ返し申さん爲

侍一　桝の神事を幸ひに、御饗應は種々さまざま。

侍二　お能囃子の用意もござれば

侍三　御立腹を止められ

侍四　暫くお待ちくださりませう。

尊國　（思ひ入れあつて）すりや、差當る馳走には、この菊の花。（ト菊を取り上げ、思ひ入れ。）

花平　それが主人の只今の饗應。

尊國　一天四海の政事、斯う握つたる尊國が

四人　御謀叛の

園生　エ。（ト思ひ入れ。）

雷雲　其方に大事の嬰兒なれば、尊國樣にも御大事。

尊國　一子をおとりに尊國が、かねての望みの麿が味方、賴光承知いたす心か。

園生　サ、それは

雷雲　異議に及ば、ここの嬰兒を、おッ殺さうか。

園生　サ、それは

皆々　サア〳〵〳〵

尊國　どうだ。

園生　（思ひ入れあつて）委細畏まりましてはござりますれど、夫賴光は病氣、執權大宅の太郎代參の留守なれば、歸りましたるその上にて。

雷雲　すりや、執權大宅の太郎が

尊國　歸り次第に返言を。

花平　先づそれまでは、尊國樣の、御座改めて御饗應。

園生　御對顏所の上座にて

咲平　蜘蛛切り丸を御上覽。

雷雲　いづれも案內。

皆々　イザ、尊國樣には

尊國　皆參れ、やい。（ト管絃になり、尊國先きに敵役四人、奧へ入る。）

花平　北の御方には、さぞお心遣ひでござりませう。

咲平

女一　斯樣な御事多い時には、お氣をお晴らしなさるがよろしうござりまする。

女二　煙草は、辛苦を忘れ草と申しますれば、先づ〳〵お煙草でも

兩人　召し上がられませう。

ト煙草盆を持つて來て差出す。てんつゝになり、向うよりお芳、やつし着流し、前垂れがけ、下駄をはき提げ箱の煙草賣りにて、これを足輕、麻の袴、脫立ちにて、竹の杖を持ち、出て來て

足輕　下れ〳〵、下らぬか。

よし　お煙草はようござりまするか。

足輕　ヤイ〳〵、爰をどこだと思ふ、賴光公のお館だワ。

よし　その賴光樣のお館だから、商ひに來たが、こなさん、豪氣にやかましく言ひなさるの。

足輕　おれはお足輕で、お飛脚にも歩くが、お庭廻りを見廻りの者ぢやが、見馴れぬ者ぢやによつて、下れといふのぢや。

よし　エ、やかましいよ。

ト言ひ〳〵本舞臺へ來る。侍女三人立ちかゝり

女一　コレ〳〵、お足輕衆、何事でござりまする。

足輕　慮外な女ゆゑ、お庭廻りの身が咎めてござる。

女二　お奧の事は私しどもにお任せあつて、お出でなされ。

足輕　左樣ならば、お次へ參つて

よし　お茶でもあがれ。（ト笑ふ。合ひ方になり、足輕下手へ入る。）

花平　見れば女子の商人さうな。

咲平

よし　ァイ、わつちやァ提げ箱の煙草屋かゝァサ。聞いておくれ。今の世の中ぢやァ宿六より、わつちの商ひがまし。それだから長屋の評判記がようござりやす。其かはり大抵ぢやァないのサ。義太

夫本にもある通り、油引かずの松葉煙草は昔の事、今ぢやァ誰も口が奢つて、國府、酒むし丁子入り、龍王、沼田、根のかはら、きついかゝァと言はれちやァ、朝むく起きが日本橋、さかな川岸から新場をかけて、四日市、それから兩國、葺屋町、樂屋おもてを見廻りて、てん〳〵舞に留場の衆がなぶるのを、よしてもくんな小夜嵐ときめれば、あいつは中の字と値は極つても、わつちが煙草、三十二だがのむがいゝ。（ト煙草を出していぢり〳〵）どうでおしやべりで新田や、菊煙草のやうに、和らかにやァいきやせん。五匁でも、十匁でも、どうぞ買つておくんなんし。大勢ぢやアござりやせん、たつた一人。……おきやァがれ、口がはしやいでお里が出て、ァゝ、咽喉が渇く。何ぞ一杯呑ませなさんせ。……オゝ、お茶もお湯もござりませぬか。

女　トづツと園生の前の側へ行き、煙管を取つて煙草をのむ。

兩人　これはしたり、女中さん、あんまりお側へ。

よし　どうでわつちやァ無闇ものゝ場知らずサ。（ト簪で頭を掻いてゐる。）

園生　イヤ、苦しうない。たま〳〵商ひに來た女子、殊に氣さくらしい樣子、また慰みにもなりさうなものぢやわいの。

よし　また奥樣は贅揚なものだ。わつちらだと言つて、まんざら腹からの乞食（ト言はうとして、思ひ入れ

あつて）オツト、言はぬこと〳〵。

花平　ヤァ、言はせて置けば、所をも辨まへぬ不屈きな女。

咲平　鎭守府のお館といひ、北の御方へ慮外。

兩人　きり〳〵立たう。（ト お芳を引き立てようとする。）

よし　なんだ、お前方は。二合半にも足らない形をして、わつちを引き立てるのかえ。こいつはおつかない。したが、栫檀は二葉とやら。ァゝ、頼もしい。

園生　腰元どもは知りやるまいが、「骸骨の上を粧ふ花見哉」といふ發句もあり、また風流は格別なものぢやなァ。

よし　ソレ見なせえ。骸骨の上を粧ふとは、どんなに髪形ちを造つても、裸にすれば上つ方でも、こちとらでも同じ事といふ心。その筈でもあらうかえ。ぬしさんでも、わつちらでも、三度喰ふ飯は三度、違つた事は身形ばかり。こゝが今いふ上を粧ふといふところだ。モシ、上へ着てゐなさるは、何といふ着物でござりやすえ。

ト言ひ〳〵園生の前の側へ行き、裲襠をいぢつて見る。

女一　そりや、裲襠と申すもの。

よし　なんだ、裲襠え。ぶつかけなら蕎麥だけれど、こいつは喰はれもせず。

園生　どうやら其方は、裲襠が欲しさうな。

よし　イヽヤ、欲しくはないが、着て見てえね。

園生　大事ない、その裲襠を取らせい〳〵。

女二　畏りました。（ト側にある裲襠を取ってやる。）北の方よりの下されもの、有り難うお受け申しや、

よし　こいつは有り難いね。（ト裲襠を取って）ほんに、口を利いては損はいかねえ。

ト着て、いろ〳〵わが姿を見る。

女一　これはしたり、いかにお許しなさればとて、北の方の召し物を、下様の身で。

よし　何だい。なんぞといふと下様だの、下村だのと、ほんに肌合の悪い手合ひだ。

園生　そりや、ハヤ、どうで、皆の者とは、墨附の悪い筈。

よし　エヽ。墨附の悪いといへば、なんぞ墨附といふ物が、お屋敷にありやすかえ。

園生　何によらず、我が君頼光公の下知書きに、鎮守府の印鑑のすわつた大切なる物を、お墨附といふわいの。

よし　すりや、その墨附を。（トきつと思ひ入れ。）

園生　ハテ、變つた事に、念を入れる女ぢやなう。

よし　エ。（トぎつくり氣を替へ）なにサ、墨附ぢやアござりやせぬ、煙草の火附きのいゝ悪い事サ。どうぞ買つておくんなんし。

花平　刻み煙草の商ひなら、大部屋へ連れて行かうか。

園生　その裲襠は其方に取らすほどに

咲平　おいらと一緒に大部屋へ。

よし　そんなら一緒に。（ト裲襠を肩へかけ、提げ箱を持ち、立ち上り）斯うした所は、猪牙から上がる船頭のやうだ。ホヽヽヽ。とはいへ、墨附。

園生　ヤ。（トきつと思ひ入れ。）

よし　お煙草はようござりますか。（ト唄になり、花平、咲平先きにお芳下座へ入る。）

呼び（向うにて）御上使。

園生　ハテ、今點のゆかぬ不時の御上使。いづ方よりであらうぞいなア。

ト太鼓謠ひになり、向うより平井の保輔、えんで衣裳、長上下にて、小さ刀、上下の侍ひ二人刀を持ち、後より大宅の太郎光任、上下衣裳にて、三方に御札を載せ、持ち出て來て、花道にとまる。園生の前、思

ひ入れあつて出迎へ

思ひがけない御上使ゆゑ、お出迎ひの用意もなく、折ふし居り合せしみづからは、頼光が妻、園生の前。……見れは大宅の太郎には、御上使のお供いたしたの。

光任　イヤ、拙者ことは、住吉桙の神事につきまして、仰せ附けられた五條の和歌三神への御代参、途中にてお目にかゝりしゆゑ、御上使の御案内。

保輔　それがし事は、源家の臣下たる、渡邊の源次綱とは從弟同士、武藏の國三田の郷にて、人となつたる、三田の源太廣綱と申す者。このたび始めて多田の御所へ罷り登りしところ、滿仲公より上使を蒙り、只今伺候仕つてござります。

園生　すりや、聞き及ぶ三田の源太にてありしよな。臣下なれども御父、滿仲公の御上使とあれば

光任　先づ〳〵あれへ。

女兩人　お通りあられませう。（ト太鼓諧ひになり、保輔刀を取つて本舞臺の上へ廻る。）

保輔　上使。（ト管絃になり）　攝津介頼光には、禁廷守護の役目にありながら、病氣と披露し引込みをるは、將門、純友の殘黨謀叛の企てあるよし、頼光この討手を蒙る時には、無くて叶はぬ名劍は、源家の重寶蜘蛛切り、鬼切り、二振りの劍紛失なせしを、押込めあるは、その難を遠ざけん爲の虚病ならんと、禁廷より、御父滿仲公へのお疑ひ。直樣二振り受取り歸れとある上使の趣き、斯くの通りでござりまする。

園生　ナニ、二振りの御劍、受取り歸れとある御上使とな。（ト顔見合せ思ひ入れ。）

光任　夫頼光こと、物の怪に犯され、いつぞやより所勞。この程は大切によつて、桙の神事を勤むる程の事。

女一　わが君樣には、中々虚病などとは、世間の取沙汰。

光任　蜘蛛切り、鬼切り、紛失と申すも造說。寶藏に祕めあれば、後刻差上げまするでござりませう。

保輔　それで廣綱、安堵いたしてござる。

園生　（保輔に目を附け）　して、廣綱には、武藏にて育ちしとあるが、もしや尋ぬる

保輔　ハテ、異な事の御不審。

園生　ムウ、疑ひもなき（ト思ひ入れあつて）　これはしたり、御上使へ御饗應もなく、有り合ひましたる長柄の丸獻を。

女二　差上げますでござりませう。（ト長柄、杯を持ち行き）　お肴もない、この御酒宴。

園生　イヤ、肴には、みづからが古歌一首。

ト園生の前思ひ入れあつて

保輔　ヤ、なんと。

園生　（合ひ方になり、料紙硯を出し、短冊を持ち）「岩の上に旅寢をすればいと寒し苔の衣をわれにかさなん。」

女一　北の方には日頃にもお似合ひなされぬ、物堅いお心にて

女二　戀歌めいたる三十一文字。

園生　小野小町が石の上にて、僧正遍照に讀みやりし歌。

ト保輔の前へ短冊を出す。保輔取りあげ、思ひ入れあつて

保輔　「岩の上に旅寢をすればいと寒し苔の衣をわれにかさなん。」……すりや、これを肴に。

園生　御上使、これに。

ト唄になり、園生の前、思ひ入れあつて奥へ入る。保輔見送り

保輔　日頃物堅い北の方の今の樣子、御酒の肴に古歌一首。

光任　拙者などは、軍學兵學は好みの道なれど、歌學はとんと不案内。

保輔　苔の衣をわれにかさなん。（ト思案する。）

光任　併しながら、三日交歌せざれば、その智計りがたしと申す事。

保輔　その心をば

光任　發句に申せば、「世の中を三日見ぬ間に櫻かな。」

保輔　ハテ、滑稽でござるな。

光任　苔の衣をわれにかさなん。

保輔　これを肴に（ト杯を取り上げる。女二、酌をする。）アヽ、僧からぬ古歌ぢやなア。

ト管絃になり、保輔酒を呑む。光任煙草をのんでゐる。下座よりお芳出て來て

よし　ハテ、晝中でも、おつりきな仕事の出來るものだ。（ト言ひながら出るを、光任見て）

光任　ヤイ〳〵。女、其方は。

女一　ありや、最前見えし女商人。

よし　提げ箱賣りの煙草屋かゝアサ。（ト保輔を見て）オヤ、次郎さん、こゝへ來てゐるの。

ト保輔惚りして

保輔　わりやアお芳。（ト言はうとして）ヤイ〳〵、慮外な。上使に向つて馴れ〳〵しき。

ト言ふなといふこなし。

よし　馴れ〳〵しいもフサ〳〵しい。わつちやアお前を尋ねてゐた。

光任　すりや、御上使の廣綱どのには。

女　兩人　賤しい女中にお近附きかえ。

保輔　イヽヤ、知らぬ。

よし　ナニ知らねえ。アノ、これでもかえ。（ト懐中より墨附を出してソッと見せる。）

保輔　ヤア、そんなら首尾よく。

よし　ソレ、約束の墨附。（ト言はうとして、）墨黒にべつたり書いたこの文。

保輔　（きつとなり）まだ〳〵慮外な。（ト悪いといふこなし。）

よし　慮外ながら、わつちでなけりやアこんな仕事は。

保輔　ヤア、その雑言を。（トつか〳〵とお芳の側へゆき、引きとらへ、墨附を取らうとする。）

よし　エヽ、おきやアがんなせえ。

ト墨附をもつて逃げようとする。保輔引きとらへ、立廻る。風の音、トヒヨになつて、日覆より雁金群り、一羽おりて來て墨附を銜へ、直ぐに舞ひあがる。兩人驚く。光任これにきつと目を附け、思ひ入れ。

保輔　南無三。

よし　アノ、雁金に。オヽヽヽ。

保輔　（こなしあつて）無禮ものめが。（ト引ツとらへ、立廻りにお芳を切つて捨てる。）

光任　武士へ慮外は切り捨てが大法。

呼び　（向う揚幕にて）上使。

保輔　ハテ、心得ぬ。それがしこれに罷りあるに。

光任　又　候や御上使とは。

ト お芳の死骸起き上りて、又かゝるを、保輔切り倒し、刀を納め、墨附を銜へし雁金を見て、づか〳〵と花道へ行く。

御上使の御出迎ひ。（ト皆々出迎ふ。）

皆々　ハアヽ。

呼び　上使。

ト大鼓謠ひになり、向うより將軍太郎良門、二役およしの早替り、えんで衣裳、保輔と同じ形、長上下にて出て來て、この雁を見て手早く手裏劍を打つ。雁金落ちる。保輔見て「ソレ」と中程へ來る。良門つかつかと行き、雁を取り上げ、墨附をとつて懐中する。兩人顔見合せ、ぎつくり思ひ入れ。此うち良門のあとより、信兼、兼成、時義、花色に三桝繋ぎの長素袍、懸烏帽子、銘々扇を持ち、地謠ひのこしらへにて出る。奥より雷雲、以前の瓶子を持ち、あとより八十瀬、お國、東路、瀧野、花色に三桝繋ぎの

素袍の上ばかり、小結烏帽子にて、銘々笛、太鼓、大鼓、小鼓を持ち、皆々よろしく出で迎ふ。

光任　先刻お入りありしは、多田の御所より上使として、このたび始めての上京。

保輔　斯くいふ三田の源太廣綱でござる。

光任　して、只今お入りあられしは

皆々　いづれよりの御上使樣でござりまする。

良門　それがしことは、多田の御所より、御父滿仲公の上使。

女二人　最前お入りの御上使樣も、多田の御所より。

光任　して、御家名は。

良門　當御所にてはお見知りなきは御尤も。武藏の國、三田の鄕にて、人と成つたる、三田源太廣綱でござりまする。

保輔　ヤア。（ト、ぎよつとする。）

光任　先きに見えられました御上使も、今また御入來の御上使も、三田の源太廣綱どのとは、……ハテナア。（ト心得ぬこなし。）

八十　今日は、住吉寶の桝の、神事の御執行にて

お國　お奥のものを始めとして

東路　御殿殘らず打ち寄りて

瀧野　不調法なる私しどもが

信秉　四座の猿樂、能囃し。

秉成　御番組はそれ〴〵に

時義　皆住吉の謠ひもの。

八十　幸ひの折なれば、御上使樣への御饗應。笛の役目はこの八十瀨。

お國　お國はゆたかに小鼓の役。

東路　この東路は大鼓、

瀧野　續く瀧野は太鼓の役。

信秉　拙者どもは地謠ひに、武作次郎信秉。

秉成　坂戸の九郎秉成。

時義　阪東太郎時義。

皆々　囃しの役目、蒙りましてござりまする。

雷立　尊國君より神事の御酒を、頼光どのへ進ぜられて、斯くの通り。
光任　何はともあれ、御上使の御兩所。先づ〳〵これへ。
保輔
良門　然らば。

ト管絃になり、皆々本舞臺へ通り、保輔は二重舞臺へすつと上の方へ通る。眞中に光任、囃子方は皆皆二重舞臺へゐならぶ。

光任　して、御上使の趣きはな。
良門　上使の趣き、餘の儀にあらず。頼光には先達てより、病氣と披露し、引き籠りをるは、源家の重寶蜘蛛切り、鬼切り、紛失によつての事。承平の將門、天慶の純友、その殘黨の討手を蒙り、なくて叶はぬ蜘蛛切り、鬼切り。わけて一腰の名劍は、先年頼光公葛城山の蜘蛛を切つて、髭切を蜘蛛切と改む。然るにその蜘蛛の怨念殘りて、所持なす者を惱ますと聞く。右紛失の難を遠けん爲の虚病なりと、禁廷より御父滿仲公へのお疑ひ。早くも立越し、鬼切り、蜘蛛切り、受取り歸れよとの上使。
保輔　すりや、それがしが演舌の通り。
光任　先刻、北の方のお請けありし、初めの源太廣綱どの〻、上使の趣き、同じ事。
良門　殊に武藏の同產にて

保輔　しかも同名。
光任　同所よりの御上使。何はともあれ、御饗應の能囃子。
皆々　ハア、。

ト薄どろ〳〵にて、良門のかなたへ下り蜘蛛する。きつと見て

良門　又しても〳〵、刀に迷ふ蜘蛛の怨念。
保輔　さては。（ト思ひ入れ、チヨントト保輔の前へ簾おりる。）
良門　エ、。（ト扇にて拂ふ。）
雷雲　（ムツとして）ヤア、光任、猶豫いたせばよい事にして、尊國樣の御酒を頼光どのへ取次ぎせぬか。さなきに於ては、入道が直々に。（ト瓶子を持ち行かうとする、光任留めて）
光任　心得ぬその御酒を、頼光公へたつて勸める入道が振舞ひ。
雷雲　すりや、毒酒との疑ひか。是非ともこれを

トまた行かうとする。良門、瓶子を引つたくり、雷雲かゝるを、良門左に瓶子を持ち、右の手にて雷雲をポンと當てる。光任思ひ入れ。

光任　まさに瓶子のその御酒は。（ト行かうとする。）
良門　尊國君よりの下され物、疑ふ事はあるまいがな。（ト右の手にて瓶子の口を押へる。この時中指、瓶子

の口へ入る。驚きて）ヤ、、思はず瓶子の口、押ゆるに、わが指が口になつて抜けぬは、これは
したり、粗相な事を。（ト瓶子へ入れし指の抜けぬ思ひ入れ。）

女　ほんにマア、お氣の毒な。

皆々　ト始終どろ〳〵にて蜘蛛纏ふゆゑ、良門、瓶子にて蜘蛛を敲く。良門ウンと悶絶する。皆々驚ろき

光任　ソレ、御介抱。（ト侍女二人、良門のそば〳〵行き）

兩人　申し御上使樣。

ト介抱する。良門兩人を拂ひ、スックと立つて、あたりを見て狂亂のこなしにて

良門　ハ、、、、、。矢ッ張り瓶子の口が抜けぬワ。コレ、女子ども。

ト鼓唄になり、舞臺の簾靜かにおりて來る。これより良門、狂亂の所作のかゝりになる。

〳〵亂れ心や解けやらぬ、千筋の絲のあやめも知らず〳〵闇路に結ぶさゝ蟹の、緣にひかるゝ小車の、廻る因果は物思ひ、よしやうつゝに夢の花、ちらくもわかぬ仇心、浮氣思へは笹船に乘せてつれゆこもの、神崎へ〳〵やんれ白波うつや、鼓の川柳、水にもまれて、もまれて水にしみつゆるめつ音こそ入りけれ、しめて寢た夜のふたりの中の子寶、こゝに此花冬ごもり、春待つ花の懷に乳房尋ねん月の影、わやくな空や時雨どき〳〵寺々の鐘もみだるゝに霜夜の嵐、鳥と鐘とに思ひもあろが、オヽ時知らぬ月夜烏は、いつも鳴くしよんがへ、暫し留りてくれよ

かし、面白や〳〵しども中戸に伏しまろぶ、たゞ狂亂の有樣は、生體なくこそ見えにけれ。

ト よろしく振りあつて納まる。又、どろ〳〵にて良門悶絶する。侍女二人同じく介抱する。

兩人　モシ、お上使樣、お心が附きましたか。

良門　（心附くこなし）又もや蜘蛛の念慮によつて、ハテ、殘念な。……矢ッ張り瓶子が離れぬかっ

女二　御上使には御逆上と相見えまする。

良門　持病の眩暈、武士にあるまじき、面目次第もござらぬ。

ト又どろ〳〵にて蜘蛛まとひゐる。雷雲思ひ入れあつて

雷雲　その瓶子をば（ト良門にかゝる立廻りにて、瓶子ひけて毒酒こぼれしこなしにて蜘蛛にかゝる。蜘蛛死する）を見て、雷雲思ひ入れ。）瓶子の酒のこぼるゝと、忽ち蜘蛛の死んだるは。

光任　まさに毒酒。（ト良門、雷雲を取つて投げる。）

雷雲　こりや、堪らぬ。

ト下座へ逃げて入る。合ひ方になり、保輔の前の簾一面に卷きあがる。良門、二重舞臺へ上る。下座より美女丸、若衆方、長上下、振り袖衣裳にて、茶臺に茶碗を乘せ、持つて良門の側へ行く。

美女　御上使樣には、お茶一つ召しあがられませう。

良門（美女丸をぐつと見て）　それがしは生れ附いたる女嫌ひ、その廣綱に派手やかなる、美少年のお茶給仕。こりや、忝けないわな。（ト茶碗を取る。）

美女　何をお弄りなされますやら。

良門　して、其方のお名は。

美女　頼光が弟、美女丸と申す者、お見知りおかれて下さりませう。

良門　これはしたり、此たび始めてなれば、お顔見知らぬゆゑ、粗相申し上げてござる。眞つ平御免下さりませう。（トいろ〳〵詫びする。此うち保輔おしだまりゐて）

保輔　虎の斑は目に見ゆれど、人の斑は目に見えぬと、王位を出でゝ遠からぬ、源家の館へ似せ上使、御罰によつて、あのざま。

良門（思ひ入れにて）上使の眞僞を改むれば、先の上使のお詞をとらへて一詮議。

保輔　何がなんと。（ト左右方立ちかゝる。光任留めて）

光任　その眞僞わからぬ御上使へ、お口取りの珍物、申し附けし物、これへ。

侍女　畏まつてござります。（ト管絃になり、侍女皆々、結構なる高杯へ黄金を凄まじく積み上げ、持つて出で、保輔、良門の前へ直し）粗末なるお口取、御賞翫下さりませう。

と後へさがる。

兩人　これは。（ト思ひ入れ。）

光任　武藏の方より上京の方々へは。

兩人　アノ、これが珍物。

光任　都に近き井手の玉川、古歌もあつて優風流、心は變らぬ都と鄙、しかし井出の玉川、時ならぬ山吹の花、御覽に入れんため。

良門　すりや、山吹と名を替へて、こがね花咲く黄金の

保輔　賄賂を以て上使の手前、償ふのか。

光任　イヤ、左にあらず。二人の上使、眞僞わからぬこの場の樣子。

兩人　何がなんと。

光仕（扇をとつて開き見て）コレ、御覽下されい。（ト合ひ方になる。）

保輔　その扇面は。

良門　立波の模樣。

光任　風吹けば沖津白浪たつた山、唐土にては綠の林。

保輔　すりや、われ〳〵を、盗人、い、かたりと疑ふのか。

光任　誠源家の臣下なら、證據の割符が

良門　鎭守府の印鑑すわりしお墨附。（ト以前の墨附を出す。保輔思ひ入れ、光任取って）

光任　すりや、お墨附、これで疑ひ

良門　晴れたであらう。

光任（思ひ入れあつて）御覽に入れし扇の畫面はこの白波、それをおとりに見出さん爲、夜前市原野を夜廻りの折柄、怪しき非人、きやつ曲者と知つたるゆゑ、詮議せんと思ひの外、傘引きさき隱れしは、慥かに上使の其お方。さては多くの金銀を、衒り取らん爲なるか。

兩人（思ひ入れあつて）エイ。（ト金を礫に打つ。光任叩き落して）

光任　コリヤ、黃金を礫に打つたは。

保輔　賄賂を取らねば盜賊の惡名もなし。

良門　元より廣綱傷りならねば、志しは返し遣はす。

光任　すりや、黃金を

保輔　取らねば元の

良門　上使と

保輔　上使。

光任　然らば名劍、後程までに。

兩人　受取り申さう。

皆々　すりや、御上使樣には

兩人　これが勝手。

光任　然らば後刻、お目にかゝりませう。

（ト唄になり、光任先きに皆々奧へ入る。良門、保輔ばかり殘る。良門煙草盆を持ち、前へ出て

良門　御上使、ちよつと逢ひ申さう。

保輔　アノ、それがしに。（ト煙草盆を持ち前へ出る、合ひ方になり）出たが、なんだ。

良門　モシ、化けの皮が顯はれたらば、この廣綱が見遁してやる程に、早く歸れ〳〵。

保輔　今年始めて座頭だと思つて、大分大きな事を言ふな。歸つてよければ、おれより先きへ、われ歸れ。

良門　正眞の廣綱が歸るにも及ばぬ。尤も去年までなら、こな樣の自由にもなるであらうが、今年は新

らしく、成田の不動を請け人に頼んで、八百八町の旦那方へ、奉公初めの誠の廣綱。それだによつて、われから歸れと言ふのだ。

保輔　惡い奴に逢つたわい。（トこなしあつて）さう言へば、引摺り出しても歸すぞよ。

良門　こりや、面白い。歸るまいといつたらどうする。

保輔　知れた事、刀に掛けて。（ト刀を取りあげる。）

良門　われこそ刀で歸してくれうぞ。（ト拔きかゝる手をおさへて）

保輔　小癪な事を。

ト双方立ち上る。てんつゝ、早舞になり、向うよりお岩、さら毛束ね髪、振り袖やつし、手甲、脚絆の田舍娘。これを中間、紺看板にて棒を持ち、附いて出て來る。

中間　イヤ〳〵、在鄕ものめ。御殿へはならぬといふに。

いは　エヽ、何をやかましう言はしやんす。

ト せり合ひながら舞臺へ來る。舞臺の兩人は立廻り。これを見て中間驚き

中間　ヤア、拔いたワ〳〵〳〵〳〵。

ト下座へ逃げて入る。お岩、こは〳〵中へ入るを、引きのけ、また切り結ぶ。お岩、どうせうといふこなしにて、持つて出た笠にて押へ、三人きつと見得にて顏見合せ

兩人　エヽ、邪魔な女め。

いは　マア〳〵、待つて下さりませ。

ト留めるを引きのけ立廻り。薄どろ〳〵にて、保輔の刀、ポツと折れる。三人驚き

保輔　正に名作。

ト若黨一人出て

若黨　慥かに蜘蛛切り。

ト取らうとするを良門ポント切つて捨てる。大どろ〳〵、誂へ三味線入りの小太鼓の樂になる、蜘蛛良門の刀へ纏ふ、三人きつと思ひ入れ。

良門　ハヲ、心得ぬ。わが刀に血汐を注げば、忽ちに蜘蛛の群るは。

保輔　怪しき上使と察せしゆゑ、只一打ちと切りかけし、刀をうち折り、血汐の穢れにこの騷動。

いは　わが背子がくべき宵なりさゝがにの、蜘蛛の振舞ひかねてより、聞き傳へたる劍の不思議。

良門　帶せしわれもこの奇特、始めて知つたる、ハテ、業物。（ト刀を見て思ひ入れ。）

いは　さてはいつぞや葛城にて、討たれし蜘蛛の

良門　ヤ。（ト思ひ入れ。）

保輔　それぞ慥かに蜘蛛切り丸。（トきつとなる、良門手早く袖にて隠す。どろ〳〵止む、蜘蛛消える。）

良門　イヽヤ、これこそ我が重代。無銘なれども希代の業物、誠の武士の所持いたす一腰、刀を清めて。ト刀を出す。お岩、柄杓にて手水鉢の水をかけ、手拭を取つて、刀に恐れしこなしにて良門に渡す。良門刀を拭く。保輔思ひ入れ、管絃になる、三人顔見合せ思ひ入れ。良門刀を鞘へ納めようとする。保輔思ひ入れあつて

保輔　その刀、しばらく。（ト保輔落ちたるわが刀の鞘を取つて）お替鞘、進上いたさう。

ト管絃になり、いけころし。保輔鞘を持ち、良門の側へ行く。お岩、これに目を附け、眞中にてあとへ寄る。良門構はず刀を差出しゐる。保輔刀をきつと見て、この鞘に刀しつくり合ふゆゑ、良門ぎつくりして思はず振り向く。保輔と顔見合せ思ひ入れ。此うち田舎娘窺ひ見て、この時こなしあつて、ちやつと又あとへ寄る。

良門　すりや、身共が刀へ

保輔　手前の鞘が

いは　しつくり合うたは

保輔　さてはいつぞや諸羽の宮にて、密かに忍ぶ經櫃を、曲者あつて持ち行きしが、その行く先きは花

山の古御所、褄戸蔀も野嵐に、バラ〳〵〳〵と經櫃を、破つて出でし折も折、豐後の次郎が爭ひし、平親王將門が、持ち傳へたるさゝ蟹の一卷。

良門　源家の蜘蛛切り奪ひし樣子、死にもの狂ひに蹴立てられ、木の葉は散つて、蓬々たる、茅萱の茂る荒れ御所の、忍ぶ下家も野の錦。

いは　千早ふるびし神の末、皇居も今は荒れ果てゝ、狐狸妖怪の外とては、誰れしも住まぬ隱れ家へ、打つ太刀音に驚きて

保輔　見れば肌の蜘蛛の巢に、豐後の次郎が横死によつて

良門　思はず落せし一卷を、取らんとすれば、また曲者。

いは　これも落ちたる名劍と、その一卷を爭へども、事問ふものは山彦に、あいろも見えぬ眞の闇。

良門　百鬼夜行と疑ひし、氣高き美女が一卷を

保輔　爭ふ中にも奪ひしが

いは　猶も深夜に霧深く

良門　姿形ちは分らねど

保輔　さも腥さき風もろとも

良門　天地も裂ける動搖は
保輔　怪しき蜘蛛と
良門　誘ひし女は
兩人　慥かに妖怪。
いは　エ。（ト三人顔見合せ、お岩ぎつくりとなる。）
兩人　さては。（トお岩へかゝる立廻り、一卷を落す。）
保輔　この一卷は。
ト お岩手早く取り、兩人拔きかけようとする。お岩眞中にて一卷を開き、きつとなる。大どろ〳〵、
お岩其まゝせり下る。兩人驚き
良門　いよ〳〵怪しき女が振舞ひ。
保輔　蜘蛛切り丸は、たしかにそれと。（ト寄らうとする。）
良門　此方も怪しむ曲者が、鞘を證據に
保輔　そちが刀に、しつくり合うたは、慥かに曲者。
良門　すりや、その時の

保輔　曲者
良門　同志で
兩人　あつたなア。
ト 又どろ〳〵にて下の方へお岩せり上がる、
良門　これに附けても今の賤の女。
いは　わたしや、先刻にから此處にゐます。
兩人　すりや、それに居つたか。（ト思ひ入れ）して、いづくの賤の女。
いは　在所は、下總猿島郡。
兩人　ヤ。（ト思ひ入れ。）
いは　岩井の鄕のもの、尋ぬる人があつて。
保輔　然らば、暫くそれがしが、通達いたして遣はさう。
いは　それは嬉しうございます。どうぞ連れて行つて下さりませ。
保輔　賤の女を同道しては　（ト行かうとするをお岩とらへる）ハテ、聞きわけのない。
ト 振り切る。保輔、懐の袱紗包みの岩井櫛を落す。
いは　エヽ、つれないお人。（トつんと此方を向く途端に、櫛を取上げ、合點のゆかぬこなし。）

良門　まだこなたには聞きたい事もあれば、座席を改め、何かの事を。

保輔　そりや、此方にも、かねての望み。

良門　然らば當家の使者の間へ。

いは　（思ひ入れあつて）　こちらにござんす御上使さん、ちつとあなたに。

保輔　そちや、外に尋ねるものがあると申したではないか。

いは　イヽエ、矢ッ張りこの櫛。（ト言はうとして）　どうぞ、待つて下さんせ。

保輔　アノ、それがしに。……ハテ、變つた尋ねもの。

良門　然らば、お先へ參るでござらう。

いは　どうぞ、さうして下さんせ。

保輔　先づそれまでは

良門　同じ家名の

保輔　上使と

良門　上使。

保輔　まづ〳〵、お先きへ。

良門　後刻面談いたすでござらう。

ト管絃になり、良門思ひ入れあつて、奥へ入る。お岩、保輔殘り、兩人思ひ入れあつて

保輔　最前より怪しき女と思ひの外、それがしを止めしは、仔細あつての事なるか。

いは　こりや、あなたのでござりますか。（ト拾ひし櫛を出す。）

保輔　その岩井櫛は、それがしが懐中いたしをつたが　（ト懐を尋ねる。）

いは　たつた今、こゝで拾ひました。

保輔　それは忝けない。こりや、大切の品。（ト懐中する。）

いは　それを大切とおつしやるからは　（ト懐より袱紗に包みし鍬形を出し）　これ、お覺えでござんすかえ

ト合ひ方になりて、保輔取りあげ

保輔　こりや、黄金の鍬形。これを所持なしをるからは、

いは　わたしや、下總の國猿島郡で、岩井の郷の賤の女でござんす。

中間　（窺ひ出て）　ヤイ、女め。うぬ、案内もなく御門を通るゆゑ、咎めたれば逃げ廻つて、よくもお庭へ來たな。サア、出をらう〳〵。（ト お岩を引き立てにかゝる。）

いは　マア〳〵、待つて下さんせ、それどころではないわいな。

中間　うぬ、御上使と馴れ〳〵しく物を言ふが　おれは聾ゆゑ、何も聞えぬワ。サア〳〵、來い。
　トまた引き立てるを、保輔中間を取つて押へ
保輔　コリヤ、女。それがしこそ武者修行と、世を偽つて白波の
いは　ア、モシ、人や聞く、必ず密に。
保輔　イヽヤ、こいつは聾。
いは　ほんに、さうでござんしたなァ。
保輔　關八州を經廻るうち、しかも正月、鹿島なる
いは　常陸帶の神事にて、闇がりながら拜殿の、帶にて緣を結ぶの神。引き合せにはその夜の雜魚寢、
　二世の誓ひと差櫛の、黃楊にはあらでわたしが、在所の、一村ばかり、さした村名の岩井櫛。
保輔　われも重代二世のしるしに、黃金の鍬形。
いは　下さんしたを大事にして、佛樣とも神樣とも、思うて朝夕願ひ事。
保輔　後の證據と持つてゐたか。
いは　持たねばならぬ只だ一夜、淺き契りもわたしが百歲。
保輔　そりや、われとても深き思ひに

いは　一度の契りに宿したる、お前の胤を、月滿ちて
保輔　さすればその夜のさし汐に、まだ闇がりの常陸帶、神事と共に
いは　嬉しい雜魚寢の男はお前、それとも知らず、花山の院にて逢うたのは
保輔　二世の誓ひのわが妻と、知らぬその夜の怪しみは、蜘蛛の働き、まさに妖術、世にも不思議と思ひしが
いは　未來をかけたわが夫に、何をか隱さん、大和なる、葛城山の女郎蜘蛛、その妖術を此身に受けつぎ、皮肉に分け入る、千變萬化はわが自在。
保輔　女に稀れな賴もしき、その魂ひでいよ〳〵安堵。定めてその身に大望は、察するところ叛逆の
いは　父はこの世を去つたれど、一度源家へ恨みをなし、その妄執を晴らさんと、女ながらも一念は
保輔　百萬騎にも勝つた不敵、諸國を一人ねらふうち
いは　この程思はず古御所にて、父の用ひしさゝ蟹の、一卷も手に入れて、猶も妖術心のまゝ。
保輔　さすれば、おことが氏素性は
いは　言はぬは言ふに岩井櫛、あれを證據に。
保輔　きつと思ひ入れ）さては相馬の

いは　内裏と聞くも恨めしく

保輔　父の仇を報はんと

いは　はる〴〵登りし都にて

保輔　忍ぶその身の隠れ家は

いは　色をも捨てゝ枯れ〴〵に

保輔　花山の御所にて思はずも

いは　逢うたは未來と

保輔　誓ひし女房。

いは　思へば盡きせぬ　（ト中間起きあがつて）

中間　様子は。（トかゝるを保輔押へ。　聞えぬ。

両人　縁ぢやなア。

トこの仕組よろしく

管絃のつなぎにて、この幕引き返す。

ト中間が顔をくらはす。そこへ倒れる。お岩思ひ入れあり）

ひやうし　幕

本舞臺、三間の間二重舞臺、東西の舞臺とも、竹の節欄間にて翠簾をおろしあり。見附に金襖、眞中二重舞臺に、園生の前、小打着、緋の袴にて琴を調べゐる。八十瀬、お國、東路、瀧野、腰元にて控へる、舞臺前しがらみの池の方、梅の立ち木へ鶯來て囀りゐる。跳への琴唄にて幕明く。

園生　鶯の、朝毎には來つれどもと、梅の花に來る囀、風雅の常。今日神事によつて住吉の神へ捧げの琴の一曲、それを慕うて囀づるは、ハテ、しほらしい鳥ぢやなア。

瀧野　北の御方には、御奉納の一曲が、相濟みましてござりまするか。

八十　今日は思ひがけない御上使で、いろ〳〵とのお心遣ひ。

お國　只今御奉納の一曲承はりましたが、面白い事でござりました。

園生　全體琴の組といふものは、源氏をおもに入れたものぢやわいの。

四人　その源氏とやらは、色めいたものではござりませぬか。

園生　されば、源氏といふものは、箒木の森より六十帖を綴りしとあり。森の茂りの俤、ありなしの心これ佛法の肝要。空形中の文字妙理、見る者の心によつて、さま〴〵の違ひ。源氏を讀んで出家せし人、また家を滅せし人その數多し。其方衆も好色に心移らぬやう、慎みが第一ぢやぞや。

瀧野　ほんに、あなたのお側に御奉公いたしますれば

皆々　私しどもの仕合せでござりまする。

ト東西の屋體にて

良門　ヤイ、水のせまき岩間に住み馴れて、さぞ廣澤の池の鴛鴦。

保輔　ちよつと〳〵に欺されて、もうかんざしはこればかり。

ト合ひ方になり、舞臺前の池へ鴛鴦むらがる。東西の御簾あがる。上の方保輔、上下鉢巻にて、胡坐をかき、德利と茶碗を置き、結構なる火鉢の上へ小鍋をかけ、煮てゐる。下の方良門、矢張り長上下にて花盆に花を並べ、山茶花を活けてゐる。

園生　左右の座敷は御上使さま。

八十　左樣でござりまする。御饗應はこれがよいとお好みにて、いろ〳〵花を、お取り寄せなされてゞござりまする。

東路　御自身にお花を、お活けなされてゞござりまする。

瀧野　これはしたり、こちらの御上使樣は、如何にお好みなさればとて

お國　御自身にお小鍋立てにて茶碗酒、そして鉢卷をなされて、怪しからぬ。

保輔　こりやア、おれが當り前。上使々々といかめしくはするものゝ、武藏の三田で育ちたれば、二本差しでも組屋敷同前、時によつては町の裏住み。そこでおれへの饗應は、七五三の料理より、よ

〳〵好いた茶碗酒、葱に鮪のすつぽん煮、こいつは呑めるわい。（ト酒を呑んでゐる。）

お國　アレ、御覽なされ。

園生　コリヤ〳〵、御上使樣へ、粗相申しあげまいぞ。

良門　ハテ、蓼喰ふ蟲も好きゞゝと、聞けば彼方の御上使は、饗應に茶碗酒。それがしは又、好きの道とは言ひながら、花を活けての樂しみ。併しお庭先へ廣澤の池を取り入れて、あの鴛鴦の群れる樣は、ハテ、よい眺めではある。（ト矢張り花を活けてゐる。）

八十　申し、御上使樣、お花の水を取つて參じませうか。

東路　お花の塵を掃除いたしませうか。（ト立ちかゝる。良門おどろき）

良門　コリヤ〳〵、腰元ども。身共は女は大嫌ひ。必ず、寄るまいぞ〳〵。

東路　八十　ハイ〳〵。

保輔　（酒を呑んでゐる。）斯う引きうけた所は、どうもたまらぬわい。

ト煙草をのむ。合ひ方替り、奥より美女丸、花盆に花挿しを載せて持つて出て、良門の前へ行き、

美女　御上使樣には、お花がいりませうと存じまして、お水を持つて參りましてござりまする。

良門　これは〳〵、美女丸には、仰せ附けられいで、御自身に花の水を、有り難うござりまする。サヽヽ

これへ〳〵。

美女　左様なら、お側へ參つてもよろしうございまするか。

良門　女儀と違うて、とんと苦しうござらぬ。

女四人　アレマア、あんまりな御上使さま。

美女（良門の前へ行き手を突き）武士は武藝が第一でございまするが、琴碁書畫の外、茶の湯、立花、私しは立花が習ひたうございまする。何卒御指南下されませうならば

良門　これはしたり〳〵。マア、お手を上げられませう。隨分お心易いことでござる。先づお花にも眞行草がござつて、いろ〳〵に弄ぶもの。山茶花なら山茶花の眞を入れまして、斯うまた流れの枝を。（ト花にて教へる。）

美女　むづかしいものでございまするが、面白いものでございませうな。

良門　イヤ、また面白いのは（ト美女丸が顏をちつと見て）コレ、この水仙でござる。（ト花を取りあげ）水仙の花の姿や若衆振りとは、古人の發句。

美女　エ。

良門　ハテ、憎からぬ。（ト美女丸の手を取り）水仙でござるなア。

美女　そんなら御指南なされて下さりまするか。

ト良門に寄り添ふ。此うち園生の前、腰元、そろ〳〵下の屋體際へ來り、樣子を聞く。保輔も立ちあがり聞いてゐる。

良門　花の大事も、人の心と同じ事で、眞實の眞をよく定めて、外の枝へ段々目を附けるが身の粧ひ。その花のあでやかに、心も惚れて

美女　さればでござりまする、心の花が花に惚れ、花の心が心に惚れるとやら、申すこともござりますれば。（ト互ひに思ひ入れある。）

良門　花は正面より見るものなれど（ト美女丸を後から引き寄せ）斯う後から眞の添枝そへど、うしろが大事。とかく根じめが肝心でござる。

美女　隨分承知でござりまする。（ト思ひ入れあつて良門へもたれる。）

良門　根じめが極まれば、ちよつと水をつがねばならぬ。

美女（思ひ入れあつて）それをつゆと仰しやるは、斯うでござりまするか。

良門　こりや、モウ、花の傳授を許さねばならぬわい。

ト皆々悦くりする。保輔ちやつと元の所へ來て、煙管にて火鉢を叩き立て、煙草をのむ。

女　申し、北の御方様。
四人　皆の者、お奥へ。
園生
四人　ハイ、、、。

トこれより本管入り、雲上なる誂への合ひ方になり、腰元四人、下座へ入る。引き違へて光任出て來て、平舞臺にて

光任　北の御方には、御上使の御饗應、御苦勞に存じまする。
園生　其方もさぞ心づかひ。ちと休息しやいなう。
光任　ハッ〳〵、休息も勝手で仕つりましたが、先刻美女丸様へ素讀を敎へかけましたが、どれへござつたやら。
園生　美女丸は次の間の、御上使のお相手に。
光任　お慰みに素讀でござりますなら、拙者も參つてお相手に。
園生　ア、コレ、行つては惡い。イヤ、それには及ばぬわいなう。
美女　（思ひ入れあつて）光任様、私しはこれ御上使様に、立花のお稽古いたしてをりまする。
光任　それは一段の事でござりまする。

良門　好きより上手と、忽ち上達でござる。ハ、、、、、。（ト美女丸へ思ひ入れ。）
光任　然らば、拙者も先刻の讀みさしを。（ト見臺の本を取り出し、煙草のみながら思ひ入れあつて）「皇極經書に曰く、日の月に望む時は月蝕し、月日を掩ふ時は日蝕す、猶火と水の相尅の如し」こゝを思へば何事も心に掛けるは愚癡の至り、人の心はさま〴〵にて、好き不好きのあるものぢやなア

ト此うち園生の前、保輔の屋體のそばへ來て、鴛鴦を見て

園生　申し御上使様、池の面の鴛鴦は、可愛らしいぢやござりませぬか。
保輔　わしやア、鴛鴦よりは矢ッ張り葱鳥、鎌倉川岸の鷄はうまいやつサ。

ト矢張り火鉢にて鍋燒きをしてゐる。

園生　喰ものゝ事ではござりませぬ。あの池の鴛鴦のやうに。（ト保輔へ思ひ入れ。）
光任　北の御方には、鴛鴦のお尋ねでござりますが、それは彼の唐土、宋の大夫釋明、その妻美にして、國色に名あり、康國これを奪うて宮に入る。
保輔　何だか、チンプンカンだが、そいつは唐の間男だね。
光任　先づお聞きなされい。韓明甚だ恨みを含んで自殺す。その妻これを慕ひ共に死す。これを埋むるに一夜を經て連理木を生ず。又鳥となつてこれ鴛鴦なり。

保輔　ハテ、實深い鳥だな。道理で水の中を歩く時に、雌と雄とくつゝいて

園生　番ひ離れぬ比翼の鳥。

保輔　成る程、裏店の獨り者が酒くらふやうに、手酌でもうまくねえかえ。

園生　そんなら九獻のお相手に。（ト思ひ入れ。）

光任　ヤ。（ト心得ぬこなし。）

保輔　九獻や一升なくつてもよい。もう一獻つく、取りにやつて、隣りの山の神や、かゝア左衛門の氣取りになつて。

園生　（思ひ入れあつて）お合ひをするには、辛氣らしいこの緋の袴。

保輔　親方の葬ひより外、着た事のない上下も、ひつたくつて

ト園生の前、緋の袴を取り、保輔上下を取る。光任きつとなつて

光任　コリヤ〳〵、みさきには、（ト言はうとして）其元亂れて末納まらずとありしが、北の方には苦々しき、どうやら禮儀も打忘れて、酒は亂れの基ゐと戒め。

園生　でも、御上使樣への御酒のお相手、どうで亂れにやならぬわえ。（ト思ひ入れ。保輔の側へ行く。）

光任　御上使樣饗應とあれば、是非もなけれど、ハテ、情けない。（トぢつとなる。）

保輔　これはノ〳〵、北の方には、あんまり恐れ入谷の鬼子母神、こいつは江戸の古い洒落サ。

園生　（そこらを見て）杯はどこにあるえ。

保輔　ナニ杯どころか、茶碗酒サ。

ト茶碗を出す。園生の前おどろき

園生　アノ、この茶碗でお茶呑むやうに、九獻たべるのかや。

保輔　（茶碗を敎へる。）こゝの青いところまで一杯つぐのを、青つきりといふのサ。

園生　成る程、土器の内くもりのやうなものぢや。

保輔　ナニ、内ばかりぢやない。外も雪空のやうに曇つた時は、鐵砲が命だ。それで呑むが、裏店のやりばなし暮しサ。

光任　わが君を打ち捨ておかれて、アノ仕儀。……とは云へ、差當る御上使の事。ハテ、何としたらよからう。この屈託を紛らすには、好きの學問。

ト矢張り本を見ながら煙草をのんでゐる。このうち美女丸、良門思ひ入れあつて

良門　斯う打ち解ける上からは、いよ〳〵兄弟の因み。

美女　そんならお前は。（ト菊の枝と梅を取る。）

光任　成る程、花に喩へたる親子兄弟、禮儀が第一。

良門　活花の傳授といふは、萩を活けるに湯を使ふやうなもので、この手をちよつと溫めて

ト美女丸の懐へ手を入れる。

美女　アレ、こそばうございます。

良門　（心得ぬこなしにて）この乳は。

美女　ハイ、わたしや女でございます。

良門　ヤア、ゝゝゝ。（ト恟くりする、美女丸上下を脱いで）

美女　保昌が娘小式部と申します者。いつぞや御主人、美女丸様、御父滿仲公のお怒りあつて、首討てとあるを、お身代りを立て、其後山門へ御登山。わたしは子育ちがないとあつて、女を男にして、御主人より有りがたい、美女丸様の代りになし下され、御不便加へられて御養育。そのやうに御丁寧に仰しやるものではございませぬ。どうぞ未來をかけて。（ト良門に寄り添ふ）。

良門　ハテ、さう聞いては、どうやら身共も。

保輔　隣りの長屋ぢやァ、何だか面白い話し合ひと見えるわい。

園生　何であらうぞ。（トそろ〳〵と下の屋體の側へ行く。）

光任　兼ねて保昌どのには、よい聟がねを尋ねてゐられたが、思ひがけない小式部、御上使と不埒と思へど、こゝを以つて、詩經に曰く、桃の夭々たる、しん〳〵たるその花は、この子こゝに歸ぐ、桃の花の盛んなるを見て男女婚姻をなす、相共に和順してよろし。

良門　光任どのゝ金言を聞いては、女嫌ひも、好物にならねばならぬわい、

ト美女丸を引き寄せる。

美女　アヽ、モシ、御上使樣、それではあんまり恐れ入ります。

園生　アレ、あの子が恐れ入ると云ふわいな。（ト走つて保輔の側へ行く。）

光任　イヤ、申し、北の御方、小式部が如何なる貴人に對しましたか。きつう恐れ入りますな。

ト笑ふ。保輔思ひ入れあつて

保輔　ありやァ、若衆ぢやァないか。

園生　イエ〳〵、美女丸と申す若衆にして置きますが、實は女子で

保輔　初ものか、それでは恐れ入谷の

園生　鬼子母神さま程、子の出來さうなあの子の顔附き。（トそろ〳〵と下の屋體の側へ行く。）

光任　聖人も此子こゝに歸ぐと、陰陽の心をいはれたわえ。

良門　ハテ、珍らしい。七十五日の初ものを。
美女　これは痛み入ります。
園生　（悔くりして、こちらへ來る）アレ、痛みいるといな〳〵。
光任　小式部が痛み入ると申しますのか。
園生　さうぢやわいの。
光任　子心にも、よく〳〵迷惑な事と見える。ハテ、氣の毒千萬な。
保輔　したが、そいつは痛み入りさうなもの。
美女　斯うなるからは、外に悪性はならぬぞえ。エヽ。（ト良門の腕へ喰ひつく。）こりや、齒形のつかぬは。
良門　ヤ。（ト隱す。美女丸また腕をまくり）
美女　この痣は。
良門　コリヤ。（ト引き廻して抱く。）
園生　御上使も
保輔　ドレ、お相伴。（ト園生の前、保輔に寄り添ふ。）

良門　可愛の者やな〳〵。
ト東西の屋體へ御簾おりる。光任殘り
光任　ムウ。（ト思案する。時の鐘になり）みさきどの、心體といひ、小式部があの樣子、心あつての事か、ハテ、ナア。（トとろ〳〵にて上の屋體へ蜘蛛まとひ下りる。光任きつて見て）ハテ、心得ぬ。寸に延びたるあの蜘蛛のあれへ纏ふは不審しく、これに附ても心ならぬは、この程都に徘徊なす怪しき女。葛城山の蜘蛛の術を其身にうけて行ふと聞く。正に先年亡びたる將門、純友の殘黨ならん。小賢しきとは思へども、神力勇者に勝つこと能はずの道理。ハテ、心にくき、さゝ蟹の振舞ひぢやなア。
保輔　コリヤ、園生の前、心を附けい〳〵。
光任　あの聲は慥かに御上使。
ト薄どろ〳〵にて御簾まき揚げる。園生の前保輔に凭れ苦しみゐる。この前、下り蜘蛛する。保輔きつと見て
保輔　ハテ、心得ぬ。園生の前と枕交せしその折から、茫然となりしは。
園生　このさゝ蟹が苦しめしか。
保輔　ハテ、恐ろしい。（トどろ〳〵、此うち襖を明けて窺ひゐたるお岩、この屋體の方を見る、前にある鏡臺へ仕掛

けにて、お岩の顔蜘蛛の姿にうつる。保輔これを見て、）さてこそ、鏡へ蜘蛛の姿が。（トこちらを見る。
お岩と顔見合せ、お岩襖をピツシヤリしめる。）　ムウ。
ト思ひ入れ。光任ちつと考へ

光任　北の方のその有様は。

園生　御上使様が、あまり嬉しいお心ゆゑ、それにほだされ、つい枕を交したわいなう。
ト光任きつとなり

光任　ハテ、是非もなき、戀は心の外ぢやなア。

保輔　園生の前が身共の心に隨ふ上は、茶碗酒の下様を止めにして

園生　今改めて。（ト千秋萬歳の謠ひ、下座にて諷ふ。）

三人　これは。
ト驚く。三味線入り小鼓の樂になり、保輔、園生の前、平舞臺へ下りる。下座より八十瀬、お國、東路、
瀧野、三方に土器、島臺、蕗の臺、長柄、くはへを、持ち出て來て

八十　わが君様には御病氣ながら、何かの様子をお聞きあつて

お國　お顔の似たるを幸ひに、北の方となつて計られしは、能勢の判官が娘御。

八十　みさきさんが、日頃尋ぬる許嫁の殿御は、今日の御上使にて

お國　酒にみだれて戀ひ慕ひしは、不義のやうには思へども、矢ッ張り貞心。

東路　早う御婚姻のとゝのへ、三々九度の杯を

瀧野　取り交せよと有り難い上意。

三人　早うお杯をなされませいな。（ト保輔園生の前の前へ直す。）

園生　有り難い君の御上意にて、只今婚姻の杯事。頼光公の御所勞ゆゑ、入り込む武士は心々と、それを計つて光任どのと言ひ合せ、お顔の似たる北の方となつて、勿體なくも何かの様子を、窺うたのぢやわいなア。

光任　すりや、御上使が、こなたの云ひ號けであつたよな。

園生　それぢやによつて、三々九度の杯を。

女　早うなされませいなア。

三人　ト あひに相生のと謠ひになり、園生の前土器を取りあげる。この時お岩、つか〳〵と出で、土器をとつて打ち割る。皆々悶くりして

女
三人　ヤア、こなさんは見馴れぬ女中。

園生　一世一度、大事の婚姻の杯、割らしやんしたは

いは　腹が立つから。

皆々　エヽ。

いは　（保輔をとらへて）　お前、マア、何でござんす。在所のわたしでも構はず、いとしいの、可愛いゝの、死んでも離れぬ女夫ぢやのと、約束して置いて、それにマア、畠ぜゝり、村の者から隣り村、誰れでも彼れでもお嫌ひなしの性悪るさん。そしてマア、色さんといふは、結構な着物着飾り、美しい奥様。お内も結構、綺麗な夜着や蒲團着て、寐さつしやると思へば腹が立つ。なんぼ、わたしがこんな在所ものぢやというて、見替へられてどうせうぞいなア。

保輔　うぬ、一討。（ト抜きかける。）

園生　モシ、めでたいこの場の事なれば、マアヽ、お待ちなさんせいなア。

八十　何はともあれ、御上使様へ慮外な女中。

皆々　早うこゝを下らしやんせいなア。

保輔　三々九度の杯を、打ち割つたる不届き者、捨て置かれぬ女なれども、いはゞめでたき折りなれば赦しくれうが、改めて婚姻の酌をしろ。

いは　エヽ。（ト悔りする。）

女皆々　否なら、こゝを下らしやんせ。

いは　サア、それは

女皆々　諂ひものでも諷やるか。

いは　サア、それは

皆々　サア、ヽヽ。（トお岩を引つ立て）　きりヽヽ出て行かしやんせ。

トお岩泣くヽヽ思ひ入れあつて立ちあがり

いは　ほんに、マア、何の因果で都へ登り、辛い憂き目に逢ふぞいな。矢ッ張り在所で麥畠の、霜ふみ附けが増しぢやもの。情けない身になつたわいなア。

ト跳への合ひ方になつて、お岩思ひ入れあつて、見返りヽヽ花道へ行きかゝり、きつと思ひ入れ。ばたばたと光任の側へ行き

モシ、捨てる神あれば助くる神、どうぞ色になつて下さんせ。

光任　（此うちぢつとなつてゐて）これは又、不埒なる事を。

いは　但しはお否かえ。

光任　サア、それは

いは　さうぢやあらうが、どうぞ間に合せでも大事ない、色になつて下さんせ。

ト此うち奥より、腰元三人出かゝりゐて、この時

三人　イヤ、間に合せでない、ほんまの色を取り持たう。（ト合ひ方になる。）

いは　エヽ。（トびつくりする。）

腰一　最前から聞いてゐれば、あんまりいとしい事でござんすが

腰二　言ひ交した男に見替へられたゆゑ、面當てに急に色が欲しいから

腰三　間に合せでも大事ないと言はしやんすが、眞實こなたに惚れてゐる

ト お岩きつと思ひ入れあつて

いは　男があるとは、ほんの事かえ。

三人　なんの嘘を言はうぞいなう。

腰一　今日お入りの尊國樣ぢやわいの。

いは　エヽ。（ト思ひ入れ。）

女六人　どうして、マア、尊國樣が。

腰一　ハテ、さういうて欺して……いぢめてな。（ト思ひ入れ。お岩嬉しきこなし。）

いは　さういふ事なら、憎い男へ面當てに、早う連れていて下さんせいなア。

腰二　ハテ、せわしない。マア〳〵待ちや。なんぼさう言つたとて、尊國樣のお上さんになる事。

腰三　そんな形でも行かれまい。何ぞよい事がありさうなもの。（トそこらを見て、十二單衣を見て）

腰四　幸ひ〳〵、こゝにみさきさんのお召しなされた、十二單衣　これを着せて。

三人　お后さまにせう〳〵。（ト捨ぜりふにて、十二單衣をお岩へ着せて）それでこそ、尊國樣のお后さま。

いは　アイ、お后さまぢや〳〵。（トそこらを見せ廻り、保輔へ思ひ入れあつて）お后さまでござんすわいなア。

保輔　ヤイ、女、それがし夫婦を恨むるは尤も。如何にも武者修行の砌り、われと言ひ交したに違ひないが、今改めて緣切つた。

いは　エヽ。

保輔　二世の印と取りかはした岩井櫛、身重のわれと盡未來、緣切つた。

ト岩井櫛を投げてやる。お岩取つて

いは　ハアヽ。

ト時の太鼓になり、下屋體にうちにて

良門　只今打ちしは五ツの太鼓。蜘蛛切り、鬼切り、受取り申さう。

ト管絃になり、簾巻き揚げる。うちに良門、この時上の屋體より尊國君、以前の形にて出て控へゐる。

光任　イヤ、仰せまでもなく、只今お渡し申さう。

園生（驚き）アノ、二振り共に。

良門　保輔　われ〳〵へ。

光任　お渡し申す、先ツこの通り。

ト刀を腹へ突き込む。どろ〳〵にて、お岩ふるふ、皆々驚き

皆々　これは。（ト篠入りのやうな合ひ方となる。）

光任　御推量の通り、二振りとも疾くより紛失。

良門　保輔　すりや、申し譯に。

光任　光任が切腹、何卒滿仲公へお執成し……それについてもこの女、疑ひもなき將門が殘黨、最屈竟は、それがしが生れは辰の年月日時、蜘蛛の妖術行ふ者に、血汐をそゝげば、忽ちに妖術消ゆると承はれば、叛逆人の根を絶つ爲、また申し譯のこの切腹。

いはすりや、光任が切腹に、わが妖術も消え失せしか。エ、、口惜しい。

光任　忠死の魂ひ、マツ此通り。

ト腸を掴み出しお岩に打ち附ける。大どろ〳〵、焔たつて、お岩の懐より一卷抜け出で、お岩消える。

光任、笛をかいて落入る。園生の前こなし

三人　怪しき女。（ト奥へ入る。）

園生　叛逆人の餘類とは言ひながら、お腹の胎兒は夫の胤、義理ある女子を殺しては、夫へ立たぬ。あと追つかけて、さうぢや。（ト同じく下座へ入る。）

尊國　最前より樣子を聞くに、怪しき上使廣綱。是非一人は似せ者ならん。先づそれよりは何かの企て、一先づ當家を立歸らん。

良門　尊國どの、暫くお待ちやれ。

尊國　何がなんと。

良門　若君を擒に、賴光公を味方に附け、四海を心の儘にせんとは、この廣綱がゐちやア、マア、ならない。殊に、最前入道が毒酒の計略。心にくい第一番。怪しいは、似せ上使のお身樣は、誰れに賴まれて來た。それを言つてしまはつしやい。

保輔　イヽヤ、知らないワ。

良門　大方さうであらうと思つた。市原野の野伏りども、早く參れ。

三人　心得ました。（トばた〳〵にて前幕の乞食三人走り出て來る。）

保輔　ヤア、わいらは。

乞一　市原野の野伏り、骨箱の六。

乞二　こなたの手下の落葉の松。

乞三　とぶ板の八。

三人　サア、尋常に、本名を名乘らつしやい。

良門　斯うなつちやァ是非がない。百年目だと、きり〳〵言つてしまはつしやい。

保輔　エヽ、いま〳〵しい。斯くなるからは何をか包まん。盗賊の張本、袴垂の平井保輔とはおれが事だ。

皆々　さてこそなァ。

保輔　われ盗賊を業となし、數萬の軍用金を集め、四海を握らんと思ひの外、二才野郎に見顯はされたか。チエヽ。殘念や、と言つたらとのからうが、マア、否だ。

良門　そりや、又なぜ。

保輔　コリヤ、お定りのおれが悪黨は當り前。この袴垂は平井の保昌が弟なれば、源家恩顧の大忠臣、大宅の太郎が死したりとも、大磐石、實事師だワ。

良門　イヤア、。（ト悔り、思ひ入れ。）

保輔　サア、御上使の化け損ひ、今年始めて座頭も、まだ赤子の事なれど、お江戸隨一御贔屓を、頭にかむつた金冠り、その將門の殘黨、白狀させるは親父が折檻。新板替つた今年の顔見世。ひつくり返して何れも樣、あいつ一番、しめてお目に掛けませう。ヤツトコトツチヤア、ウントコナア。ト鼓の合ひ方になり、保輔肌脱ぎ、股立ちを取り、吉例の見得。

良門　そんならわれが

保輔　何と肝が潰れべい。

良門　チエヽ。（ト口惜しきこなし。）

美女　（出て）最早遁がれはござんまい。こなたの戀に迷うたれど、心中に事寄せて、肌に齒形の附かぬといひ、七つの痣のあるからは、將門の殘黨。枕交せし言ひ譯は、先ッこの通り。ト懐劍にて自害する。良門首を討つ。遠寄せ。

良門　あの、遠寄せは。

保輔　汝を取り卷く味方の手配り。最早叶はぬ、本名名乘れ。

良門　この上は、保輔觀念。

ト どんちやん早めになり、良門立廻りあつて、上手の網代塀切り破り、飛び込む。續いて乞食三人入る。

皆々　曲者を取り逃しては

保輔　イヤ、氣遣ひない。八方を取り卷き置きたれば。

尊國　もう、この上は保輔。　ト保輔へ拔いてかゝる。立廻りあつて）

兩人　ドツコイ

ト女形皆々長刀を持ち、この見得よろしく、チヨン〳〵にて道具廻る。

本舞臺三間の間、九尺高足の亭屋體、御簾かけあり、瓦屋根高欄、物朱塗り、東西網代塀、紅葉の吊り枝、よき所に井筒、どんちやんにて道具納る。トバツタリ音して誂へ本神樂やうの鳴り物になり、東西の塀を切り破り、上の方良門、下の方お岩、以前の形、拔刀にて出て、きつと見得。始終遠寄せ。

兩人窺ひ〳〵、背中合せに行き當り、双方顏見合せ、「ヤア」、ト思ひ入れ、このうち切破りの穴より捕り手二人、四天の形にて出て窺ひゐる。兩人思ひ入れあつて

良門　姿形はかはれども、そちや最前の

いは　御上使樣か。

兩人　さてこそ。（トかゝる、兩人立廻りに、白刃を掴み、兩人思ひ入れあつて）

いは　白刃を恐れぬこの樣子。

良門　賤の女とても、刀の立たぬは、さては不死身か。

捕手兩人　捕つた。（トかゝるを、引き廻して立廻り。）

良門　不死身の孫は稀れにして

いは　もしや尋ぬる下總の、相馬內裏の、百官百司。

良門　平親王の謀叛も、大望空しく遂に滅亡。（ト立廻り。）

いは　一門郎黨ちり〴〵に、せめて血筋の兄妹を、繫ぎ馬の旗までも

良門　敵に奪はれ、その甲斐も、なき身の哀れ、幼きとき

いは　顏見知らねば、これまでに

良門　仇に過せし年月も

いは　思ひ掛けなき

良門　不死身と

いは　不死身。

良門　すりや、疑ひもなき

いは　血筋の兄弟。

良門　姉ぢや人。

いは　弟良門。

良門　七綾姫で

兩人　あつたなァ。（ト思ひ入れ。）

捕手二人　捕つた。

ト かゝるを切つて捨てる。どろ〳〵にて七星顯はれる。きつと見得、小太鼓の樂になり

良門　ハテ、心得ぬ。虛危室壁、南方の宿星太白星、南にたんだくなし

いは　客星中を貫く、これを易といふ、判斷なせば

良門　取りもなほさず澤雷陽。

いは　今一陽の時を得て、旗揚げなさん吉瑞なるか。

良門　圭婁胃は西に當つて、よく守れども

いは　男ゆゑには二道を思はず、却つて不孝の罪。

良門　鬼柳の星は北にして、しかも東の鋭きは

いは　敵に奇兵を用ゆるとも、アレ七曜の破軍をうけ、戀の敵のあの女。よも安穩で置くべきか。

ト きつと空を見る。この時星一つ落ちる。大どろ〳〵、兩人心得ぬこなし。

良門　分夜の七星この時に

いは　星の落ちたは、お腹の胎兒の

良門　ハテ、不審しい

兩人　事ぢやなァ。（トどろ〳〵打ち上げ、遠寄せ。）

良門　さてはこれまで土蜘蛛の

いは　その妖術も光任が、血汐の穢れに空しくなり

良門　されども、それがし兼てより、手に入れたりし源家の重寶蜘蛛切り丸、これを囮に再び旗揚げ。

ト つか〳〵と屋體へあがる。捕り手二人かゝる。きつと押へ

いは　そんなら弟。

良門　姉ぢや人。（ト兩人を下へドッと投げる。）

いは　必ず吉左右。

良門　お去らば。

トチヤント御簾下りる。此うち始終立廻り。見事にお岩兩人を切り倒し、思ひ入れあつて、奥へ行かうとする。五人の女形、手礫、十手を持ち出て、お岩を取りまき

皆々　動かしやんすな。

いは　こりや、こなさん達、女子一人を大勢で、何とさしやんす。

八十　何とするとは知れた事、謀叛の張本將門が娘。

お國　賴光公を恨まんと、姿を替へて入込みし七綾姫。

東路　乳は替れど朝敵の血筋。

瀧野　敵の末は根を絶つて葉を枯らすと、腹いがきめもろともに

八十　誅せよとある我が君の御上意。

お國　お腹の胎兒は愛しけれど

東路　叶はぬ事と諦めて

瀧野　サア、尋常に

皆々　覺悟さしやんせ。

いは　女子でこそあれ、將門が娘、やはか其方衆の手にあはうや。邪魔せずと、そこ退いて通すまいか。

八十　面倒な。皆さん、ソレ。

トどん〳〵になりて、立廻りよろしく、この人數を向うへ追ひこみ、お岩花道に留り、きつと見え。眺への獨吟になる。

〽冬の空、月のけはひのおそろしき、露か霜かと振り袖の。

ト此うち八十瀬出で、窺ひ〳〵花道へ行く。

八十　捕つた。

トこれを見返り、きつとこなし。八十瀬打つて行く立廻りあつて、舞臺へ附來り八十瀬をポンと當てる。

〽氷る刃ひらめける、恪氣にくらき闇の夜も、井筒の水の鐘さえて、更ける夜。

ト此うち　お國、東路出て窺ふ、お岩井戸の水を片手にて汲みあげる。

お國　捕つた。

ト刃をひらりと差し附ける。水を一つ呑み、またお國、打つて行くを同じく立廻つて切り拂ひ、立廻

りよろしくあつて、どん〳〵になり、向うより女形殘らず以前の形にて立戻る。立廻りよろしく、此
うち向うより、足輕實は權頭興世走り出で

興世　七綾樣、これにござりましたか。

いは　そちや權の頭興世か。

興世　足輕となつて入り込みしが、思ひがけなく手に入つたる鬼切り丸。（ト出し）これを功に保輔樣へ、
こなたの助命いたしたぞ。

いは　ナニ、七綾が命乞ひ。情けに刃向ふ刃があらうか。エ、、忝けない。（ト刀を取る。）

八十　ヤア、、鬼切りといひ

お國　叛逆人の七綾を

東路　助けるは二心。

三人　ドレ、わたしらが

ト行きかゝる。お岩この一腰にて八十瀨を切つて捨てる。大どろ〳〵、お岩屋體へ上る。皆々うしろ
へかゝる。

瀧野　コリヤ、コレ、臨月。

東路　たしかにお產。

ト兩人を見事に下へ取つて投げる。きつと見え。チヨンと山幕切つて落す。
本舞臺一面の山幕になる、ト矢張りどんちやんにて、下座より中間出て

中間　似せつんぼとなつて、世の中を知らぬにて、やう〳〵とお家の家督に、なくて叶はぬ印子の藥
師。これを盗めば出世の種。うまい〳〵。

花平　（窺ひ出て）その尊像を。

トかゝるを、中間棒にて振り拂ふ立廻り、花平一腰ぬいて切つて行く。中間棒にてあしらふ。始終ど
んちやん。雷雲出で來て花平を支へる。

中間　ヤア、入道か。どうもあの子がならねえわな。

雷雲　こゝ構はずと。

中間　勿論。

ト早神樂になり、中間、箱を持ち、向うへ走り入る。咲平出て來て、雷雲を突き廻し

咲平　よく友達を馬鹿にしたな。

雷雲　馬鹿にやアしない。邪魔になるから支へるのだ。

花平　その替りには入道、うぬを。（トちよつと切つて行くを支へて）

雷雲　こりやァ、何とするのだ。

花平　何とするとは知れた事、お家の寶を奪ひ取つて、駈け出す曲者、捉へしを、うぬが邪魔して逃がしたからは。

咲平　入道、うぬを引ッ捉へ、二本の足を投げ切つて、夜見世の辻賣り、大蛸に

花平　切つて酢蛸か櫻煮か、花々しくも顏見世の、花たち花が手料理で、雷雲、うぬを切り刻み

咲平　二つ實のある揃ひの奴、姿は假りの下部でも、我が本名は白川の、文丸といふ源家の忠臣。

花平　われも名乘れば源氏の郎黨、瀧夜叉といふ厄介若衆。

兩人　うで蛸入道、覺悟ひろげ。

雷雲　ヤレ、ぬかしたり蛸盡し、うぬらを見越しのおれなれど、邪魔だてするが面倒さに、睨み殺してくれべいワ。

咲平　さう云やァ、うで蛸より

花平　水を浴びせて

兩人　寒氷り。

ト打つて行く。立廻りにて、雷雲衣裳ぬげて裸になる。誂への賑かなる鳴り物にて、雷雲相手に大立てあつて、雷雲の髭を引ッ張り

二人　うしやァがれ、エ、。

トさらしになりて向うへ入る。どんちやんにて山幕切つて落す。

本舞臺一面の高舞臺、正面淺黃幕、東西築地塀、この舞臺一面の萩垣、前面山幕、どんちやんにて納る。ト靜かなる遠寄せになり、良門、つか〳〵と向うより出て來る。捕り手、四天にて、後より鎗を持ち出で、花道にて突いてかゝる立廻り。本舞臺へかゝる。きつと見得。下座より、別の捕り手、四天にて鎗を持ち、双方より突いてかゝる。大太鼓入りの合ひ方になり、大だてあつて向うへ皆々追ひ込む。花道にてきつと見得。よきほどにエイと矢一つ來るを、良門引ッ掴み

良門　ヤァ、小ざかしきへろ〳〵矢、殊に附きたる短冊は。……「將門は顏顏よりぞ射られけり、

ト下座にて

保輔　俵藤太が謀りごとにて。」

良門　何がなんと。

保輔　ヤァ〳〵、平の良門へ、平井の保輔、見參々々。

ト突ッかけ、どんちやんにて、保輔、弓矢を持ち、花平、咲平、軍兵大勢、弓張りを持ち出て來る。

良門本舞臺へ戻り、きつと見得。

最早のがれぬ良門と

皆々　名乘つた〳〵。

ト始終どんちやん。下座より尊國、肌脱ぎ拔刀にて、抱き子をかゝへ、これに附いて腰元四人、長刀を持ち、出て來て

皆々　ヤア〳〵、強惡非道の尊國樣、覺悟々々〳〵。

尊國　ヤア、こざかしき覺悟呼はり。餓鬼を囮に賴光を、味方に附けんと思ひしに、鵲の嘴となつたるか、エヽ。口惜しい。この上は源家の胤のこの餓鬼も、まツこの通り。

ト刺し殺す。

良門　ホヽウ、潔ぎよし〳〵。斯くなる上はこの蜘蛛切り、イザ、尊國どのへ。（ト刀を渡す。）

尊國　いふにや及ぶ。蜘蛛切り丸手に入るからは、サア、良門と名乘らつしやい。

良門　なんと。

尊國　この名劍を取らう爲の、尊國樣だワ。

良門　それに又、賴光の一子を殺せしは

尊國　それこそ、そちが姉たる七綾が、出產なしたる赤ッ子だ。賴光が一子を取つたと言つたも嘘、尊國樣と言つたも嘘、光任どのと言ひ合せ、うま〳〵はまつた平の良門、われも名乘れば源家の郎黨、秦の次郎正文といふ者だワ。

ト立〳〵にて興世、鬼切り丸を持ち出て來る

興世　イザ、保輔樣へ鬼切り丸、お渡し申し上げるからは、偏へに助命願ひ奉る。

保輔　心得申した。（ト取つて）サア、良門と名を名乘れ。

良門　イヽヤ、知らない。

保輔　たとへ實名包むとも、大宅の太郎が繫ぎ馬の、似せ物を授け、計りしゆゑ、姉たる七綾、實心に立返り、權の頭が返り忠にて、紛失の鬼切り丸まで、手に入つたからは、包まず本名

皆々　名乘つた〳〵。

良門　エヽ、口惜しやナア。似せ上使となつて入込み、賴光を亡きものにせんと思ひしに、保輔めに見顯はされしか。今は何をか包まん。葛原の親王が五代の孫、常陸の大掾國香が弟、下總の國猿島郡に內裏を構へ、自ら號せし平親王、將門が一子、將軍太郎平の良門、間近く寄つて、面體を、

拜み奉れ、エ、。

皆々　扨こそなア。

良門　斯くなる上は、たとへ味方の五萬六萬、足手纏ひに何かせん。それがし一人が百萬騎、片ッ端から死人の山だ、觀念なせ。

皆々　なにを小癪な。

保輔　ヤレ、待たれよ。今討取るは安けれども、七綾が最後の願ひ、良門が、目出たき花の顏見世なれば、源家の御仁心にて、一旦この場は見遁し遣はす。繫ぎ馬の白旗は、其方に得させん、イザ。

良門　イザ

兩人　イザ〳〵〳〵。（ト渡す。良門取って）

良門　エ、、有り難や、忝けなや。この白旗の手に入る上は、時節を待つて再び旗揚げ。

保輔　先づそれまでは

良門　平井の保輔。

保輔　平の良門。

良門　方々

大勢　さらば。

良門　これより二番目の發端始まり左樣。

ト打ち込みになり、この人數皆々二重舞臺へ上がる。この打ち込みの鳴り物、詰への通りに替つて、この道具を後へ引きあげる。

第壹番目六立目の大詰

第二番目

口　幕

隅田堤の場

役名。切見世の店頭、鬼七、實は、伊賀壽太郎。海老雜魚の十實は渡邊源次綱。飛脚、よい助。藪醫者、張臂道庵。船頭、八。鬼七女房、お綱實は侍女、苫屋。

鳴り物にて、屋體は段々と斜に引き込む、下に控へし人數詰め寄つて後向きになる見得。その前通りへ山組をせり上げ、人數を隱す。この途端に屋體の前へ、鼠木綿に雪の降り來る景色を畫きたる一杯の幕を切つて落す。舞臺前雨落ちへ浪板せり上げ、高欄前へ雪を置いたる吊り枝の柳をさげる。知らせに附き佃騷ぎの鳴り物に替り、舞臺へ雪をおほたる屋根船、障子立て切り、蓑笠の船頭、後向きに東の方よ

り棹さして乘込んでゐる見得、船納る。ト留めの拍子木にて船左右に開く。この途端にうしろの山組、一度に返ると、雪の積りし三圍土手、浪除の杭、枯れ蘆、船附の雁木、うしろに石の鳥居、樹木たつぷりと雪積りたる體。途端に日覆より雪大分降つて來る。道具納る。ト船頭思ひ入れあつて、正面を向く。船頭の八にて、船の中へ思ひ入れあつて

八　モシ、おかみさんえ。そんならわつちやァ武藏屋へ行つて、お煙管を尋ねて參りますよ。モシ、暮れたら提灯は棚にありますヨ。モシ、蠟燭は枕箱にありやすヨ。アヽ、コレ〳〵、酉の市の土產の熊手へ、雪が積つたワ〳〵。アヽ、寒い〳〵、よく降る雪だ。

ト下駄を引つさげ、向うの雁木へ飛ぶ。土手の上を通り、鼻唄をうたひながら下座へ入る。このうち始終仰節、生ごろしあり。眞乳山の入相の鐘鳴る。屋根船より海老さこの十、勇み肌のこしらへにて走り出で、船頭八が跡を見て、

十　コレ〳〵、船頭や〳〵。……コレ、おれが土產の熊手を床の間へ忘れたから、取つて來てくれろヨ……。市川やの小僧や。忘れやァがると聞かねえぞ。ヨヽ、エヽ、べら棒に早い足だ。

（トあとを見てゐる、船の障子を明け、お綱、袖頭巾の女房にて顯を出し

つな　コレ、十さん、呼びなさんな。打つちやつて置きねえよ。歸るとわるいわな。

十　それだつて、酉の市へいつて、熊手を買つて來ねえのは、あんまり間抜けに見えるわな。

つな　わつちの土產があるから、いるなら持つて行きな。

十　お前、いるであらう。

つな　ナニ、なくつてもいゝわな。

十　宿六が小言を云はうぞえ。

つな　うつちやつて置きねえな。これがの。（ト掛指を見せて）何のかのと云ふと、今にお前の所へ行くよ。

十　いゝかえ。怖くはねえか。何のつきに。

つな　カウ、十さん、眞のこつたによ。

十　江戸ッ子だわな。

つな　嬉しいよ。

十　とんだ氣紛れだ。

ト佃になり、障子を立て、海老さこの十、中へ入る。よい助、三度笠、丸合羽にて、尊像の箱を風呂敷に包み、スタ〳〵出る。あとより道庵、醫者のこしらへ、傘下駄にて出て來け

道庵　コレ〳〵、お飛脚、お前急ぎだといつて、千住まではどうで行けねえ。アレ〳〵、あの向う川岸

に今戸といふ所がある。そこへ行つて、百姓宿といつて泊りなさい。

よい　ア、、そんならその今戸とやらへ行つて泊らうが、一人でも泊めようか。

道庵　泊めは泊めようが、物騒だよ。

よい　ナニ、物騒だ。そいつが、いやだよ。

道庵　それだから斯うしなさい。お前のその大事のものを預けて、お前ばかり宿へ泊るがよい。

よい　成る程、それもいゝわえ。併しおれが持つてゐては、別して金になる品ではないが、これは多田の家に、無くて叶はぬとやらいふ、藥師如來の印子とやらいふ佛だ。しかも、天竺から來たの。

ア、、遠いところから來たの。

道庵　ア、、そんなら持つてござるは、その印子の尊像、ア、、藥師如來の

よい　左樣々々、茅場町ではない、天竺の藥師だ。

道庵　モシ、それをお前、ちつと拜ませさつしやらぬか。

よい　ア、、この佛樣をか。

道庵　左樣サ。その替りには大雪になつたら、わしが家へお前を泊めて進ぜるが、なんと拜ませては下さらぬか。

よい　そりや、モウ、旅は道連れ、世は情けとやらいふ事もあるから、成る程、泊めてもらはうが、わしは都の者ゆゑ勝手が知れぬ、旅籠はいくらでござる。

道庵　なにサ、わしは醫者でござるから、宿賃はいりませぬ。寒からうと氣の毒に思ふから、たゞ泊めまするワ。

よい　それは忝けない。さう深切に言つて下されば、拜ませいでは。サア〳〵、拜まつしやい〳〵。

道庵　これは忝けない。誠、よき所へ通りかゝりまして、有り難い尊像を拜みまする。

よい　サア〳〵、拜まつしやり〳〵。

（ト風呂敷に包みし白木の誂への箱を開き、内より赤地錦の袱紗に包みし厨子入りの尊像を出し、渡す、）

道庵　エ、、これが藥師樣かな。

よい　左樣々々。

道庵　成る程、これは包んだ袱紗も結構な錦だ。誠にこれは有り難さうな。

（ト見ようとして、一目散に逃げんとする。よい助うろたへ）

よい　泥坊々々。（ト道庵を捉へる。）

道庵　コレ、めつさうな。わしや泥坊ぢやアねえ〳〵。

よい　そんなら、寄越さつしやい〳〵。

道庵　したが、今夜ばかり貸さつしやい。

よい　エヽ、どうしてめつさうな。大事の物だワ。

トせり合ふはずみに、箱の蓋も身も川へ落す。この二品、川を流れる。道庵、尊像を右の手で握り、揚げようとする。よい助も取りすがる立廻りに、よい助は土手より突き落され、川へはまる。此うち捨て鐘、道庵思ひ入れあつて

道庵　よくしたものだ、あの、野郎めは川へドンブリ、印子の佛はおれが物。ドレマア、こゝで開帳して、（ト見ようとする。薄どろ〳〵にて、握りしまゝ離れぬ思ひ入れ、いろ〳〵。）これはどうだ。おれが手へ藥師の尊像が吸ひ附いたか。……コレ、吸ひ附いたか〳〵〳〵。吸ひ附いたなら、これは蛸藥師樣か。コレ、離れさつしやい〳〵。ハテ、こいつ手古摺つた藥師だ。

トいろ〳〵離さうとする思ひ入れにて下座へ入る。矢張り佃節、土手の上より鬼七、バツチ、半合羽、下駄、白張の傘、頭巾頬冠りにて出て來る。捨て鐘聞える。

鬼七　アヽ、コレ、長屋の手合ひはなぜ遲い。また喰ひ醉つて喧嘩でも始めにやアいゝが。どうでこの雪ぢやア、今夜はずるけだ。みんなの來るまでに、船を呼んでおかう。……竹屋ア〳〵、向う越しだア〳〵。（ト呼ぶことあつて）エヽ、雪のせゐか、聞えねえか知らん、（ト船を見て）アヽ、屋根船がゐるワ。向うへ行くなら、便船したいものだが。（ト呼びかける心にて雁木へ下りかゝり、流れてゐる箱の蓋を見附け）アヽ、何だか板に書いたものが流れて來たワ。何だ知らん。

トいろ〳〵ありて、さしてゐる傘をすぼめて引き寄せる。箱の身の方は、船の際を流れる。この時船のうちより海老ざこの十、出かゝり、捨せりふにて箱の流るゝを見て

十　アヽ、なんだ、何か流れて來たな。（ト竹熊手にてかき寄せ引き揚げる。その時鬼七も箱の蓋をかき寄せて取り揚げる。海老ざこの十、思ひ入れあつて）見覺えのあるこの箱は、こりやコレ、印子の藥師如來の尊像と。（ト蓋の文字を讀む、海老ざこの十これを聞いて）

鬼七　ハテ、割符の合つた

十　つな（この時障子をあけ）十さん、寒いに何だな。

鬼七　ヤア、どうやら、かゝアが（ト見ようとする。お綱、障子をぴつしやりさす。海老ざこの十、手拭を冠る。この途端一度に木の頭、鬼七、箱を懷中して）ハテ、ナア。

ト思ひ入れよろしく

ひやうし幕

第二番目

序幕

羅生門河岸切見世の場
茨木屋勝手住居の場

役名。 茨木屋鬼七實は伊賀壽太郎。海老雜魚の十實は渡邊綱。藪醫者、張臂道庵。貸物屋、金六。獸屋、權助。鬼七女房、お綱實は侍女、苫屋。三日月お仙實は俊連息女、九重姫。

本舞臺三間の間、正面朝鮮矢來、左右に切見世の路地口、よきところに葭簀張りの山鯨の煮賣り見世、長床几を出し、總て都東寺の羅生門河岸、雪積りし景色。こゝに權助、けだもの屋にて、合羽を着たる中間を引ッ捉へゐる。吉、富、兼、同じさほひにて立ちかゝりゐる。喜之助、路地番の形にて鐵棒を持ち、これを留めてゐる見得。雪ちら〳〵と降り、四つ竹節に通り神樂を打ち込む。と左右の路地より若い衆四五人、頬冠り下駄がけ、或は大笠をかぶりし大福餅や、大笠をかぶりたる水屋など出入りする景色、舞臺の人數捨せりふあつて

權助 駄折助め、喰ひ逃げをさせるものか。動きやアがるな〳〵。

折助 アヽ、コレ〳〵、錢はあるわな。拂つたらよからう、放さつしやい〳〵。

喜之 モシ〳〵、權助さん、マア〳〵、錢を拂ふといふから、放さつしやいな〳〵。

權助 コレサ、喜之ばう、てめえもいゝ事を言ふものだ、この折助めは、今日ばかりの事ぢやねえ。度度の事、必ず口を出さつしやるな〳〵。

喜之 そいつはいゝぶちものだの。

吉 アヽ、なにか、その折助が山鯨の喰ひ逃げか。小さな野郎だがイケ意地の汚ない間抜けだなア。

富 ナニ、間抜けな事があるものか。度々來て喰ひ逃げをするは、氣の利き過ぎたのだ。ナウ、さうぢやねえか。

兼 ほんに、イケ、業晒しな折助だ。コレ、喜之ばうや、こんなやつは長屋の子供の簪でも拔くものだ。面を覺えて置くがよい。

折助 アヽ、モシ〳〵、お前方も同じやうに、さういぢめる事はねえわな。わしも雪降りのお使ひ、あんまり寒いから、そゝつた歸りに山鯨を六膳、酒を三合、當身の權助サ。

權助 置きやアがれ。權助とはおれが事だッ。どうで一文もあるまい、百五十の抵當に丸裸にしてやるべい。(ト立ちかゝる)。

喜之（これを留めて）コレサ〳〵、この雪の降るのに九裸にして、この長屋の路地へ行き倒れになられちやァ、路地番の厄介だ。扶持方棒でもふんだくつてやらつしやいな。

權助　ナニサ、癖になる、構はつしやるな、とは言ふものゝまさかさうもなるまいかえ。

吉　コレサ、權ばう、折助が着てゐる紙合羽でも、ふんだくつてやるがよいわな。

權助　それもさうかえ。サア折助め、合羽を置いて行きやァがれ。

折助　アヽ、モシ、これを取られると、部屋頭に叱られます。堪忍して下さりませ。今度からきつと喰ひ逃げをしますまいよ〳〵。

富　エヽ、業晒しな折助だ。

兼　脱いで行け〳〵。（

權助　脱ぎやァがれ。

ト立ちかゝり、赤合羽を引つたくる。皆々寄つて捨ぜりふにて、中間を花道の方へ突き飛ばす。

三人　エヽ、をとゝひうしやァがれ。

折助　覺えてゐやァがれ。

三人　ナニを、朴念仁め。（ト立ちかゝる。）

折助　べらぼう、はッつけえ。（ト四ツ竹節になり、向うへ逃げて入る。權助、合羽を引つたくつて）

權助　籠襤褸に賣つても百五十にはならうか。

喜之　合點がいかねえの。

權助　取らねえには增しか。ドレ、葱でもこせえて置かうか。

ト障子の内へ入る。皆々床几にこぞり寄つて捨ぜりふ。また四ツ竹節になり、向うよりお留、塀につたる蔓、木綿やつし、しみつたれな形にて、藥の通ひ箱を抱へ、片ちんばの下駄、大丸の番傘をひろげ、車のやうに廻しながら出る。あとより金六、貸物屋にて、唐草の蒲團三疊みばかり肩にかけ、番傘を提げ下駄がけ。お色、お蝶、切り見世女郎の拵へ、扱帶の形、朱鼻緒黑塗りの足駄にて、垢摺りの附きたる手拭を持ち、錢湯の歸り心。此うち雪小止みし體。捨ぜりふよろしく、直ぐに本舞臺へ來る。

兼　カウ、みんな見や、今湯から歸るやつサ。べらぼうに長い湯だの。

吉　裸參りの提灯が、聞いて呆れがねに來る。

いろ　エヽ、吉さん、大分洒落が上がつたの。

吉　勿論サ。

兼　富公見さッし。この手合ひは湯屋でふやけたか、べらぼうに脹れたやつサ。

てふ　打つちやつて置きな、眼れてもいゝョ。
富　とんだ大福餅だ。
とめ　こし餡なら一つおくれな。
いろ　エヽ、この子はまた喰ひ物といふと、コレ、これに言ひ附けるョ。（ト小指を見せる。）
とめ　エヽ、さういふと留さんと、簪の理窟を言ひますョ。
いろ　言つて見や。たゞは置かねえぞ。それだから塘に附きやァがるワ。ざまァ見やァがれ。
とめ　うつちやつて置きなせいョ。
いろ　エヽ、イケツ口を（ト立ちかゝる。金六、喜之助留める）
金六　コレナ、お色さん、子供だわな。不承しねえな。この子もまた年もいかねえものだ。薬を取つて
　　來たら、早くいつて煎じて服むものだ。サアく、行きねえく。
てふ　コレく、小職のうちは、あの子達に可愛がられるが徳だよ。あんまりつべこべ喋舌るものぢや
　　アねえよ。モシ、金六さん、その蒲團はどこへ持つて行く。
金六　こりやァ、何サ、中長屋のお常さんの客が、昨夜泊つての、今日またこの雪ぢやァ歸られねえと
　　いつて、今も幕の内を取りにやつて大じやれサ。蒲團が薄いといつて、三疊み借りに來たから持

つて行くところサ。
てふ　エヽ、そりやァ、アノ、いつもの烏丸から來る、吳服屋のおたきだョ。あの客は豪氣に、えてき
　　ちがあるョ。
象　何だ、烏丸だ、とんだ枇杷葉湯だ。
てふ　エヽ、置きねえな、あの客の眞似はならねえョ。
富　吳服屋の飯炊の眞似を、誰がするものか。
いろ　コレ、さう言ひなさんな。來るたんびに廣さんの羽織が替るョ。
吉　そいつは見世のやつらの羽織を借りて來るのであらう。
二人　こいつは大笑ひだ。
いろ　借りてもようこざりますョウ。
三人　エヽ、なき蟲があつくなるやつサ。ハヽヽヽ。
金六　ドリヤ、長屋へ置いて來ようか。
　　ト四ツ竹の合ひ方になり、お留先きに金六、蒲團をかつぎ、路地のうちへ入る、この合ひ方にて、向
　　うよりお仙、紅の板〆の肩入れせし一ツ着、板〆の扱帶、五分長の櫛絆、黑塗り朱鼻緒の足駄、笄に

ふすま袋をさげ、紅の垢摺りの附きたる算盤絞りの手拭をさげて出て來る。あとより海老ざこの十、看屋のこしらへ、たるみの股引、足駄がけ、手拭を持ち、澁蛇の目の傘をさして出て來り、花道にて

十　コレナア、お仙ぼう、ぬしは湯へ行つたのか。べらぼうに早い足だの。韋駄天の娘ぢやァあるまいし。ア、、こいつは飛脚の下齒になる氣だな。一時三里犬走り、股がすれたら治丹ばうを貼りねえ。

せん　エ、、置いてくんねえな。わつちやァいつも錢湯が早いが、今日はどうでも雪が降るせゐかして、ツイうつかりと長湯をしたの。それにマア、番頭のだりむくりが、顏見世を見にゆくなら、わつちと一緒に行かうのなんのと、二つ三つ話すうち、雪の止むのを待つてゐるやつサ。

十　得て、湯屋の番頭にやァ、角力の話しと、顏見世の評判。てめえ芝居を見たか。

せん　アイ、この中髮結のおしゆさんと、中長屋の子供衆が連れになつてね。

十　葺屋町を見たか。

せん　アイ、暫くの幕からサ。

十　ア、、暫くは成田屋か。

せん　アイ、奇妙だヨ。

十　久しいものサ。定めしあの眼玉で睨んだであらうヨ。

せん　面白かつたヨ。

十　何だか、おいらは團十郎はきつい嫌ひサ。

せん　オヤ、江戸ッ子のやうにもねえ。

十　おハねえ氣まぐれヨ。ハ、、、、。ドリヤ、そこまで連れにならうか。

ト通り神樂になり、四ツ竹節になつて、兩人本舞臺へ來る。

てふいろ　オヤ、お仙さん、わつちらは先きへ來たヨ。

せん　よく置去りをしなさつた。

喜之　モシ〳〵、お仙さん、べらぼうに長湯だの。さういつてもまだ、わしが面よりは短かゝらうね。

三人　成る程、喜之助の面は夕顏だ。

喜之　置きなさいな、人そばえな。時に看屋の十さん、この頃からこの長屋へ出るが、お仙さんは誠に美しい玉だね。

せん　エ、、無駄を。おきねえな。

十　イヤモウ、きつい評判よ。その上、この子は男嫌ひだと聞いたが、お仙ぼう、ぬしは男は。

せんアイ、男嫌ひも氣が強いがね、どういふ事かわつちやア、男にひたつく事ががうてきに否だな。

十　そいつはいゝ氣前だの。時に喜之ばうや、てめえあの店頭の鬼がかゝアのお綱は、先度、切りをたゝいたではないかえ。

喜之　さうサ、あの、お綱さんは、ありやア先度の三日月お仙サ。前の半四郎に似たといつて、素敵に流行つた、二代目のお仙さんサ。この子は三代目のお仙さんサ。

十　てめえ、よく知つてゐるな。

喜之　知らねえてわな。築地へ引ッ込んだ親父の彦左衛門が若い時分で、路地番をしてゐたものを。ほんに、その時はわしらは、まだ小僧ッ子の時分だ。

いろ　エゝ、あつかましい。去年厄年だといつて、大師河原へ月參りをしたぢやアねえか。

喜之　厄年だ、そりやア、二十五の厄だわな。

いろ　オヤ、四文錢で二十五か。

喜之　よしねえな、聞いた風な。

十　コレ、喜之助、そんなら手めえ、親仁から二代目の路地番か。

喜之　さうサ。ほんの事だが、圍十郎は七代目だが、築地は二代目サ。ちつと御由緒のある家柄サ。

十　成る程、面の長いのも二代目だな。

喜之　エゝ、おきなさいな。（トこのうちかすめて通り神樂。）

いろ　モシ〳〵、十さん、あの太神樂は、この雪の降るのに、何で歩くのだえ。

十　ありやア、今日は冬至だからヨ。

てふ　東寺とは、こゝの羅生門のあるところかえ。

十　ナニサ、唐の正月サ。

てふ　オヤ〳〵、唐にも正月があるかえ。

十　無くッてわな。

てふ　とんだ正月が唐にもあらうか。この洒落はどうだえ。

吉　エゝ、置きやアがれ。

十　時に喜之助や、おらアこの子の事について、ちつと話しがあるが、おぬしが親分の七五郎といふは、話しの出來る男か。

喜之　アイ、そりやアほんの事だが、わかつた人サ。

十　成る程、近附きぢやアねえが、この羅生門河岸で、鬼と異名を取つた男、話しの出來ねえ事もあ

るめえ。外でもねえが、こゝにゐるお仙ばうが事に附いてとはえ。

せんエ、わつちが事に附いてとはえ。

十　ハテ、眞面目になるな。この頃からこの長屋へ、突出しの地もの同然。客を取るのも有りやうは、恥しさうな始末會ひ。女嫌ひの海老ざこも、この阿魔ならばと遂にない、味な心に、信濃屋のお半ぢやアねえお仙ばう。聞けば長屋の店顔、鬼が抱へといふゆゑに、ちつと話しがあつて來た。

喜之　アイ、奥から口へ二軒目サ。

十　どうで尋ねにやアならねえが、お仙ばう、ちつとてめえに話しがあるヨ。

せん　アイ、身じめえにかゝるから、早く言ひねえ、何だえ。

十　ハテ、あの手合ひが聞いてゐるわな。

てふ　差しがあるなら、わつちは先きへ行つて見世を張らう。ナウ、お色さん。

いろ　さうサ、お仙さん、後からお出でヨ。

吉　おいらは山鯨であつたまつて、ひやかすべい。

富　さうすべい〳〵。

兼

喜之　そんなら十さん、お仙さんと二人殘つて

十　どうしたと。

喜之　きまりなんし。

ト四ツ竹節になり、お色、お蝶、喜之助、路地へ入る。吉、富、兼、山鯨の見世へ入る。お仙、海老ざこの十殘つて

せん　十さん、お前わつちへ用といふのは、彼の事かえ。

十　オヽヨ、この中酉の市の歸りがけに、雪に降られて榎木戸から、便船頼んだ屋根船で、そつちの小指と呑み合つて、連れの手あひは二階へぶちあげ、あとは行火に四の蒲團、おつりきな話しになつたが、コレ、必ずてめえへお杉を頼むヨ、

せん　そりや、モウ、頼みなさる事なら、呑み込んぢやアあげようが、これに知れたらいゝかえ。

ト掛指を見せる。

十　ハテ、その時は又算段があるワ。コレ、てめえに含みを言つて置かう、耳を貸さツし。

ト お仙に囁く思ひ入れ。この時お仙が襟にかけたる、荒磯錦の守り袋、ぶらりと下がる。海老ざこの十囁くうち、この切れを見附け、思ひ入れあつて

切り見世女の三日月お仙が、襟にかけたる掛け守りは、世にも稀れなる荒磯錦、正しく伊豫の

せんエ。（ト驚き懐中する。）

十　ハテ、變つた切れを

せん　もう話しは、これ切りかえ。

十　必ず頼むよ。

せん　呑み込んだよ、十さん。

十　お仙ぼう。

せん　廻つて來な。（ト四ツ竹節になり、路地のうちへ入る。）

十　（あとを見送り）あの三日月を先きにして、内の下歯を巻きあげる、それに附いても宮戸川、流れ寄つたるこの箱の内なる品が（ト前幕に取り得し白木の箱を懐より出す。）

大屋若衆　サア〳〵、急いで貰はう〳〵。（ト向うの聲に思ひ入れ。）

十　ドリヤ、仕掛けて見ようか。

（ト四ツ竹になり、路地のうちへ入る。直ぐにてんつゝ、通り神樂、雪降つてゐる。向うより人足二人、絲立てをかけ雪の積つたる早桶を差しになひ、大屋、やつし脛引、草鞋、丸合羽を着て、編笠を冠り、施

主の體にて、これに續いて、スタ〳〵と出て來る、舞臺へ來り

人足　モシ〳〵、お施主さん、どうやら繩が切れさうで、きち〳〵しますよ。

同　どうでも佛が川流れで、水腫れのせゐかして、豪氣に重もたい。アレ〳〵、繩が切れさうだ〳〵。

大屋　ナニ、繩が切れさうだ。こゝでマア佛をこぼしては、しんまつがし憎い。マア〳〵、山鯨の前へ下ろせ〳〵。

兩人　さうしませう〳〵。（ト早桶を下ろすはずみに繩は切れる。）

大屋　ソレ〳〵、繩が切れたワ〳〵、こゝでゆつくりと締め直すがよい。

人足　さうしやせう〳〵。モシ、大屋さん、こゝらで繩を貰ひなさんし。

大屋　さうしませう〳〵。幸ひこゝの見世で貰ひませう。……モシ〳〵、ちとお頼み申し忠す〳〵。

權助　オイ〳〵、こつちへお入りなさいまし。牡丹かえ、紅葉かえ。（ト赤合羽を持ち出る。）

大屋　イエ〳〵、繩を一つ下ださい。今こゝの見世の前で早桶の繩が切れて、死人がこぼれかゝりましたし、早く繩を下さい〳〵。

權助　（腹を立て）何だ、人の見世の先きへ死人を下ろして、繩をくれろ、こいつは何だ。うぬがざまを見やアがれ。紙雛の施主か、節季候の旅立ちか、おえねえ氣まぐれだ。ちよつとも置く事はな

らねえぞ。この死人を、其方へ持つて行きやァがれ〳〵。（ト早桶を突きやる。）

大屋　コレ〳〵〳〵、こなたは山鯨の亭主か。コレ、縄が切れたら、見世の先きであらうが、ねいし、お大名様のお玄關前であらうが、下ろしたがどうした。死人を下ろすことは法度か。さう強情を言はれちやァ、五日でも十日でも、この死人をこゝの見世へ置かにやァならねえ。不承ながら、置いてもらはう〳〵。

人足　さうだ〳〵、持つて行くことは否だ〳〵。

ト口々にわめく。この時勇みの三人出て來り

吉　こいつは何だ、山鯨の前へ死人を下ろしたな。

富　そいつはとんだ話しだ。薄穢ない。

兼　持つて行きやァがらねえか。

權助　持つて行きやァがらねえと、うぬらは、うぬ、締めるぞよ〳〵。

大屋　何だ、施主を締める。サア、締められるなら締めて見やァがれ。

人足　締められべい〳〵。

權助　イケふざけたやつらだ。若い衆や、締めさつしやい〳〵。

三人　合點だ。死人かつぎを、ぶッ挫け〳〵。

ト立ちかゝる。喜之助、路地より鐵棒を持ち、飛び出で

喜之　コレサ〳〵、譯は知らねえが、靜かにしなんし〳〵。（ト入つて留る。）

權助　否だ〳〵。おれが見世に死人を置かれちやァ、濟まされねえ〳〵。

人足　濟まさねえと言つて、どうしやァがる〳〵。

權助　斯うするわえ。

ト早桶の棒を取つてぶつて掛かる。入り亂れになり、桶の縄切れ、内よりよい助の死人、經帷子の形頭陀袋なかけたるが轉げ出る。皆々捨せりふにて、思はずよい助を踏み散らし、見世にある手桶を取つてぶつ附ける。この水、よい助にかゝりその上踏れ、息吹き返す思ひ入れ。皆々これを知らず同士打ちに叩き合ふ。よい助、心附きたる體にて、すつと立ち、喧嘩ときいてこの中へ入り裁人の思ひ入れにて

よい　待たつしやい〳〵。（ト捨せりふにて留めて廻り、權助の襟をひッ抱へ）おれが預つた、預けさつしやい

皆々　否だ〳〵〳〵、否だッ。（ト飛脚の形を見て）イヤア、わりやァ何だ。裁人か〳〵。

よい　オヽ、裁人に濁りを打つた、ざいにんだ。

皆々　イヤア、幽靈だ。

ト肝を潰し、ワッと言つて兩方の路地へ逃げて入る。よい助一人殘つて、早桶のこはれ、又は手前の形を見て思ひ入れ。矢張りこのうち通り神樂。

よいア、そんならおれは、川へどんぶりはまつたと覺えたが、それから後は夢うつゝ。このマアおれがざまといひ、そんなら死んだか。死んだらこゝはもう地獄か。コレ、こゝは地獄か。おれは死んだか。（トうろ〳〵あたりを見て、路地口の行燈を見て、路地口を覗いて見て）イヤ〳〵、どうやら婆婆で見た路地口。火の用心に、路地四ツ切り、紙屑籠のかゝつた樣子。そんならこゝは地獄ではない。その近所の切り見世か。アゝコレ、何にしろ寒い事だぞ。（ト捨せりふ。捨てある合羽を見附け、そつと取りあげ）殺す神あれば助けるこゝに紙合羽、婆婆か冥土か知らねども、どうで濡れたる紙合羽。（ト手早く着て）ドレ、そゝつて行かう。

ト思ひ入れ。四ツ竹節、鐵棒の音にて道具廻る。

本舞臺三間の間、向う白地紋からの紙にて張りたる唐紙、よき所に妙見樣のお宮を飾り、上の方障子屋體、下手惣銅壺の竈、水瓶、臺所道具、煙り返し、跳への八間を吊し、荒神棚に高盛りの鹽、

よゝ所に木綿蒲團をかけたる炬燵、鬼七、切り見世亭主のこしらへにて、首きり入りあたりながら、笊の中にて鴨の毛を引いてゐる。箱火鉢の銅壺へ燗德利をかけ、女房のお綱、燗をしてゐる。お仙、化粧してゐる。道庵、さんすゐなる醫者のこしらへ。右の手を懐へ入れ、張臂をして、お留が脈を片手にて見てゐる體。いつちの所へ門口、雪しきりに降る。總て羅生門河岸の切り見世の內證、樂屋の方は、そゝり唄、鐵棒の音、女郎の呼びかける聲にて道具とまる。

ト矢張り此模樣、仕組よろしく、かすめて、四ツ竹の合ひ方。

鬼七　道庵さん、どうだね、その餓鬼はものにならうかえ。

道庵　ならいでは。愚老がかゝつた病人に、憚りながら一人でも怪我のあつた例しがないぢや。もう、山歸來もよからうかえ。

鬼七　ナニ、その餓鬼は、去年判人が、お松を値をよく抱へた禮に、負けて置いて行かうと、證文もない玉だから、死んでも元値な阿魔サ。

とめ　わしらは、餘ッぽどしひなだ。氣を利かしてこの熊手で、門口の雪でもかゝうか。

ト前幕に出した酉の市の竹熊手を持つて出ようとする。

つな　コレ〳〵、そりやア、雪搔きぢやアねえ、酉の市の落葉搔きだわな。そんな無駄をせずと、早く

仕掛けて服まねえか。何時だと思ふ、もう七ツだわな。イケ埒の明かねえ。……、ほんに埒の明かねえといへば、コレ、お仙や、てめえもマア、いゝ加減に身仕舞ひもしやな。外の子供はとうに見世を張つてゐるヨ。あんまり埒が明かねえぞ。

せんアイ。どういふ事か、今日はいつそ白粉の灰汁が出ないでヨ。

つな言ひ譯をせずと、早く顏も仕習ひなせえなヨ。

トこの時向うの襖をあけて、おいろ、四文錢を一本出し

いろアイ、おかみさん、口明け。

つな奇妙だの。

ト取つて、鼠鳴きをして錢箱へ入れる。この時また襖のうちにて、戸をたてる音する。お綱、直ぐに引手をちよいと明けて覗き、また締めて置く。

鬼七お色が見世へ上がつたは、あのやつぢやアねえか。

つなイヽエ、初會サ。（ト火鉢の火をあふぎゐる。お留七輪へ藥を仕掛ける。）

道庵イヤモウ、商賣といふものは、何になつても苦勞は絶えぬ。こゝの内などは樂に見えても、それぞれの心遣ひが多からうて。イヤ。それはさうと、おぬしの爲には血筋ではないが、マア〳〵、伯父ぢやて。綱が伯父のこの道庵。死んだ女房は伯母も同然。イヤモウ、正面の惡いその中で、女房に死なれ、いつそ仕切ればよかつたに、今日は初七日、ふた七日、イヤ三十日、それは〳〵、七日々々の物入り多いゆゑ、よんどころなく今日は無心に來たのぢや。お綱、さう思つてくりやれよ。

つなエヽ、そんならお前、七日の物入りが多いから、無心に來なさつたのかえ。

道庵氣障であらうが、七五郎どのと相談してな。

鬼七ハテモウ、そりやア、外でもない、伯父からに賴んだこなさん、かゝアのお綱と相談して、七日七日の物入りも、この鬼七が聞くまいものでもねえが、かゝアが綱の伯母といふなら聞えたが、綱が伯父とは新らしいわえ。

トこの時門口の脇の路地の口より、金六、大風呂敷をかつぎ、袋に入れし大小を持ち、出て來り

金六七さん、お内かえ。（ト入る。）

つなオヤ、貸物屋の金六さんか。持つて來たのは、そりやア、マア、何ぞ賣り物か。

金六ナニサ、こりやア、向う屋敷から質に取つて來た、上下と大小。直ぐに内へ歸るところだが、今親方が内にゐる時分、逢つちやアちつと惡い理窟があるから、少しのうち此方へ置いてくんなさい。

つな　お安い事サ。こゝは鬱陶しい。あの座敷へ行つて寢轉んでお待ち。蒲團があるよ。辻番がぬるくば天窓を張んな。

鬼七　コレ、損料屋、今日は冬至だ。今鴨雜煮が出來るよ。

金六　そいつは稀代だね。モシ、御免なさいませ。（ト道庵を見て）オヽ、道庵さんか、コレ、お前、この中の蒲團四疊はどうするな。

道庵　ハテ、もう二三日貸さつしやいな。おれも工面が惡くて、かゝアが七日々々の物入りをさへ、借りに來る仕儀ぢや。親方へいゝやうに賴むわな。

金六　エヽ、久しいものサ。イヤ、そりやアさうと、いゝ所で逢つた。ちつと腕を見てくんな。

道庵　どうしなさつた。寒氣にでも當つたのか。ドリヤ〳〵。（ト片手にて脈を見る。）

金六　コレナア、道庵さん、お前イケかぢけた。なんぼ寒いといつて、懷手をして、片手で脈が知れるものか。此方の手を出しねえな。（ト出させようとする。）

道庵　アヽ、コレ〳〵、右の手はちつと、どうも。

金六　なぜ出さねえな。

道庵　サア、出されぬ譯は。……アノ、オヽ、ソレ〳〵、愚老は則ち張臂道庵、これは醫者の張臂名

代どころ、そこで片手は

金六　エヽ、出しなさいな。

道庵　エヽ、惚りした。

金六　てふアイ、おかみさん。（ト小錢をコロリと出す。）

道庵　つな（取つて思ひ入れ）久しいもんだの、氣を附けな。鹽屋の奉公ばかりさせるの。

金六　てふエヽ、自烈ツたいヨウ。

（ト唐紙をたて、門口の戸を叩く音する。流行り唄になる。）

金六　コレサ、脈を見て下さいよ。

道庵　ハテ、今見るよ。

金六　兩手出さつしやいな。

道庵　ナニ、片手でも分るわな。

（ト爭ひながら、金六、大小風呂敷包みを持ち、障子のうちへ入る。お仙、形を直してゐる。暮れ六ツの鐘。お留、行燈をともす。）

つな　コレ、お仙や、いゝ加減に見世へ出やな。

せん　アイ、もうようござりやす。ドレ、見世を張つて

（ト思ひ入れあつて、唐紙を明けようとする。お綱、目を附けゐて

つな　カウ〳〵、待ちや、何だマア、てまへのその着る物の着やうは。コレ、こゝへ來や。コレ、見つともない、猪首になつてゐるわな。（トいろ〳〵直すことあつて）てめえの形はどうも人柄がいゝよ。何の事はねえ、椎茸髷の御守殿のこしらへだ。それで商賣になるもんぢやねえよ。マア、立つて見な。立つて見な。コレ、見世を出て、長屋歩きをして無駄を言つて歩くにも、それ〴〵の風があるわな。コレ、見や、煙管も斯う持つわな。勇み手合ひは勿論、坊主でも屋敷者でも、但しは生眞面目な親仁でもノ、遠目であらうが、顔と顔を見合つたが最期の助、につこりと笑つてノ、顆で斯う呼ぶわな。コレ、よく見な。……カウ〳〵、町人さん、寄んねえな、カウ〳〵お屋敷さん、カウ見たやうだによ。何だなう、人じらしな、性を附けやよう。……とノ、なりたけ下卑にやりねえ。向うに角の八本は、勇みが來ようが、ぐつとこちらから呑んでかゝりねえな。さうして、まだ前髪に油氣があるぞ。誰れが結つた。（ト髪を見て思ひ入れ。）

せん　お崎さんは氣合ひが悪いといつてね、今日の髪はおよしさんサ。

つな　道理だア。あの髪結ひさんは、餘つぽど手が下がつたよ。サア、おれがやうに遣つて見や。

せん　アイ。聞いておくれ。（ト思ひ入れあり。）カウ〳〵、町人さん、カウ息子さん、カウ見たやうだヨ。……斯うかえ。

つな　マア〳〵、そんなものサ。

せん　まだ教はる事があるかえ。

つな　まだ〳〵ある段ぢやアねえが、マア〳〵、今日はそれで置かう。

せん　モシ、慥かまだありやすぞえ。

つな　無くつちやア。まだこの外に肝心のせりふがあれど。

鬼七　そりやア、なんだ。

つな　こりや、マア、今度の事サ。

鬼七　そんならお仙に教へる事は

つな　内侍でござんす。

鬼七　ほんに、その事よ。

つな　どうして。こりやア、この子には荷が張るわな。

鬼七　ア、、出來まいか。
つな　餘つほど不器用だもの。
せん　モシ、わたしや見世を張りますよ。
つな　エ、、知れた事だ。早く行きねえな。
　　ト矢張り唄になり、お仙、上の唐紙を明けて見世へ出る思ひ入れ。この時向うの唐紙を明け、お蝶う
　　ろたへ逃げて出て來り
てふ　アレ、幽靈だよ〳〵。エ、、幽靈が見世へ上がるわな〳〵。
　　ト駈けて來る。跡よりよい助、頭陀袋の六道錢を持ち、よろり〳〵と追ひかけ出る。皆々驚き
鬼七　ヤア、幽靈だ〳〵〳〵。
　　ト皆々立騒ぐ。この音に喜之助、鐵棒を持ち、門口より走り出で
喜之　なんだ、喧嘩だ〳〵〳〵。
鬼七　イヽヤ、幽靈だ〳〵〳〵。
喜之　親方、幽靈はどこへ出ました。
鬼七　水瓶の間へ入つた。
喜之　そいつァ溝鼠ぢやァねえか。親方、薪ざつばで追ひ出さつしやいな。

鬼七　こゝにゐやァがるワ。（ト水瓶の間を突く。よい助、逃げて出る。）
皆々　ソリヤ、幽靈だ。
　　ト立騒ぐ。よい助追はれて、上の方緣の下へ逃げて入る、
てふ　カウ〳〵、親方さん、幽靈は緣の下へ、入つたよ。
鬼七　ナニ、緣の下へ。そいつは丸太夫の幽靈かも知れねえ。
喜之　親方、無駄を言はずと、行燈を持つてござい。
鬼七　合點だ〳〵〳〵。
金六　（出て來り）何だ、幽靈が、どこへ出た〳〵。
鬼七　聞かつしやい。お蝶が見世へ幽靈が上がつたを、あつちこつちへ追ひ廻して、緣の下へ追ひ込ん
　　だワ。藪を突いたら蛇が出ようが、緣の下を突いて、幽靈を追ひ出すのだ。
金六　惡くすると喰ひつくよ。
皆々　追ひ出せ〳〵。（ト棕櫚箒、鐵棒、てんでに薪ざつばなどを持ち、緣の下をのぞく。）
喜之　どうだ〳〵、ゐるか〳〵。
鬼し　幽靈は奥の方へ入つて、目ばかり光らせてゐるワ。
皆々　そいつだ〳〵。引き摺り出して、喰ひ附かれるな〳〵、（ト緣の下を突つく。よい助苦しがり、また駈け

出る。）ソリヤ、幽靈が出たヲ。

鬼七（よい助を取つて押へ）騒ぐな〳〵、幽靈は生捕つたぞ。縄を持つて來い〳〵。

喜之　合點だ〳〵。幽靈を逃がさつしやるな。

皆々　縛つておけ〳〵。（ト喜之助縄を出す、鬼七縛らうとする。）

よい（泣きながら手を合せ）アヽコレ、待つて下さい〳〵〳〵。

つな　コレナ、待ちなさい。幽靈が何か遺言があるさうな。聞いてやりねえな〳〵。

鬼七　何だ、幽靈が遺言がある。今になつて卑怯なやつだ。コレ、エヽ、誰れだと思ふ、羅生門川岸で切り見世の、茨木屋の鬼といはれた七五郎、鬼の内へ迷つてうせた幽靈め、おれには何の恨み、何の祟りで出やアがつた。

よい　サア、幽靈がこゝへ迷うて、出て來た用は

皆々　幽靈が出た用は。

よい　恥かしながら幽靈は、鐵砲はなしに來たわいなア。

皆々　おきやアがれ。

鬼七　アヽ、そんならこいつは、そゝりにうせた幽靈だな。

つな　コレ〳〵、幽靈さん、勤めを持つて來なすつたか。

よい　六道錢を握つてゐます。

てふ　モシエ、親方、幽靈がわつちに、六道錢があるから、殘りの九十を達て引けとサ。イケあつかましい幽靈だね。

喜之　アヽ、待ちなさい〳〵。そんならこの幽靈は、さつきに山鯨の權助が見世で、轉げ出たその時の死人だな。

よい　左樣々々、川へはまつた土左衞門、投げ込みのその道で、蘇生つた、めでたい亡者サ。

皆々　イヤ、とんだ話しだ。

金六　そんならこの幽靈は、無宿者だね。

よい　左樣でござります。とてもの事のお情けには、親方、この亡者をあなたの家の居候ふに、お願ひ申しまする。

鬼七　成る程、鬼が内へ幽靈の居候ふ、こいつは話しの種だ。お綱や、置いてやらうか。

つな　それだつてお前、どこの人か知れもしねえに。それにマア、死んだといふから、病人かも知れない。

鬼七　ハテ、そりやア、案じるな。奥にやアおぬしの伯父の道庵、お手醫者が附いてゐれば、氣遣ひは

ない。何しろ醫者にかけるがよい。

喜之　そりやア、後生だね。カウ〳〵、道庵さん〳〵。

道庵　オイ〳〵、愚老に用かな、（ト出て來り）何ぢや、病家かな。ア、、大抵の所ならお斷り申して。

鬼七　何サ、病人ぢやアねえがね。今日路地口でよみぢ返つた新佛が、こなさんの療治で、達者になりさうなら、居候ふに置いてやる積り。

道庵　ア、、蘇生つた佛が、居候ふになりたいといふのかな。ドレ〳〵、脈を見てやりませう。どこにゐます。

よい　ハイ、私しでございます。どうぞ御覽じて下さりませ。

道庵　ハア、、、、、。亡者は貴樣か。ドリヤ、伺ひませう。（ト片手で脈を見る。）

よい　モシ〳〵、お醫者樣、あなた片手をどうなされました。

道庵　ハテ、この人はいらぬ事を尋ねる。張臂をせねば醫者やうでござらぬ。斯う右の手は、大樞の病人では出しませぬで、左樣に思し召せ。貴樣ぐらゐの脈は、片手でも片足でも、間に合せるの。

よい　ハテ、大風な醫者だ。（ト兩人顏を見詰め、いろ〳〵思ひ入れあつて）

道庵　イヤア、、、、、この死人は。

よい　この醫者は。

道庵　慥かに、この中隅田堤で、殺した飛脚だワ。

よい　ヤア、そんならその時、おれを殺した

道庵　イヤ、これは餘人に見せさつしやい。（ト行かうとする。）

よい　ドツコイ〳〵、逃がしはせぬぞ。おれが敵の藪醫者め。おれが敵だ、勝負々々。

道庵　エ、、べら棒め。（ト片手で突き飛ばし、逃げようとする。）

金六　喜之　ア、、コレ、どうした〳〵。

ト立騷ぐを、道庵突きのけ、逃げようとして、門口より路地へ駈けて入る。よい助、追つかけて行かうと門口へ出る途端に、落間より、道庵に似寄りの見物、花道へヒヨイと上がる。

よい　ウヌ、醫者め〳〵。（ト武者振り附く。見物うろたへ、向うへ逃げるを追ひかけて、揚幕へ入る。）

金六　喜之　イヤ、とんだ氣まぐれだ。

ト金大、お留、障子のうち、お蝶は見世へ行く。喜之助、路地へ鐵棒を突き入る。此うち流行り唄、鬼七、お綱、殘る。正面の襖を明け、お仙、腹立ちたる氣色にて、ピシヤンしながら

せんエ、、わつちは否だわな。泊りを取るか何のと、アタいやらしい。そんな事は外の見世へ上がつ

て言ひな。わつちらは御免だよ。（トこのせりふにて出て來る。鬼七聞いて）

鬼七　コレ〳〵、お仙や。何だてめえ、どんな客が上がつたのだ。何を泣きッ面をして熱くなるのだ。

せん　それだつてお前、わつちにふく見世をいひながら、そんな理窟の悪いことをすると、親方のアノ

これがね。（ト小指を出して、思はずうか〳〵と言ふ。お綱思ひ入れ。）

鬼七　コレ、親方のコレとは何か。このお綱がどうした。

せん　サア、こりやアね。

鬼七　これがどうした。（トこれにてお仙思ひ入れ。お綱思ひ入れあつて）

つな　エ、、何だな。この子は勤めするやうにもねえ、これとは何か、アノ。（ト指を出して、思ひ入れあつて）

エ、、何か、剛染の客人が、小指を切つてくれろとでも言つたのか。そりやア、モウ、この商賣

にやアいくらもある事だわな。何をそんなにうろたへて、騒ぐ事はねえわな。

せん　イ、エ、それでも十さんがね。

鬼七　十とは誰れだ。

つな　ハテ、い、わな〳〵。十とは何か、客人が天窓の物が質におくから、さうは言はれず、七といふ字

を十の字に棒を曲げずに、ナア、さうか〳〵。何のそれを、エ、、仰山な、娘子供ぢやアあるま

いし、義理を立てる氣前で、其くらゐな事を、切り抜ける働きがねえとは、エ、、素人にも劣る。

ト目嶺で思ひ入れ。鬼七もこなしあつて

鬼七　イ、ヤ、そりやア、アノてめえが、味にせりふに目を附けて言ひ廻すが、其くらゐな事に如才の

ある阿魔ッ子でもあるまい。聞けば男が嫌ひだの、どうの斯うのと、小間しやくれたそのお仙。

鬼といはるゝ親方が、手を下ろして附きものか、但し狐か化物か、そこらを買ふやつが幾たりあ

つて、現在の亭主を鼻毛に

つな　エ。（ト思ひ入れ）

鬼七　サア、あるまいとも言はれぬから、この阿魔ッ子を問ひ條にかけて、善悪黒白を分ける。差し詰

めこのお仙、堅木の薪の折れる程、敲き折つて。

ト お綱へ當て、お仙を捉へて、有り合ふ薪にてぶちにかゝる。お綱留めて

つな　コレサ、何も知らねえこのお仙を、むぜッかいな、可哀さうに。（ト留める。）

鬼七　コレサ、お綱、なんにも知らねえとは何の事だ。そしてこの餓鬼が、何ぞ知つてゐる事でもある

のを、てめえ知つてゐるか。

つな　何だねお前、味にからんだ物の言ひやう。どうかそれぢやア、お仙にわつちが

鬼七　頼んであると誰れが言つた。言へば言ふ程おぬしはおれに、味にせりふへ節をつけて

つな　コレナ、さうぢやアねえがね。

鬼七　さうでないなら、構やるな。

つな　それだといつて、可哀さうに。

鬼七　ハテ、仕置きをするは當り前だワ。

ト打たうとする。お綱留める。よき途端に門口より、權助、うか〳〵と出て來り、折檻と見て内へ入り

權助　モシ、親方、權助が來やした。マア〳〵、待ちなさいまし。こりやア、また子供衆の折檻かえ。モシお綱さん、お前この子によく言ひ聞せなさいな。七さんには店行事から用があつて來やした。ちよつとマア懸合ひがあるよ。

鬼七　用は後でもいゝ。延びてゐさつしやい。

權助　ハテ、今聞かにやアならぬ羽目だ。ちよつとわしに逢つて下さいよ。

鬼七　エヽ、今行くわな。

權助　ちよつとあよびねえな。モシ、仲間づくの事だわな。

ト無理に引ッ張り〳〵、障子のうちへ連れて入る。お綱、お仙、後を見送り、思ひ入れあつて

つな　エヽ、この子としたことが、手前が不器てんなことをいふから、ツイおれまでが、凹むやうな事になるわな。

せん　それだといつてお前、あの十さんがお前さんの事を頼みなさるその口で、理窟の悪い事を言ひなさるからね。

つな　ハテ、もう、いゝわな、こんな時にはうつかりと物を言ふと、えて間違ひあるものよ。そりやア、さうと、てまへ、あの大事の守りを持つてゐるか。

せん　アイ、持つてゐるのを、あの十さんが見なさつて、男の起請であらうから見せろといつて、書きものを

つな　エ。（ト思ひ入れ。この時道庵、路地より出て門口にて内を窺ふ。お仙守りをお綱に見せる。）そんなら守りの書きものを、あの十さんが見かぢつて、無理な理窟を。

せん　アイ。

つな　（ト言ふ顔よく〳〵見て、愛ひを含みし思ひ入れあつて）添へし守は荒磯の、伊豫の國にて、父上の、お情け受けて安々と、産み落したる姫君に、斯く淺ましき（ト思ひ入れ。）

道庵　さては。（ト思はず言ふ。）

つな（惚りして思ひ入れあり。）エヽ、見世を張りねえな。
ト唄になり、お仙思ひ入れあつて、障子のうちへ入る。直ぐにこの唄にて道庵、門口をそつと明け
道庵　お綱〳〵。（ト入る。）
つな　伯父さんかえ。
道庵　オヽ、道庵ぢやが、コレ、お綱、てめえには改めて、ちつと話しがあるぢや。不承であらうが聞いておくりやれ。
つな　そりやア、モウ、伯父さんの話しがあると言ひなさしつちやア、何事おいても。
道庵　コレ〳〵〳〵、その伯父さんも、有りやうは、赤の他人のこの道庵。七が所へ仲人の、その橋渡しが縁になり、頼まれた假りの伯父だが、今日といふ今日縁を切る。さう思つてゐやれよ。
つな　モシ伯父さん、縁を切るとはえ。
道庵　ハテ、純友の餘類だから。
つな　ア、コレ、それをどうして
道庵　コレ、隠しやるな。殘黨と知つたは抱へのあのお仙、おれが外から聞くとも知らず、荒磯切れの懸守り、純友が方に限る切れ。親の筐と二人して、話してゐたを、見かぢつたが、何と違ひはある

まいがな。
つな（思ひ入れあつて）さう伯父さんに知られちやア、隠したとても詮がねえ。併し守りのあの切れは、荒磯錦か知らねども、純友とやらいふ人の、別して身寄りの
道庵　ないとは言はさぬ。たつておぬしが言はねえと、この儘われを連れて行き、言はせる所でしやべらせる。この道庵と會所へ來やれ。（ト左の手にて引き立てんとする。お綱振り切り）
つな　エヽ、置きなさいな。詮議をされる覺えはない。
道庵　イヽヤ、詮議をせねばならぬ。手向ひすると伯父の威光で、（トまた掛かるを、片手ゆゑお綱振り切る。）エヽ、自烈つたい〳〵。おれが片手で不自由だと思やアがつて、馬鹿にするか。兩手はあれど右の腕に此やうに、握つたものが
ト右の手を出す。これに前幕の印子の尊像、袱紗の包みを握り詰めゐる。お綱これを見て思ひ入れあつて
つな　こりや、伯父さんの右の手に、握つてござんす袱紗の切れ。さも堆かき（ト腕を捉へ、よく〳〵見て）どうしてこれを伯父さんは
道庵　話すも餘り慾張りだが、この中隅田の雪の日に、知らぬ飛脚が持つて來た、白木の箱の其うちに、

藥師如來の印子の御佛。多田の家から持つて來たと、聞くとその儘大金に、ならうと思つて物したが、佛の罰かこのやうに、握つた儘に手を離れず、因果な佛に見込まれて、今ではどうも道庵が、イヤ手古摺つてゐる最中よ。

つな　エヽ。そんならそれは、アノ隅田の、雪のその日と云はんすが、その時慥か屋根船の、際へ流れし白木の箱。割符を合すその尊像。モシ、伯父さん、どうぞわつちにくんなさい。

道庵　イヤ、モウ、今では益體な。手前療治にいかないこの手、離れる事なら離したい。ならう事なら離してもらはう。

つな　そんなら、どうでも、握つたその手が離れぬかえ。離れぬならば斯うしねえ。この合口でその指を、切つたら大方離れさうによ。幸ひお前のさしてゐる

ト道庵が差してゐる合口を拔いて、切らうとする。道庵うろたへ

道庵　ヤア、その合口で指を切る。イヤ、めつさうなことを言ふ。指を切られてたまるものか。それよりわれを純友が、身内の詮議を（ト片手でかゝる。）

つな　（合口を見て）伯父さん、お前、その指を切つてしまひな。

道庵　おきやアがれ。伯父の五本の指を切つて、心中にもなるまい、無駄をせずと、會所へ來い。

つな　五本の指をくんなさい。

道庵　コレ〳〵、危ねえ、刃物を寄越せよ。

つな　指をくんなよ。

道庵　エヽ、無駄をするな。

ト片手で突き廻す。お綱、合口を兩手に握り、道庵の指を切らうとして、思はず腕首をよき程落す。どろ〳〵になり、血の穢れにて、腕を放れ、尊像落ちる。道庵苦しみ倒れる、お綱、思ひ入れあつて

つな　さては血汐の穢れにて、握りし尊像。（ト取り上げる。）

道庵　ウヌ、大それた、切つたな〳〵。

つな　アヽコレ、誠に怪我だよ。

道庵　怪我だといつて濟むものか。その尊像を寄越しやアがれ。エヽ、コレ、どうでも片手は不自由だ。アレ、お綱が伯父を、このやうに切つたぞ〳〵。切つた〳〵〳〵。

ト武者振り附く。よろしく佃節か何なりと騷ぎ唄、鐵棒の音、兩人立廻りよろしく、トヾ、道庵片手にて炬燵蒲團を取つて投げ、又は櫓をも取つて打附ることよろしく、お綱、道庵を仕止め、死骸を炭櫃の下へ入れ、切つたる手首、合口も下家へ打ちこみ、また元のやうにして、蒲團にてこぼれし血

を拭き、元のやうに櫓にかけ、尊像は懐中してホット思ひ入れ。

鬼七　お綱や〳〵。（ト呼ぶ。お綱思ひ入れ。鬼七出て來り）コレ、かゝアや、わりやア先刻からこゝにゐるか。

つな　アイ、アノ、お仙に何やら教へてゐて。（ト思ひ入れ。）

鬼七　（顔を眺めて）何だこの女は、色青褪めて、きよろ〳〵と。コレ、てめえ、なんぞ氣になる事でもあるか。（ト思ひ入れ。）

つな　アイ、イヽエ。

鬼七　アイ、イヽエ。そんなら氣色でも悪いか。

つな　アイ、どうも氣合ひが。

鬼七　悪くば藥でも服むがいゝ。伯父御もゐたぞよ。見てもらやれな。

つな　アイ〳〵。（ト思ひ入れ。）

鬼七　（目を附け、）伯父御はどこにだ。呼んでやらうか。コレ、道庵さん。

つな　アヽ、モシ。もうよくなつたよ。

鬼七　ハテ、押すとわるいよ。コレ、紙入に紫金錠があつた。

つな　アイ。（ト思ひ入れ。）

鬼七　エヽ、早く服みやれな。

つな　アイ。

ト唄になり、お綱思ひ入れあつて、障子屋體へ入る。鬼七殘る。この唄を借り、海老ざこの十、傘をさし、路地口を出て來り、門口にて

十　お賴み申しやせう。茨木屋の七さんの内はこゝかえ。

鬼七　アイ、七五郎はわしだが、マア、お入りなされませ。

十　お許しなされやせ。（ト内へ入り）こりやア、お初にお目にかゝりやしたが、七さんかえ。

鬼七　アイ、わしは茨木屋の七五郎といひやす。面が怖いか、世間では鬼と異名を取つた男。して、お前はどれからござりました。

十　アイ、わしやア海老ざこの十といふ、看屋でござりやすが、今來やしたは、別の事にてもござりませぬ。ちつとお前に、無心があつて來やした。

鬼七　エヽ、無心とは。何の無心かえ。

十　外でもないのサ。此方の抱への其うちに、杜若によう似た三日月お仙、このごろ見世へ出るからは、年もあらうがそこが話しだ。貰ひに來やした。貰ふ男も矢ッ張りわしだ。モシ、御不承ながら

あの女をわしに下さい、貰ひに來やしたヨ。（トずつけり言ふ。）

鬼七　（思ひ入れあつて）ア、、何の話しでござつたかと思つたら、抱へのお仙を貰ひにござつたのか。そりや、モウ、折角こなさんが來たものを、潰されもしまいし、お仙が年季の證文ら卷いて、こなたに駄斗を附け、清く女を

十　くれる氣かえ

鬼七　否だ。

十　どうしたと。

鬼七　ハテ、よく物を積つて見さつしやい。こなさんが當時流行する、若い人でもあらうが、わしも茨木屋の七五郎、勇み手合ひを相手に商賣、欲しいといつて貰ひに來るたび、猫の兒ぢやアあるまいし、金で抱へた阿魔どもを、さう手輕くやつて見さつしやい、竈にかゝはるワ。わしが高い鼻の下が、そこりになる話しだから、不承ながら、こりやア、出來まいかによ。この寒いのに、こなさんも長い橋を渡つて、足を運ばせるも氣の毒だから、さつぱりとお斷りだ。併し、これを緣にして、ちつと遊びに來ねえ。こなさんの返事は、マア、こんなものサ。

十　アヽ、不承知か。併し、こりやア、不承知でもあらう。何をいつても玉を取られちやア、米櫃

にかゝはる話しだ。そんならお仙は貰ふまい。あの女の代りを貰はう。

鬼七　成る程、貰ひかゝつて貰はずにも歸られまい。事と品によつたらば、相談づくといふ事もあるが、お仙の代りには、どの餓鬼を貰はうといふのだえ。

十　誰れ彼れとも言ひやすまい。初めがお仙で出來た話し、お仙の面に似た女を、一人貰ひたいね。

鬼七　お仙が面に似たといふ、その心當てがあるかえ。

十　隨分あるの。外でもねえ。あの阿魔に似たといふは、こなさんの抱寐をする、女房のお綱どの、貴樣のかゝアをおれに下さい。

鬼七　（思ひ入れあり）ナニ、おれがかゝアをくれろ。アヽ、これで讀めた。道理でさつきお仙めと、お綱が今もうつかりと、色靑褪めた

十　エ。

鬼七　ヤア、そんな理窟は後へ廻して、コレ、こなさんは年はいかねえが、豪氣な横を言ひ出したな。さういへば、どうかこなさんは、萬更見ねえ顏でもねえ。アヽ、どこでかこの中見たやうな。

十　見た筈サ。あとの酉の日、花又の、二度目の市の歸りがけ、雪に逢つたは榎木戸と、便船したる屋根船の、丁度雪見の宮戸川、連れは二藤へぶらさげて、あとは行火に差向ひ、酒の手もある年

増ゆる、意氣なかゝァと小野郎が、氣の差したのが因果の始まり。

鬼七　フい、そんならこの中雪の日に、長屋手合ひと向島、喰らひ醉つたるうたゝ寐を、待乳の鐘に起されて、いつそ今宵はずるけうと、土手から船を呼子鳥、覺束なくも向う越し。

十　慥か汐時、雪水に、せかれて何か流れ寄る、それを幸ひお土産の、竹の熊手で引き揚げた、その時土手に（ト思ひ入れ。）

鬼七　黄昏なれど雪の暮れ、洲にかゝつたる屋根船の、内ぞ怪しき出合ひ船、そんならもしや

十　ヤ。（ト兩人顔見合せ、思ひ入れ。）

鬼七　こいつァ面の立たねえ話しだ。

十　サア、斯う言ひ出してちやァ金輪ざい、わしが腰押し成田山、千葉妙見の扱ひでも、こればつかりはお斷りぢやが、非分になつても貰つて行く、三行り半の去り狀に、當時流行りのかまはぬを、印形にして、しつかりと、押したその上、おれにくりやれ、七五郎どん、マァ、さう思つて下さい。

鬼七　成る程、おぬしは大層な、横たつぷりな男氣に、流石の鬼も手こずつて、相談づくで遣りもせうが、去年に替つて顔見世から、おれが役儀を讓つたも、お江戸氣質のあなた方、御贔屓強いお取立て、いづれも樣に免じたら、女房はおろか、御當地で、數年勤めた店頭、座頭株も、讓るまいものでもないが、こなさんは、どうでも鬼が女房を。

（トこのあたりよりお綱、障子を明け窺ひゐる。）

十　鬼が女房、鬼神でも、貰ひかゝつた海老ざこが、かゝァにせねば男が立たぬゥ。

鬼七　隨分やらう。

十　それで野郎の面も立つわえ。

（ト思ひ入れあつて、この時お綱、つか〳〵と出て、鬼七の側へ坐り）

つな　コレ、七さん。

鬼七　何だ。

つな　お前、何だどころぢやァねえわな。あの十さんが振り込んで、横を云ふのを、とつくりと、わつちやァあすこで聞いてゐたが、どこの國にか亭主のある、女房をくれろといふやうな、こんな不法があるものか。それでもわつちが身に取つちやァ、筋違ひでも憎くない、惚れたといふ二字を聞いては、萬更にあんまり腹は立たぬわな。それにはお前は今直きに、わつちを遣らうといふのには、こいつは譯がありやせう。そんな氣まづい亭主なら、わつちの方から斷りだ。遣らば遣りねえ、十さんの、綺麗に女房になつてから、お前の顔を見返すのだ。コレ、十さん、お前も今日か

ら達て引にも、わつちを女房にしてくんなよ。

十　仕兼ねるものか、わしも男だ。娘子供の色事とは、譯の違つた亭主持ち、餓鬼同然な海老ざこが、年增にかゝつて跳ねられちやア、友達めらへ立たねえ羽目。人の女房を貰ふ氣で、首が惜しくてこのやうな、大束附木は賣られない。サア、きりく〳〵と方を附けやな。

つな　お前の性根が極つちやア、わつちも物が言ひよいよ。今まで色戀せぬ身だが、お前の氣性に惚れやした。今日まで剛染んだ亭主だが、愛想がつきた。サア、七さん、離れる氣なら、去り狀くんねえ。

鬼七　そんなら七が女房の綱、異名に取つたこの鬼が、手をすつぱりと切る氣だな。

つな　切らざアお前もおつかない、顏の立たねえ羽目といひ、小口ら利いた茨木屋。

十　その女房のこのお綱、亭主が鬼の手を切らせ、連れて行くには去り狀が

鬼七　欲しくばこゝで今直ぐに、渡す代りに其方から、貰つて置きたい品があら、女房の綱と、その品を

十　此方にあらば何なりと、この女には替へられない。貴樣にやらうがその替り三行り半の去り狀は。

鬼七　おぬしに渡す去り狀は、幸ひこゝに認めた

（ト合ひ方替り、思ひ入れあつて、鬼七懷より、前幕の流れ寄つたる白木の札を出し、有りあふ熊手へ

挾み、海老ざこの十の前へ差し出し、思ひ入れあつて

十　白木の箱のこの蓋を、女房お綱が去り狀と

つな　熊手へ挾みし判じ物、何やらによく似た形、慥かにそりやア東寺なる、鬼の住みたる羅生門。

鬼七　建てゝ歸つた金札の、その夜の役は渡邊の

十　ヤ。

鬼七　サア、綱を貰ひに來たこなさん、女房はやらうがその替り、去り狀替りの箱の蓋、しつくり合せるその箱を

十　そんならこの中、雪の暮れ

つな　今戸の河岸のかゝり船、流れ寄つたるその箱の、蓋は二人の手に渡り、中身は慥かに

十　なんぞの役に立たうかと、貰つて來たるこの箱の、併し、中なる代物は（ト以前の箱を出す。）

鬼七　蓋の文字の樣子では、滿仲公の御所持ある、多田の藥師の印子の尊像、それを女房のその替り、渡して置いて連れて行け。

十　イヽヤ、覺えのない尊像、この海老ざこの手には無い。蓋を持つたが證議の蔓、女房に添へて尊像を、貰つていかねえ其うちは、貧乏ゆるぎもしやアしねえ。

鬼七　おれもそれなる箱のうち、納めありつる御佛を、詮議しださぬ其うちは、歸るといつても歸されぬ、五分でも敷居を跨いで見やれ。

つな　コレ、さうお前方お二人が、角芽立つての言ひ合ひも、元の起りはわたしから。鬼と言はれる七さんも、角突合ひをさつぱりと、また十さんも、物事を、三升の角を不承にも、丸く素直になつた上、箱のうちなる代物の、詮議をしたらよからうと、女のいらざる差し出だが、さういふ始末にして見ねえ。

十　イカサマ、おぬしの言ふ通り、人の女房を貰ふ氣で、強身でばかりもいかねえ話しだ。

鬼七　こなたにやらうといふ女房、お綱が差出た事ながら、肩張り詰めても濟まねえ羽目。そんなら互ひに仲もよく

つな　わつちを遣るとも遣らぬとも、魚と水とのその上で

鬼七　物事團子にやらかさう。

十　さう其方から碎けちやァ、此方はトバがどうなりと

つな　兎に角、話しは酒の事、わつちやァ燗をつけるによ。

鬼七　男は當つて碎けろだ。炬燵へ來さツし。

十　わしもあたつて、巫山戯うか。

つな　三人五德、仲直り。

鬼七　當たらつしやいな。

十　緣起がいゝね。（ト四方より蒲團を明け、きつと目を附け、思ひ入れあり。）

鬼七　炬燵の際にはこの生血。

十　炭櫃の下へしたひしは

つな　エ。（ト二人を突きのけ、蒲團の上へきつと腰かけ、しやんと納る。）

鬼七　女房お綱、ハテ、仰山な。

つな　サ、これは

十　蒲團押へてかみさんの、氣色ばんだる驚きは、そんなら炬燵に（ト思ひ入れ。）

つな　アヽ、モシ、炬燵のうちは埋め火の、今といふ今、七さんと、緣の切り炭、いけてある、炭櫃ぢやゆゑに、十さんを、この炬燵へはどうもマア、御不承ながら遠慮して。

（ト鬼七へ思ひ入れ。海老ざこの十、こなしあつて

十　今まで五德に三つ金輪、話すといつたお綱さん、誠に變る。そんならこゝに

ト寄るな、お綱きつと思ひ入れ。

つな　あの小座敷に置炬燵、行火に火がよい。お前あすこで遠慮なう

十　あたつてゐるようが、其うちに、いさくさなしに、かみさんを

鬼七　やるかやらぬか善悪の、邪正を糺すは、熊手に添へた

つな　去り狀替りの箱の蓋。それも印子の尊像の

鬼七　その道行の判るまで

十　この茨木屋にいぢかつて

つな　わつちを連れてゆくものか。

鬼七　紛れからんだ絲口の

つな　結び目解けるか、ほぐるゝか。

十　二人引く手の緣の綱。

鬼七　繫がつてから、女房の

つな　綱が噂の夜雨かな。

十　それは雪の夜、お綱さん。

つな　十さん。

十　ムウ。（ト炬燵へかゝる、三人思ひ入れ。）

鬼七　話して行きやれ。

十　思案ものだよ。

ト唄になり、以前の札を挾みし熊手を持ち、海老ざこの十、障子のうちへ入る。お綱鬼七殘る。あと合ひ方。お綱奥の方を見やり、こなしあつて

つな　コレ、七さん。モシ、思はず手に入る（ト懷より尊像を出し、見せうとする。）

鬼七　アヽコレ、言ひ譯らしくわが手から、おれに渡すに及ばぬ品。亭主の鼻毛を數へたお綱、長屋の手合ひへ知れぬうち、内には置かぬ、出てうせう。

つな　そんならわたしを十さんと、もし間男でもしたといふ

鬼七　もし間男も氣が強い。眼前今戸の雪の暮れ、洲にかゝつたる出合ひ船、見て見ぬ振りの通りもの、面の汚れぬそのうちに、去つた女房は片時も、内には置かれぬ。サ、コレ、きり〳〵こゝを

ト目顔で知らせ、表へ出さうとする。お綱呑み込み

つな　エヽ、出ろなら出て行くこゝの内。これから晴れて十さんの、世話になるのがわたしが願ひサ。

ト此うちお仙出かゝり、立ち聞きゐる。

鬼七　エヽ、イケ腹の立つ、その口を。（ト立ちかゝる。）

せん　（かけ寄つてこれを支へ）アヽ、モシ、おかみさんを去る事はわたしに免じて。

鬼七　うぬもかゝアが間男の、慥かに相摺り、二人とも、目立たぬやうに雪道をナ。コレ、キリ〳〵こゝを。（トお仙を外へ突き出す。お綱こなしあつて）

つな　抱へのこの子も連れ立つて、あの十さんの世話になる。十さん今から、二人とも

鬼七　きり〳〵うせろ。

つな　うせねえぢやア。

せん　コレ、そりやアあんまり。

つな　一緒に來や。（トお仙が手を取り、向うへ行かうとする。）

十　（奥にて）エイ。（トかけ聲して門口の雪一度に散る。三人思ひ入れあり。）

鬼七　軒に積りし白雪の

つな　一度に散亂なしたるは。

ト、ドンと太鼓の頭を打つ、三人思ひ入れ。

三人　ことに聞ゆる

ト思ひ入れ。この太鼓すぐに通り神樂になり、行列三重を彈き出す。三人思ひ入れあつて、お綱、お仙向うへかゝる。揚幕より喜之助、青漆の合羽、高殿立、大小、紺看板、若黨の形に着替へ、中間一、笠をかぶり、つか〳〵と出て來り

中間　片寄れ〳〵。

ト押し戻す。兩人中間を搖きのけ、行かうとする。この時赤合羽、竹笠の中間、銘々三つ星、一の字の箱提灯を持ち、つか〳〵と出で來り、兩人を中へ挾み、舞臺へ押し戻し來り、パラ〳〵と取り卷き

八人　お迎ひ。

つな　こりや、わたしらが行く先きを、支へて出さんすお供さん、紋も覺えの三つ星に

せん　一を引いたる市川の

中間　そのお旦那のお迎ひに

鬼七　行列揃へし供廻り。誰れを迎ひにどこへ行く。此方の家には其やうな、立派な客の泊りはない。

こりやア大方門違ひ。

つな　外を尋ねて見なさんせ。

十　（障子のうちにて）イヽヤ、迎ひは身が同勢。それへ參つて主に面談。

鬼七　ヤ、何と。

（ト鼓の合ひ方。障子を開き、海老ざこの十、上下衣裳大小に改め、以前の熊手を持ち、渡邊のこしらへ。金六、權助、奴の形に着替へ、つか〳〵と出て

金六　動くな。（ト三人を圍む。）

權助　

鬼七　合點のいかねえ、海老ざこが、衣服大小改めて、呼びかけたには樣子があらう。

つな　その身の素性を海老ざこさん、話して聞かしてくんなさい。

十　申さずとても提灯の、紋に顯はす三つ星に、一の文字は、誰れあらう、源家譜代の鳴滝のもの、武藏の三田にて生ひ立ちし、渡邊の源次綱。

鬼七　さてはあなたが渡邊の

つな　その綱さんが、この綱に、足を附けての目論見は

十　二人が素性を知らんが爲に。

鬼七　ヤ、なんと。

つな　

金六　旦那の指圖に貸物屋、大小衣服を持ち込んだも、お側使ひのやつこらさ、お草履攝みの奴の三田平。

權助　山鯨から附け込んで實名探る附人は、同じ仲間の二合半、山椒醬油か盛切り權平。

喜之　鬼の子からに喜之助も、路地番、門番引ッくるめ、指圖に入り込む三崎の藤內。

金六　實名隱す茨木屋。

權助　きり〳〵姓名

三人　名乘つた〳〵。

鬼七　イ、ヤ、實名本名と、その名を隱す男でない。疑ひ晴らして速かに

十　イ、ヤ、包むは卑怯の至り。正しく純友餘類の一族。綱もお仙も氏素性、ありと睨んだ渡邊が、胸中探らんその爲に、便船したる船のうち。色で仕掛けてあはよくば、一味に招かん計略の、臍へ落ちたる間男の、仕事にかゝつた顏を見せ、わざと入り込み窺ふところ、夫婦といへど隔てある、やうにも見えて二つには、抱へのお仙を手荒くも、見せて誠は勞はる樣子。彼れこれ以て心得ずと、目を附けおきしに、又候や、最前下家へ血汐の滴り。人を殺めて印子の尊像、この家に隱し置きつらん。詮議の役目は源次綱、われに渡さばこの場は一旦、見遁して得させん。左なきに於ては抱への女、直ぐさま繩掛け拷問なす。返答聞かん、ナヽなんと。

鬼七　すりや、われ〳〵が身の上を

つな　疾くより知つたる渡邊どの。
十　異議に及ばゝ召捕らさうか。
鬼七　サア、それは
つな　實名明かすか。
鬼七　サア、それは
十　尊像渡すか。
鬼七　サア
皆々　サア〳〵〳〵
十　返答いかに。ドヾ、どうぢや。
鬼七　エヽ、遁れるだけはと思へども、敏き詞に是非なくも、素性を明かさん、女房と、いひしは偽り御主人の
つな　お情け受けしみづからこそ、純友公の手廻りにて、官仕へせし待女菅屋、お腹に宿せしこの姫は、主君の爲の御落胤。
せん　九重姫が身の成行き。

十　して、又、男が實名は。
鬼七　かねて音にも聞きつらん、純友公の身内にて、伊豫の國高綱の、落城なせしその時まで、君に附添ひ奉り、忠臣無二と呼ばれたる、伊賀壽太郎正純なるワ。
皆々　さてこそなア。
鬼七　斯く實名を明す上は、渡邊觀念。（ト一腰を取つて立ちかゝる。）
十　ヤレ、待て伊賀壽、たとへ其方刃向ふとも、八重に取り卷く我が圍み、却つて姫の命の瀬戸。そこを存じて九重姫、菅屋もろとも命を助け、無事にこの場を見遁し申さん。その替りには印子の尊像、故なく渡すや、ナヽなんと。
鬼七　その一言に偽りなくば
つな　わたしが手に入る印子の尊像、渡邊どのへ速かに。イザ。
十　イザ〳〵〳〵。（ト お綱、海老ざこの十へ尊像を渡す。海老ざこの十取つて）
つな　これぞ誠の印子の尊像、今より當地に勸請なし、多田の藥師と後の世まで
鬼七　然らば伊賀壽は、この儘に、お二方の御供せん。
十　役目濟んだるこの綱は、直ぐにこの場をこの儘に。（ト表の方へ來る。）

せん　返すぐ〳〵も御仁心。
つな　仇には思はぬ渡邊どの。
鬼七　併し下さくなこの内へ、ござつたからはお歸りまで、矢ッ張り勇みの海老ざこの十。
十　十めん九めんのこの形で、歸りは例のそゝり節。
せん　またこの次と吸ひ附けた
つな　萱一葉の別れ路も。苦界の習ひ、お屋敷さん。
十　又ひやかしに
鬼七　必ず來さつし。
つな　十さん。
十　あばよ。
皆々　お立ち。
十　コレ。（ト木の頭。）ハテ、野暮なやつぢや。

ト よろしくあつて

ひやうし　幕

二番目　大切

浮世を廻る一筋も
狂言綺語の道直に

親子連枝鶯

常磐津連中

役名。　源頼光。山賤、斧右衛門實は三田の仕。山賤、鐵藏實は鬼同丸。馬士、どう六實は夜叉太郎國秀。鯰坊主、雷雲。池田中納言息女、花園姫。賤女實は豐後次郎妹、白梅。賤女實は三田源太妹、紅梅。快童丸。山姥。女奴、此絲。

本舞臺三間の間、一面に振りよき梅の立ち木。この前に笹龍膽の紋附きたる紫の幕を張り、西より東へかけて、見事に紅梅、白梅の吊り枝、よき所に初音が原と書いたる榜示杭。上の方草土手の上に常磐津連中居並び、すべて箱根山中、渡り拍子やうの鳴り物にて幕明く。

ト頭取出て、浮瑠璃名題、役觸れあつて、其爲口上さやう、直ぐに前彈きになる。

〽御最員に頼光は、東國へ、下向も既に箱根なる、初音が原も恥かしき、花園姫にお杉役、赤い奴を引きかへて、イヨ有り難いかつらが顔見世。

ト跳へ賑かなる鳴り物になり、眞中に頼光、羽織衣裳にて、紫の袱紗をつむりへ巻き、紅梅の枝、吸筒を附け、これをかつぎ、上の方に花園姫、廣振り袖、裲襠の上より扱帶をゝめ、梅にて葺きたる傘を頼光

へさしかけ、下の方に此絲、奴の衣裳にて毛氈を附け、茶辨當にもたれ、兩人を見てゐる。三人この見得よろしく、舞臺眞中へせり上げる。鳴り物打ちあげて

〽人も木毎に早咲の、梅に心も移り香を、止めてこゝに御大將、酒宴の興も杯の、九數さへ積る花の雪、降りみ降らずみ傘を、さすがに姫は、さゝ鳴きの、まだ鶯の懷子、此絲さてまたお末の此絲が、とんだ役目の茶辨當、かつぐも日頃のやつこらさ、御用に立ての仰せなら、色の諸分けはチヽチツト、やつたやうではないわいな〽浮氣の風が葺屋町、こちへこちへと入り來る。

ト舞臺よろしく納まる。

賴光 誠に、花あれば人といふ、言葉宜なるかな。賴光當國の任蒙る折柄、蜘蛛の障礙にしばしの惱み。この程とみに全快なし、直ぐさま下向に赴く路次、この初音が原の梅の盛に、日時をうつし思はずも。

花園 咲きも殘らず散りも始めぬ、この早咲きの梅の景色、櫻にまさるよい眺めでございますわいなア。

此絲 モシ〳〵、お二人樣、梅をお褒め遊ばすはようございますが、私しは奴がはりの、ひよんな役目で、肩やら手やら、堪つたものぢやございませぬ。

賴光 イカサマ、さうであらう〳〵。花見の供に侍ひどもは、堅くるしうて如何かと、本陣に皆殘して

置き、其方一人を道の供、さぞ心配なことであらう。サヽ、これからは花の下で、酒と致さう。

花園 アノ、九獻をお上がり遊ばしまするか。

賴光 ハテ、たべいでは。仕附けもせぬ淨瑠璃の大將役、これは素面でどうして（ト杯を取り上げる。花園姫瓢にてつぐ。）イヤ、これは憚り。誰ござらう、池田中納言の御息女、花園姫どのゝお酌。恐れ入りましてござりまする。

花園 アレ、又あんな。（ト此絲へ思ひ入れ。）

此絲 ほんに、お野暮な事ではあるぞ。あなたも源氏の御大將樣、……お色の一人ぐらゐは、ナア、お姫さま。

ト花園姫恥しがる。

賴光 イヤ〳〵、女によつて家國を亡ぼす事、和漢にその例しまゝあれば、われに於ては女の道は

此絲 アノ、お膳を据ゑましても。

賴光 箸は取らぬ〳〵。

ト此絲、花園姫、瓢を見合せ、こなしあつて

花園 此絲。

此絲　姫君さま。

〽辛氣〳〵の折からに

ト摺り鉦入り、浮いた合ひ方になり、向うより白梅、紅梅、染やつし、賤の女のこしらへ。衣裳の棲を端折り、水桶をつむりへ乘せて出て來り、花道にとまる、

〽八瀬や大原ぢやなァ、黒木をかはいの、しのぶをかはいの、こちはかはいの男まさりに麓から、水桶つむりへがつくりこ、そつくりこ、登り下りをあて呑みに。

トこの文句のうち、兩人とも、水桶をおろし休みゐる。ト向うよりどう六、馬方のこしらへにて、沓をこしらへながら出て來る、

〽今日も朝からよたん坊、箱根は八里かれ樣は、だりむくつたる馬方の、女馬が好きか後から、ほてつばらめと抱き附いて、ドウド、ヨヽさうだとじなつくを、エヽと振り切るはずみにころり、二人は先きの坂道を、あとからひよろ〳〵のたまくが、ぶつくさ言うて來りける。

ト白梅、紅梅先きに、どう六捨ぜりふにて本舞臺へ來る。

どう　うぬ、阿魔めら、待ちやァがれ〳〵。……ヤイ、よく泉坂のどう六樣を、二人して投げやァがつた。うぬら、遣る事は、ならないぞ〳〵〳〵。

白梅　コレ、大概なこと言はしやんせ。こちらが何のこなさんを

紅梅　それいなァ。足場の惡いこの山道、大方石か木の根で、こなさん獨りして

どう　イヤ〳〵、女には負けては、仲間の者へ面が立たない。どこのか所をくりぬいて、胴亂がはれにしてくれべい。

ト立ちかゝる。此うちこなたの三人、酒盛りしてゐて、この時見兼ねて、此絲支へて

此絲　アヽ、コレ〳〵、待たしやんせ。

どう　イヤ、構はつしやるな〳〵。

此絲　サア、構ふまいと見てゐたれど、女を捉へておとなげない。却つてこなさんが笑はれうと、それでアノ

どう　アヽ、何かえ。女を相手にすりやァ、わしを人が笑ひますかえ。

此絲　笑はいでかいの。

どう　ハテ、ナァ、そいつは思案ものだわえ。（ト思ひ入れ。）

此絲　コレ、女衆、馬士どのはわしが宥める程に、ちやつとござんせ〳〵。

兩人　そりや有り難うござります。（ト兩人立上がる。）

頼光 コリヤ〳〵、女、其方たちは、この所の者さうなが、これより北に當り、彩雲の棚引く山は、何と申すぞ。

紅梅 アイ、彩雲とやら、さいかちとやら、其やうなものは存じませぬ。

白梅 北に當つた山と申すは、伊豆の國、足柄山と申すのでござりませう。

頼光 ナニ、伊豆の足柄山とな。彩雲はまさに人傑の、隱れ住むべき祥瑞。すりや、足柄の山中に。ハテナア。（ト思ひ入れ。）

花園 さうしてそなたの鬻ぐものは、何ぢやぞいの。

どう イヤ、その柄杓はござりませぬが、桶の中のは、呑み水でござります。

此絲 ムウ、なぜその水を麓から。

白梅 サア、この山中には、よい水がござりませぬゆゑ

紅梅 毎日斯うして麓から、汲んで登りますわいな。

此絲 そりやア、しんどい事であらうのに、なぜに男は

兩人 イヽエイナア。

〽所ならひかお國の作法、かの御亭は留守して子の守りをすりや、おかゝ麓の水を汲むえ、

そこで男は夜なべの仕事、寢床敷蓙けんけばむしる、ゆるさんせ山椒魚、蟲には奇妙にきく

といな、言葉をしほに打ち連れて、賤が住家へ急ぎ行く。

ト白梅、紅梅、下座へ入る。

どう ドレ、おいらも仕事を、……モシ、お前方は、馬はいりませぬか。

此絲 コレ〳〵、あの人、頼みたいわいの。

どう そりやア有り難い。宿へなりと、山へなりと。

此絲 イエ〳〵、そんな事ではない、コレ。（ト囁く。）

どう そんなら、あの旦那樣が、こちらのお姫樣をとめるやうに。

此絲 アヽ、コレ。

どう そりやァお安い御無心だが、わしやァおじやれの色事より、外は何にも

此絲 サア、それならわたしも道々の、泊り〳〵で見聞きした

どう おじやれと

此絲 馬士の

どう 色事を

〻夕暮れ急ぐ旅の空、泊り烏の塒をと〻お泊りかえ〳〵〻もしお泊りならば泊らんせ〻連れが先きへと振り放す、無理に捉へて引き入れて〻草鞋とく〳〵お荷物は、こゝへ奥の間に寢させて置いて、もうよい頃とくね垣を、潛り出合ひの折りもよく〻どう六さんかの足許に、わんと一聲〻畜生め〻なくがしよざいか威張るが癖か、その乘りあぢに喰らひ込み、寒の師走も日の六月も、裸かで道中通し馬〻そりやアノぬしが六道に、皆張りこみの裏表、おひへを一つ達引も、おじやれの身には眞實に思やこそ、ヤレ樣ゆゑなら、潮來出島の勤めでも。

トこれより太鼓、鼓のあしらひ、

〻すいたよ髪の毛生え元まで、附けし油の匂ひまで、しよんがえ〻今夜逢はうとて川端通れば、門では招かで櫓で招く、オヤ〳〵。ヤレ〳〵〳〵　此絲　さうだぞ〳〵〻さうぢやいな

〻今の浮世は色の世盛り。

モシ、お大將樣、わしらがやうな身の上まで、割れ鍋に閉ぢ蓋と、それ相應の、小色もやらかしますぞえ。

此絲　それ〳〵。殊にあなたは誰れあらう源の頼光公、お色の一人や二人なうては、世間へ對して御外聞が

頼光　ア、イヤ〳〵、たとへいか程勸むるとても、この頼光は苟しくも

〻弓矢の道に生れ出で、經典の道も尋ねしかば、代々の武道と事替り、ちよつと摘みしたほもなく、また引つかけし得手もなし、元より藝者女郎には、ちつとも食やひ仲の町、胸倉取つてこれ申し、そりやマア何の事ぢやい、などのと、言はるゝ身にはあらねども。

既に軍馬に跨がん時は、妻妾をも顧みず。さすれば女色は武道の妨げ。

〻重ねて諌め無用ぞと、矢張り氣まじにのたまへば。

此絲　こりやモウ、挺でもゆかぬものぢやわいの。いつその事に姫君樣、あなた直き〳〵打ちつけにナ。

……わたしはその間にお手水の

〻水もくも手の杜若、とじやくこなさんよいやうと、家居もとめて

ト此絲、下座へ入る。

どう　コレ、女中おれにどうして。……オヽイ〳〵。（ト兩人を見て思ひ入れ。）ソレ、仕方がない、やらかせ〳〵。（ト花園姫を頼光の側へ突きつける。）

花園　コレ、申し〳〵。（ト頼光が顏を見る。）

〻拙き身にもあこがれて、幾夜寢覺めの枕にも、物や思ふと恥かしく、身のいたづらに形振

りも、かこち顔なるきり〳〵す、ないて明石のあゝ羨まし、どうぞお側にいつまでも、猶餘りあるお情けを、やいの〳〵も口のうち、人こそ知らぬ可愛らし、〳〵頼光公も姫君の、さすが心の割りなさに、ともかくもとの御氣色を〳〵見て取り持ちが、これからの、あとの所は幕の内、さァ〳〵早うとせり立つ馬方が、花の木の間へ。

ト どう六、頼光花園姫を無理に幕のうちへ入れる。

どう ヤレ〳〵、仕附けもしない取持ち役、どうやら斯うやら床を廻した。ハ、、、、、。（ト合ひ方になり、どう六思ひ入れあつて、あたりを見廻し）鬼同丸と心を合せ、頼光が當國へ、下つてうせるその道で、窺ひ寄つて馬方に、姿を窶した夜叉太郎國秀なれども、これまで名に聞えた武勇のやつばらが隨へば、仕損じてはと見合す折柄、幸ひとこの初音が原の、梅見物に、供とては、附いてうせた女めばかり。今頼光と花園姫が、うまいその中、覗ひ寄つてたつた一討ち。あとは都の滿仲、頼信、これらは射止めた猪同然。ドレマァ、手強い頼光めを。ソレ〳〵。

ト 傍示杭のもとを掘り、一腰を出し、ぽっこみ行かうとする。この時下座より白梅、紅梅、つかつかと出で來て、これを支へ

兩人 曲者、動くな。

どう うぬはさつきの、變な小女郎。コリヤ、何をしやァがる。

白梅 其方こそあれなる幕の内、そりや、何事をしやァがる。

どう サ、そりやァ

紅梅 頼光公へ近寄つて、只一討ちとは、これが誠に出來ない相談。

白梅 それより怪しい其方の身の上。

紅梅 縄打つて詮議する。

白梅 サァ、尋常に

兩人 腕まはせ。

どう ムウ、そんならわいらも、こりやァ只の

白梅 知れた事、保昌樣の仰せをうけ、頼光公の御下向を

紅梅 目立たぬやうに警固の役。誠わらはは源家の身内。

白梅 豐後の次郎が妹白梅。

紅梅 三田の源太が妹紅梅。

兩人 サァ、速かに縄にかゝりや。

どう　小癪な女め、さうぬかしやァ、マァ、うぬらから。

ト一腰へ手をかける。兩人吹き替の梅の傘をおつ取り、支へる、ちよつと立廻りに、どう六左右を拂つて、三人シャンと見得、摺り鉦入りの所作だてになる。

〽花に嵐はな、いつも當るぢやないかいな、梅の白雪白妙の、積るわ〳〵、さんざ座敷の綿帽子、見事に咲きし紅梅の、色もうつらふ手毬の、八重に七重に、七重に八重に、重ね重ねる人の山々。（トよろしくあつて、どつこい。）

〽梅のしもともちり〳〵ぱつと、匂ひこぼるゝ爭ひは、ながめ盡せぬ。

トきほひ三重、カケリになり、眞中にどう六、左右に白梅、紅梅詰め寄りきつゝ見得。この道具ぶん廻す。

向う一面山幕、眞中に振りよき松の大樹、枝葉左右に茂り、蔦かづら面白くかゝり、この松の上の方に栗丸太にて仕立し葯家、簾掛けあり、尤も屋根、簾とも跳へあり、梅の吊り枝、松と照葉の紅葉を打ち交ぜたる道具。すべて伊豆の國足柄山深山、谷かげの體、この道具に納る。ト直ぐに鳴り物打ちあげ、淨瑠璃になる。

〽松風ともに吹く笛の〳〵、聲すみ渡る谷蔭の、蔦のかつらの纏ひては、茂れる木々を乖木とし、木の葉の屋根に露霜を、置きまどはせる山住居。

ト衾をかぶせたる篠入りの跳への合ひ方になり、簾まき上げる。うちに山姥、機を織つてゐる見得。正面に山神の畫像を掛けあり。簾あげると打ちあけ、直ぐに淨瑠璃。

〽孟母が昔ならねども、織るや手業のきりはたりてう〳〵、世を空蟬の唐衣、櫛せぬ髪のおのづから、鬼とや人の見るやらん、恥しさよとにつこりは、それしやあがりと三重の帶、とく甲斐もなきうき身かや。

山姥（機の手をとゞめて）　山里は、ものゝ侘しき事こそあれ、世の憂きよりは住みよかるらん、と數へて見れば七歳あまり、この山蔭に身をのがれ、明けても暮れても樂みは、たゞ一人の快童丸。……ほんに、あの子としたことが、マァ、どこへ行きやつたやら、岩角木の根に爪突いて、また怪我でもしやらにやよいが。

〽ほんにどつちへいたづらな、子に引かされて立ち出る、軒の松葉がえり元を、ちよいとあひたし風に、つれてかつ散る紅葉の時雨、さら〳〵さつと降りかゝる、袖を小笠に打ち見やり。

トこの文句のうち山おろしになり、山姥、蔓のまとひし枝を突き、花道へ來る。ト日覆ひより紅葉大分散る。山姥これを見あげて、思ひ入れあつて

吹きしく風にもみぢ葉の、ア、、散るは〳〵。

〽それ林間に酒をあたゝめ、紅葉を焚くといへり、〽さなきだに暮るゝを惜しむ深山邊の、小倉の紅葉かこつけに、汲みかはしたる杯へ、落葉の風情今も見る、景色にさのみ替らねど、われは姿もいつのまに、うつろひ果てし有樣や、ア、おとましと打ち萎れ、越し方思ふぞ道理なる。

トよろしくありて舞臺へ立戻る。直ぐに大薩摩淨瑠璃になる。

〽遠近のたつきも知らぬ山中を

ト草笛入りの合ひ方、誂への鳴り物になり、斧右衛門、白髮おやぢ、柿の頭巾、袖なし羽織、股引、手甲、大まさかりを腰にさし、柴を背負ひ出ると、東の花道より鐵藏、淺黃頭巾、袖なし、手甲、股引、柴を背負ひ、まさかりを腰にさし、出て來る。

〽足に任せて踏みわけて、老木若木のわかちなく、柴を背負つて大束を、しつかと肩へ兩掛けに、戻り木樵の氣散じに、伊豆の下田はさて色所、誰れも湊へ焦れ寄る、ほんにさ、唄を

山路の道連れに、西と東の花道へ、隔てゝこそは歩み來る。

斧右　そこへ見えたは、根ッこの鐵藏ぢやァないか。

鐵藏　さういふは切株の斧右衛門どの、よく精出しますの。

山姥　オヽ、お二人とも、早うござんしたな。

斧右　ホヽウ、快童がお袋か。

鐵藏　今日はまだ逢ひませぬの。

山姥　マア〳〵、一服のんでござんせいな、

斧右　イカサマ、いつもよりまだ日は高い。

鐵藏　そんなら一服やつて行かうか。

ト兩人柴を下ろす。山姥葛家のうちより、百日紅の火入れを持つて來る。兩人煙草を吸ひつける。互ひに捨せりふありて

斧右　時に、今日は小僧が見えぬが、どうしました。

山姥　さればいな、どこへやら遊びにいて、先刻にからわしが側には。

鐵藏　そりやァ危い。何といつても子供の事、怪我でもしたらどうしやる。

斧右　ソレ〳〵、後先き見ずの頑是なし。オヽ、早く呼ばつしやい〳〵。

山姥　サア、わしも疾うからさう思つて。

鐵藏　さう思つてなら、呼ばつしやい〳〵。

山姥　ほんに、あの子としたことが、また大方猪猿相手に、角力取つてるやるか知らん。ほんに油斷もすきもなることぢや（ト言ひながら、こちらへ來り）快童どこにぞ、快童丸〳〵ヤアイ。

ト揚幕にて

快童　オヽ。

ト聲をかけ、大太鼓入りのいつもの鳴り物になり、向うより快童丸、枇杷の葉をかつぎ走り出で、花道よき所に留る。

〽神樂月とてな、片山里も、笛や太鼓で面白や、足のつめたに草履買つてたもれ、子をとろ子とろ、どの子が目好い、かごめ〳〵籠の中の鳥は、いつ〳〵出やる、夜明けの晩に、つるつるつッはいた、木の根笹原潛りくゞつて、ひよいと來たみどり子、〽母を慕うて山道を

ト舞臺へ來り

快童　コレかゝ樣、おりやこんな花を折つて來たよ。

〽いたづら盛りぞ愛らしき。

兩人　オヽ小僧、歸つたか。

山姥　わしがちつと見ぬうちに、ちやんと山遊び。さうして今まで何してぞ。

快童　アイ、わしや天狗の巢立ちとつゝかまへて、鼻柱折つて泣かせてやつた。

山姥　これはしたり、又そんなわるさばつかり。ソレ、をぢさん達に、お辭儀しや〳〵。（ト快童お辭儀する。）ソレ、其方のをぢさんにも。（ト快童辭儀をせぬゆゑ、つむりを捉へ、辭儀をさせる。）

兩人　ヤレ、よくお辭儀が出來たな〳〵。

斧右　ドレ、をぢが褒美をやるべいぞ。（ト柴に附けたる枝附きの蜜柑を出す。）

鐵藏　おれも小僧に鼻藥を。（ト袋に入れし饅頭を小枝の先きに附けて）

兩人　コレ〳〵〳〵。（ト見せびらかすを、快童丸ほしがる。）

〽これを蜜柑や麓のおまん、誰れにやらうな、餘所の子にやろか、今朝も隣の涕汁垂れどのが、腰へあちよとて婆さまの細工、くべた溫石餅かとおもて、とろと圍爐裏で手を燒いたの

兩人　アッ、、、、、。

〽枝の鶯いとし、ほんそにや、鈴やつぼ〳〵、でん〳〵太鼓に風車、くるり〳〵、やつくる〳〵

くる、くるり〳〵と、廻る子よりも親心。

山姥　サア〳〵、快童、その代りにはいつもの踊りを、をぢさん達に踊つて見しや。

快童　アノ、踊りを踊るのかや。

斧右　こりや、よからう。

鐵藏　サア〳〵、早く〳〵。

兩人　見たいわいの〳〵。

山姥　ソレ、快童、山家踊りは

快童　何というた。

〽おんらが在所はな、奥山の、てゝ打ちのでんぐり〳〵〳〵、栗の木の、木の根を枕にござれ、抱いてころび寐、こな小女郎が、直すぐ山家の品物でござれ、だいてころび寐。

快童　かゝ樣、乳呑まう。

山姥　又かいなア。いつまで乳々と、そんな事云やると、つめ〳〵ぢやぞ。

快童　アゝゝゝ。（ト泣き出す。）

斧右　これサお袋、そんな事せずと、だまさつしやいな〳〵。

山姥　イエ、モウ、どうも。（ト言ひながらだます。）

鐵藏　さう言はつしやるな。子供はとかく乳々と。……イヤ、乳といへば、お袋や、この小僧の父御わえ。

山姥　サア（ト思ひ入れあつて）アノ、父御も一緒に。（トこなしある。）

斧右　ナニ、父御も一緒にだ……それでもついぞ御亭主は。

山姥　そんならちよつと近附きに（ト庵のうちより羽織を持つて來り）わたしが夫、二人ながら、よう見知つて下さんせ。

兩人　ナニ、この羽織を。（ト合點のゆかぬ思ひ入れ。）

山姥　サ、まだ年打たぬ女子の身、願ひあるゆゑ山ごもり、年月たつうち若しひよつと、いたづらな氣も出ようかと、心の戒め、それゆゑに、筐を今に夫と思ひ、親子三人ゐる心で

鐵藏　したり、イヤ、きつい女もあればあるものだ。まだ三十になるやならずで

斧右　さうして目立つ伊達羽織、これを男の筐とは、ハゝア、そんならこなたの元の身は

山姥　恥しながら都九條で、勤めを立てし憂き身の末。

鐵藏　道理で只の者ぢやアないと思つた。

斧右　なんとおふくろ。ものは相談、わしらはその九條の廓とやら、つひぞ話しに聞いた事もないが、なんと聞かせちやァ下さるまいか。

鐵藏　ソレ〳〵、とてものことに、その御亭主の客人と、こなさまとのいきさつも、おいらに話して聞かさつしやい。

山姥　これは、マア、めつさうな。どうして今更その話しが

斧右　ハテ、何も慰み。仕形話しでやらつしやい。

快童　かゝさま、早く話しねえな。

山姥　この子わいの、何にも知らいで。ホ、、、、。イヤ、モウ、其やうに言はしやんすもの、話さぬも何とやら。

鐵藏　幸ひこゝに羽織もあり

斧右　シテ、その話しは

兩人　どうだな〳〵。

〽浮世語りも恥しや〳〵〽流れせはしき浮き勤め、替る夜毎のその中に、惚れた男の意地わるな、餘所へ買れてまゝならぬ、時來ては心の廻り部屋〽おきやァがれ、今夜も客か、お目もじなし候はねばと書いて寄越して置きながら、恩にきせるの八ッ當り〽胸にこたへて逢ひたさの、そつと座敷をぬき足に、廊下の音のせぬやうに、明る障子もじれつたく、物をも言はずに取り縋る〽オットよしても暮れの鐘、今までどこのか色男と、すつぱり茂つてやう〳〵と、氣つにはめなでかきやうと來たのか、ちい〳〵め、コレ〽かけるものに取つては、衣桁に小袖、船に苫、匂ひ袋に金財布、軒の燈籠削りかけ、輪飾り胸札狐罠、木の芽峠の茶屋の縁先き、〽よしかえ、こんな所にゐようより、ドリヤと辰の尾、しがみ附き、〽コレナァ今日は取りわけ、言ふ事聞く事たんとある、その約束で今朝早う、ござんす筈を憎らしい、初に逢瀬のきぬ〴〵に、おくり出口のさらば垣、朝露結ぶ縁ぢややら、振返つての一言が、身になるやうな嬉しさに、心に思ふありたけを、言ひ交したに胸盡し、〽野暮な口舌のたゞ中へ、ぶつて脇からまたひとり。

山姥　聞かしやんせ。小田卷といふ太夫すも、其方に惚れてゐてな。毎日送る日文の數、大方三萬三千三百三十三本ほども遣つたでござんせうが、返事のないに腹立てゝ、顔に紅葉の裲襠を、取つて脱ぎ捨て、どこもかも。

〽ほう〳〵夜中にかけ來り、階子とん〳〵わたしが側。

コレ、八重桐さん、否な男に惚れはせぬ。これまで其方は澤山に、抱いて寐たあのおさん、今からわたしに下さんせ。

〽貰ひに來たとずつけりに、此方も日頃の癇癪酒。

コレ、くだ卷さんとやら、折角お前の無心ぢやが、もう百年もたつてから、松葉を添へてぬしさんにあげう、あた馬鹿らしいと言ひさまに

〽突きのけはずみ、ばた〳〵〳〵、縁から下へ落の人、胸がいた〳〵たゝゝゝゝと、泣き出す騒ぎの聲に、小田卷が遣手、引船、仲居、飯焚、出入りの座頭に按摩取、はこ山伏に占やさん、雪駄片足に下駄片足、駈け來る口から奥座敷、太夫さんの仕返しと、こゝでは打ちあひ抓りあひ、銚子燗鍋踏み返し、そりやこそ津波が打ち交ぜて、隱居が子を產む、ヤレ取り揚け、ソレ鰹節、摺鉢、まな板、庖丁ぐわら〳〵〳〵、ぴしやりと鳴る昔に、そりや地震よ雷よ、桑原々々、觀音經、妙法菩薩、京中の、話しの種となりにける。

斧右　そいつは亂癡氣騒ぎだつたな。

鐵藏　それからしまひはどうなつたな。

山蛭　それから扉の宿老親方、寄つてかゝつてやう〳〵と取り鎭めて、此方の口舌も、ツイづる〳〵と仲直り、杯がはりに口と口。ホ、、、、、、もう話しはこれぎりぢやわいの。

斧右　ハテ、それからが肝心のところだ。

鐵藏　もちつと、後をやらつしやいな。

快童　それよりいつもの桃太郎にしないな。

斧右　イカサマ、小僧は、コリヤ、不承知であらう。

鐵藏　ハテ、何ぞよい話しが。

快童　おらア、角力がよい。おぢいと〳〵早くこゝで。

斧右　とんだ望みをするやつだ。

鐵藏　よい〳〵、そんなら今の話しの後を

斧右　おぬしとおれと

鐵藏　角力によそへて

兩人　ドレ、取り組んで見せべいか。

ト白囃子になり、兩人こなしよろしくあつて、ドツコイと浮瑠璃になる。

〽忍び大關逢ふ夜もあらば、人目關脇あらうと儘よ、アリヤ〳〵〳〵〳〵よんやサ、百手く

だいて、その睦言も、漏さぬ中に力水、コリヤ〳〵〳〵〳〵よんやサ、縁小結に通ふ神、遣り手がこはい前頭、首尾をつくらふ化粧紙、アリヤ〳〵〳〵〳〵よんやサ、誰れも三升に三ツ銀杏、この取組ぞはなぐし。

トこの立廻りのうち鐵藏、懐より連判を落す。斧右衛門取りあげ

斧右　こりや、コレ、味方を集むる連判狀。

鐵藏（ちやつと取つて）斧右衛門どの、靜かにござい。

〳〵麓の方へと。

ト鐵藏こなしあつて下座へ入る、斧右衛門見送り

斧右　合點の行かぬ、あの鐵藏、あいつも一癖あるやつだわえ。

快童　かゝ樣、山廻りに行かう〳〵〳〵。

山姥　これはしたり、又そんなわやくを。

斧右　コレ〳〵、その山廻りとは何の事だえ。

山姥　サア、人家はなれし山住居、わしもこの子も誰ひとり、友呼子鳥も連れもなく、心慰む方とては〳〵よし足引の山廻り、四季の眺めもいろ〳〵に、〳〵浮き立つ空の彌生山、桃が笑へば櫻が

ひぞる、柳は風の鷹揚に、誰れを待つやら小手招く、霞の帶の辛氣らし、〳〵めて手と手の盆踊り、七箇の池にうつり氣の、恨なぐしの振りの葉は、露の玉章落ち初めて、焦れて濡らす袖の海、ついだまされて室咲の、梅の暦もいち早く、〳〵門に松立ちやつい雛も、出るかと思へば時鳥、あやめ葺く間に夏の月、待宵過ぎて菊の宴、オヤ祝ひ月里神樂、ほんに〳〵、ほんにせはしき浮世、オヽ、われは、白雪積る山廻り〳〵。

斧右　ムウ、窺ふところまだ裏若き女の身、かく山中に住居なし、悴を守り立つ心のうち、何か願ひのある者ならん。われこそは多田の滿仲が寵臣、三田の仕といふおやぢ。願ひの品にて、力ともなり得させんが、包まず樣子を語れやい。

山姥　ナニ、あなたが三田の仕樣とや。この上は何かお隱し申しませう。われ〳〵二人は北面の侍ひ、坂田の藏人時行が妻、忘れがたみでござりまする。

斧右　さてこそな。して、時行が妻たる身で、いかなる仔細でこの所に。

山姥　サア、その願ひは夫時行、武門の家にはありながら、柔弱非力の身を悔み、無念の最期に過ぎ行く折柄、お腹に宿せしこの快童、何卒勇士に育て上げ、一天下に名をあげさせよと夫の遺言。それよりこの足柄山に分け入つて、山神に誓ひを掛け、この七年の歳月を

斧右　ホヽウ、驚き入つたる物語。母が丹精、山神の加護、悴が勇力さぞあらん。ヤイ、快童、この場に於て、それがしと、わりや力を試して見るかよ。

快童　おもちれえ〳〵。

山姥　コレ、快童。大事のところぢや、負けまいぞ。

斧右　サア、來い快童。

快童　合點だ。

〽神變不思議の快童丸、こなたはあしらふ勇力士、快童いらつて傍なる、松を根こぎに引き拔いて、ふんちがつたる有樣は、人も恐るゝばかりなり。

ト快童丸、縫ぐるみの松の木を引つこ拔く見得、

斧右　その松の根こぎ面白い。サア、打つて來い。

快童　合點だ。

〽勝負々々と打ちかゝるを、すかさず豪氣の力瘤、柄より腕の節くれて、しつかと摑めばめり〳〵、エイヤ〳〵と捻ぢ切つて、左右へ別れて立ちたりしは、目覺しかりける次第なり。

斧右　オヽ、力の程は見えた〳〵。かゝる稀代の勇士の芽生え、それがし推擧し、頼光公の家臣となさんが、如何に〳〵。

山姥　何がさて、頼光公へ差上げれば、母が悦びこの上なし。偏によろしく、仕樣。

斧右　然らば今より、父が坂田の氏を顯はし、坂田の公時と名乘らせて、直ぐさまこれより同道なさん。

山姥　スリヤ、父御の名跡を。エヽ、嬉しや悦ばしや。コリヤ〳〵、快童、今日からは、坂田の公時といふ侍ひぢやぞ。隨分おとなしうしませうぞ。

快童　そんならおれは侍ひになるのかや。嬉しい〳〵。

山姥　オヽ、嬉しい筈〳〵。さりながら、今行きやると、この母に、もう逢ふ事はならぬぞや。快童、こゝへ。

ト快童丸そばへ來る。山姥これを見て思ひ入れ。

〽夫のかたみと見るに附け、そなたの大事さ大切さ、今日別るれば今宵より、母は獨り寢の閨のうち、さぞ面影の懷かしからう、頼光公へ御奉公、勤める暇の明け暮れに。

武術を勵み立身せよ、ヨオヽ、

〽かならず。

必ず人さまに

〽山姥が子と笑はれな。

今別るゝともこの母が

〽そなたの影身に附添ひて、只老先きを守護すべし、とはいふものゝ、これがマア、名殘惜しやいとをしやと、抱きあけ抱きゞめ、思はずワット一聲は、梢に響きて哀れなり。

アヽ、われながら誤つたり。斯くては果てじ快童丸、賴み申すは仕樣、名殘りは盡きじ、早お去らば。

〽暇申して歸る山の、雲に心をかけ添へて、山また山に山廻りして、行くへも知ずなりにけ

ト山姥、砧にて消える。この時山神の像ぬけて、焔硝火たつ。白地になる。

快童　かゝさまいナウ〳〵。

ト尋ねる。早笛になり、斧右衞門、下座の方を見やり

斧右　見たか快童。麓の方より暴れ來る猛獸。仕が後に控へてゐる　手捕りになして君へのお土產。

快童　合點だ。

ト早笛になり、兩人大手を廣げ待ちかゝる。下座より鐵藏、黑四天の形、牛の皮をかぶり走つて出て、ちよつと立廻りあつて、牛の皮を引つ取り、三人立廻り。

斧右　ヤア、うぬは鐵藏。

快童　先刻のおぢいか。

鐵藏　いかにも山賤鐵藏とは、世を憚りし暫しの假名、誠はいつぞや賴信めに、搦め捕られし、市原野の、鬼同丸とはおれが事だ。

兩人　さてこそなア。

鐵藏　われに大義の望みあつて、英雄集めんその爲に、姿を替へて窺ふところ、只者ならぬ小忰、老人、味方をなさばその通り。異議に及ばゞ角にかけ、猪、狼の餌食となすが、返答は、どうだ〳〵。

斧右　おろかや、われこそ三田の仕、快童丸も今日よりは、源家の忠臣、坂田の公時。

快童　奉公初めに、おぢいを縛つて。

斧右　牢獄破つた極惡人、賴光公の御前へ引く。サア、尋常に

兩人　覺悟なせ。

鐵藏　小癪なことを。

ト立廻り、引臺よろしくあつて、ドツコイと留る。向う揚幕にて

雷雲　ヤレ、來いやい。（トどん〳〵になり、裸身に鎧を着、鯰にて、軍兵大勢連れて出て來り）　左大將の仰

せをうけ、快童丸を味方にと、出掛けて見りやア三田の仕、さては源家へ引き取つたな。今一人は鬼同丸、三人一緒に引ッくるめ、入道が手柄にするワ、

三人　何を小癪な。

雷雲　ものども、ソリヤ。

ト どん〳〵になり、三人へ大勢かゝる立廻りあつて

山姥　やみなん〳〵。

ト流れになつて、正面の山幕切つて落す。後打ちぬき遠見の山、ぬり張りの月一杯に飾り附け、山姥、跳への姥のこしらへにて、杖にすがつて岩臺に立ち身。この儘舞臺よき所へ押し出す。

快童　ヤア、かゝ樣の

三人　この體は。

山姥　山神應護の奇特によつて、望みたんぬる上からは、今こそ人界輪廻を離れん、わが子よ去らば。

雷雲　山姥ぐるめに打つてとれ。

軍兵　やらぬワ。（ト立廻り。）

〽實にや一陽來復の、時こそ來たれ歸り咲き、武勇の花も今こゝに、榮え榮ゆる源氏の御代、

盡きぬ歌舞伎ぞめでたけれ。

ト淨瑠璃一杯よろしくあつて、上の方斧右衞門、連判を鐵藏と引ッぱり、下の方快童丸、軍兵を積み重れ上に乘り、雷雲詰め寄る。眞中に山姥立ち身、皆々この見得よろしく、ドッコイ。

斧右　先づ今日はこれぎり。

めでたく

打ち出し

心謎解色絲

こころのなぞとけたいろいと

心謎解色絲

序幕　深川八幡の場

役名。　半時九郎兵衛。鳶の者、お祭左七。赤城左京之助光若。乳人、竹川。本庄綱五郎。石塚彌三兵衛。山住五平太。醫者、東林。絲屋番頭、佐吾兵衛。廻し男、儀助。神原屋手代、金六。角力取、ずんぎり。鳶の者、權。同、八。同、源。藝者、お絲。仲居、お卷。鳥追ひ、お君。同お八重。同、お六。九郎兵衛女房、お時。松本女房、お蔦。

本舞臺三間の間、下座の口石の鳥居、向う石垣の上に玉垣、この前に葭簀張りの茶屋、奉納の提灯開帳札、寄席、淨瑠璃の貼り札など誂への通り、深川八幡の景色、爰に五平太、家中侍ひの形にて、金六、質屋。ずん切、取的の角力とりにて、上手の床几に腰をかけ、次の床几に權、八、源、蔦の者、餘所行の形にて腰をかけ、茶店の婆、茶を汲みゐる。大拍子、神樂、鳥追ひ唄にて幕あく。

權　ヤア、こりや關取の弟子、ずん切どのではないか。

ずん　どなたかと思つたら、お揃ひなすつて初買かえ。

八　イヤ、今日は何よ、山の手と下町と、いさくさがあつた所から、手やいの中がござるので

源　今日二軒茶屋で中直り、そこでおいらも雑魚の魚まじり。

ずん　そりやァ飲み口でござりやすね。そんならあの頭の子分

三人　そのお祭り兄イを、待合はせて居るのよ。

金六　待つといへば五平太さん、昨日わざ〳〵爰までと、お手紙でござりましたゆゑ、二百兩持つて參りましたが、彼の質物の色紙は。

五平　サァ、藝者のお絲が身請けと頼んだ二百兩、いづれ後方。

ずん　モシ、そんなら、あなたもあのお絲さんかえ。そりやァとんだ事だ。私しは今日、あの子がお馴染の

五平　絲屋の番頭佐五兵衛か。大事ない〳〵。おれも佐五兵衛を待つて居る。

權　おいらァこゝで待たうより

八　山へいつて待つて居ませう。

三人　サァ來やれ。

ト鳥追唄、大拍子、神樂になり、鳶の者三人金六に附いて鳥居の内へ入る。直にこの鳴り物にて、向うより佐五兵衛、手代の形。東林、醫者にて、楊枝をつかひながら出て來り、花道にて

東林　春もやゝ景色調ふ月と梅、ではない色と酒、粂本の二階で酒落足らず、また藝者を連れて山じやれとは妙々。

佐五　イヤまた、そよと南が吹いてくると、白魚網で屋根船もよいが、とかくお絲めが酒ばかりくらつて、中の字をきめるにはあやまる。

東林　中の字といへば、アレ、仲町の眞中をよろ〳〵と、とんだ氣性な藝者だ。オイ〳〵、早く來ないか。お絲坊、つんぼう。

ト長く呼ぶ、向うにて

いと　何を悪酒落な。東林さん、待ちなさんせいなァ。

ト跳への流行り唄になり、向うよりお絲、仲町藝者にて、お卷につかまり、酒に醉ひしこなしにて出てくる。儀助、廻しにて、三味線箱を持ち、附いて出て來り

まき　佐五さんと一緒に來ようと思うても、お絲さんが轉ばさんせうと思うて。

佐五　オット、その轉ぶを願つて居ても、下駄が轉ばずやで辛氣辛苦だ。ドレ、手を引かうか。

いと　イエ〳〵、丼で三ツや五ツ飲んだとて、醉ふやうな弱い酒ぢやござんせん。昨夜も土橋の玉泉さんと飲み明し、とう〳〵盛り潰したは、餘ッ程手柄者でござんせうがな。

儀助　きつい御自慢。その度々に迷惑はこの廻し、酒と一緒に、お絲さんに廻されるには

いと　困るによつて、否かえ。

儀助　何サ、御祝儀はバツ〳〵と、去年の雪の樣に、煩せえほど下さるし、これからまた山へいつて、

水風呂桶で始めやせう。

いと　こりやよいわいなア。

まき　サア、ござんせ。

ト唄の切れにて皆々本舞臺へくる。

佐五　こりや五平太樣、ずんぎりも待ちかねたであらうな。

五平　佐五兵衞、きつう待たしたな。

いと　お前は五平太さん、そんなら佐五さんともお近附かえ。

五平　オツト、さしだと氣遣ひがるは尤もだが、これまでは身共も、そもじを口說いたなれど、とんと

思ひ切つて、これから佐五兵衞に取りもつが嬉しいか。

いと　そりやマア、お禮から先へ云ひやんせう。

東林　イヤ、また得心さへすれば、本町筋の番頭株、石町新道あたりへ圍はれ、居ながら拜む撞鐘堂。

儀助　ざつと五十や三十の、小金には困るまい。

東林　妙々。

ずん　さう致したら、わしも折々參つて、地取でもお目にかけませう。

ト此うちお絲、お卷に囁いて、紙に包んだ物を渡す。

まき　アイ、モシ、ずんぎりさん、これはお絲さんから。（ト金をやる）。

ずん　これは有り難うござります、よろしくお禮を。

ト此うち、鳥追唄になり、鳥追お八重、編笠にて三味線をひき、鳥追お君、同じく盆にお拈りを入れ

持つて、下座より出て來て

きみ　ことぶき祝ふ初春に、七福神の寶船、エオイ〳〵。

トうたふ。お八重は三味線をひく。

まき　アレ、お絲さん、見なさんせ。

いと　ほんに、可愛らしい鳥追ぢやわいなア。

きみ　御新造さん、入れさしやんせ、入れて下さんせいなア。

東林　イヤ、藝者を捕へて入れろとは、妙な事を云ふわえ。

佐五　マア、縁起がいゝ。ドレ〳〵、壹文やらう。
　　ト錢入れより出してやる。お君盆にて受ける。
儀助　こんな子を鳥追にしようより、年一ぱいなら仲町しろもの。
きみ　旦那さん、金下さんせ。
皆々　ヤ、何といふ。
きみ　金が欲しい、金下んせ。
八重　コレ〳〵お君、そんなこと言はぬものぢやぞえ。
佐五　ハテサテ、つけ上がりのした乞食め。何ぞ買ひたい物でもあるか。
きみ　イヽエ、買ひたい物はござんせんが、金下さんしたら、それを怖い伯母さんにやつて、可愛がつてくれる外の小屋へ行きたうござんす。
いと　ハテナウ、どうやら哀れな物の云ひやう、其方は實の兩親はないかや。
八重　ハテ、この子の親というてはございません。貰ひ子か、拾ひ子か、このやうに門附に出ても、貰ひが薄いと、打つたり毆いたり、それは〳〵慘い目にあひます。わしはツイ隣でござりまするが、常住詫してやりますわいなア。

まき　ほんにそれは、むごい事にあふ子ぢやなア。
八重　それで、外の可愛がる内へ行きたがりますが、小さい時から世話したゆゑ、金取らにや遣らぬ遣らぬと、云ふ事を聞いて居るゆゑ、それで今のやうな事を申しまするわいなア。
きみ　錢や米を貰うて歸なぬと、毆かれたり、縛られたり、飯も喰はさずに、それが怖い。眞の父さんや母さんに逢ひたうござりまするわいなア。
いと　聞けば聞く程、いぢらしいその子の身の上。待ちやく。足るか足らぬか知らねども、お卷さん、これ遣つて下さんせ。（ト鏡袋より小判壹兩出して渡す）。
儀助　ヤア、鳥追めに一兩とは、仕合せ者だな。
ずん　それいなア、コレ〳〵そこな子、これを遣らうと云はしやんす程に、どうぞマア、その可愛がる小屋とやら、内とやらへ。
まき　これは有り難うござります。私しが又内へ歸りまして、外へやる相談してやります程に、それまでも人に見らるゝと、直に取り上げられます。お君、戴いて仕舞うておきや。
八重　ドレ〳〵、わしがよい所へ仕舞うて置いてやりませう。その守おこしや。（ト提げて居る守袋をとつて、中より守を出して見て）モシ、お絲さん、でも此やうな守が入れでござんす。

いと（何心なく取つて）こりや眞間の繼橋、手古奈のお守。（ト裏を反して）治承二年戊戌四月五日誕生の男子十吉。

儀助　お絲さん、何のこつたな、小穢い。

東林　乞食の守、早く返してしまふがいゝ。

いと　イヽエイナァ、男子十吉と書いてあるが、この子は女子、殊に（ト指を折つて）年の數の違ひといひ、わたしも小さい時から持つて居る、この通りの手古奈のお守、こりや滅多にない守といひ、もしやわたしの兄さんが。

八重（向うを見て）モシ〳〵、アレ向うから、この子を慘うする婆さんが來ますわいなァ。

ト これにてお卷、今の守へお札と金を入れ、お君が腰へつけてやるうち、通り神樂にて、向うよりお六、乞食婆、編笠と三味線を持ち、キヨロ〳〵駈けて出て來り、お君を見て

ろく　この餓鬼は爰にうせたか。今朝小屋を一緒に連れて出たに、ちやんと小路隱れをしやァがつたな。

八重　イヽエイナァ、最前一の鳥居より、はぐれたというて逢うたゆゑ、一緒に門付して、分けてやらうと思うて。

ろく　それ、さういふ他人劫な。憎らしい。（ト お君の頭をくらはす）。

佐五　コレサ〳〵、さう酷うするな。

ろく　何サ、どんなにしても大事ござりやせん。この餓鬼は、わつちが熊ゲ谷に居る時、棄兒か、宿なしの子か、この守を着けた儘、狼が咬へて來たを、わつちらが内で可愛さうだと、雜巾に火をくつつけて、狼を追ひちらし、助けてやつて育てた餓鬼、頑是の出來るにつけ、仲間の奴らが、拾ひ子だの、繼ッ子だのと、他人劫つけられ、いけねえつちやァござりやせん。サァ〳〵、早く歩びやァがれ。また晩は食止だぞ。（ト頭をくらはす。お君泣出す）。

八重　お六さん、その樣にせいでもよいわいなァ。

ろく　イヽエ、打つちやつて置きなせえ。これから深川中を引摺り歩く。うしやァがれ。

ト 鳥追唄、捨せりふにてお君を引摺り行く。お八重、宥め〳〵向うへ入る。

東林　なんと、むごい婆ァぢやァないか。

佐五　酷いといふは、あの婆ァよりお絲、今の乞食に壹兩やる、派手も器量もありながら、兎角おれにやァ色氣なし。得心さへすれば、直に身請け、年季をぬいてやるがなァ。

いと（ムッとして）佐五兵衛さん、身請々々と云うても下さんすな。上げたり下したり、調子違ひの三

味線ぢやあるまいし……お卷さん、儀助どん、わしや此お客の座敷は勤めぬぞえ。

儀助　また悪い蟲を起して、そんな我儘。

まき　それ〳〵、皆醉うておいでなさんすによつて。

いと　イエ〳〵、人を弄り散らかして、わたしや退るぞえ。

まき　それぢや悪いわいなア。お前が癇癪起しなさんすと、わたしが座敷の廻しやうでも悪いかと、内の手前

いと　イエ〳〵、わたしが善い様に云ふわいなア。（ト紙に包んだ金をやる）。

まき　モシ〳〵、これぢや猶悪いわいなア。

いと　イエ〳〵、何ぢやあらうと、退けて下さんせ。

儀助　モシ、それぢやアこの儀助が、中内へ濟みません。

いと　濟まうと、濟むまいと、わたしが知つた事かいなア。（ト包んだ金を額へ打付ける）。

儀助　オヽ、痛い。（ト取つて見て）こりやお金……こんな痛みはいくらでも、いた有り難い。

皆々　ハテ、とんだ癇癪持ちだ。

いと　ドリヤ、これから杵正さんへ行つて飲み直さうわいなア。

ト流行り唄になり、お絲向うへ行きかける。これにて儀助、お卷も是非なく從いて行く。舞臺皆々呆れて居る。このうち花道よりお祭左七、五寸だるみの股引、半纏の上へ裏襟の掛つた小袖を着、革羽織、鳶の者にて出て來る。跡より半時九郎兵衛、やつし股引、誂への形、頬かむりにて、鳥飼の蒸籠を兩掛にかつぎ出て來り、花道にてお絲に行き逢ふ。

九郎　妹のお絲ぢやアないか。

いと　お前は兄さん。

九郎　中内へ寄らうと思つたに、よい所で逢つた。

左七　ハヽア、そんならあの子は、こなさんの妹かえ。

九郎　面目次第もないが、わしが身性が悪くつて、今に强請りやす。イヤ、此處ぢやア何も話されない妹、彼處へ歩びや。

いと　イエ、わたしやちつと。

九郎　ハテ、歩びやれといふに。

ト矢張り右の唄、彈きつゞけにて、皆々本舞臺へ來る。お絲、下の方の床几に腰を掛ける、九郎兵衛、蒸籠を下す。

ずん　これは左七さん、今し方まで皆さんが

左七　そりや大方權や八だらう。今日は仲間の中直り。親分、風の神喜左衛門どの、名代に、帳場から

すぐに深川くんだり、顔を出すも面役、歸りはまた、有象無象にとつつかれて、驚でも買はにや

アならねえ。

九郎　モシ、この蒸籠は、あの松本へいくのだね。

左七　さうサ、抛りこんで下せえ。

九郎　合點でござります。時に絲屋の番頭さん、今永代でお前の所の小僧が、山へ行くならこの袴を屆

けてくれろ、その間におれは豆藏を見ると、横着な奴サ。風呂敷が小さいから、わしが風呂敷へ

包んで、くつつけて來ました。（ト蒸籠の棒に、くゝしてある風呂敷取つて袴ばかり渡す）。

佐五　あの丁稚め、また野良をこいてうせるか。

ト袴を取るうち、五平太、九郎兵衛が持つてゐる風呂敷に目をつけ

五平　この風呂敷は覺えがある。

九郎　エヽ。

五平　さてはこの間鎧の渡しで、家來小者が包みを盗み取つたはわれだな。

九郎　アヽ、コレ〳〵、滅多な事を云はつしやんな。わしやアそんな者ぢやアごんせんぞえ。

五平　ぬかすまい。コレ、この風呂敷の端に、山住氏と縫ひ印。

九郎　サア、それは

五平　これでもおのれ、爭ふか。

九郎　イヤ、この風呂數は拾つた。

五平　なんと。

九郎　先月から本町の夜番に雇はれ、町内を廻る折、大道で拾つたこの風呂敷、夜番は物を拾ふなとお

觸れでもあつたか。

五平　ヤ。

九郎　このお侍は、滅多無性に人に難癖を云ひかける。おれも、ちつとやそつと、人に面を見知られた

九郎兵衛、盗人と云はれちやアすまない。ウヌ、どうするか、見やアがれ。

ト蒸籠の天秤棒を取つて立ちかゝる。

五平　おのれ、侍ひに向つて慮外ぬかすと、ぶッぱなすぞ。（ト柄へ手をかける）。

東林　モシ〳〵、滅多を事なされまするな。

五平　イヤ〳〵、此方にも覺えある風呂敷ゆゑ。

九郎　なんの事だえ。二本棒の侍ひと犬ッころが怖くつて、江戸の住居がなるものかえ。これから死ッくらだ。こゝへ出やァがれ。

五平　おのれ、もう料簡が

ト拔いてぶつかける。九郎兵衛も天秤棒振りあげる。皆々こはがる。お祭左七中へ入る。

左七　これサ危ない。

ト止るもかまはず、兩人たゝきあふを、左七棒の先と、拔身を持つた腕を引ッ捕へる。

五平　イヤ、退きやれ。

九郎　退いてゐなんし。

左七　イヽヤ、滅多に退かれない。大道中の段平もの、こんな中へ入るのが、血の氣の多い仕事師サ。先刻からの一部始終、かたがあつても跡のない、云つてみりやァこつぱ喧嘩、それに危ない拔身の眞中、合點で飛び込む鳶頭、互ひに堪忍、鐵棒の、火の用心より身の用心、お祭左七がこりやァ貰つた。じゆんはりと、手を拍つてくんなんし。

五平　イヤ〳〵、若い者、なんぼおぬしが云ふ事でも

左七　わしが仲人で料簡ならざァ、喧嘩に枝が咲きやすぞえ。

佐五　モシ〳〵、お前がこゝにお出なすつちやァ惡い。マァ〳〵、松本へござりませ。

五平　イヤ〳〵、ぶつた切つて仕舞ふ。

九郎　鮪の胴骨ぢやァあるめえし、ごたくをあげやァがんな。

五平　イヤ、おのれは

皆々　マァ〳〵、ござりまし〳〵〳〵。

ト わめく五平太を、佐五兵衛、東林、儀助、お卷つれて鳥居の内へ入る。

いと　どうなる事かと思つたら、癪が痛うなつたわいなァ。

ずん　ほんに左七さん、大きにお世話でござりました。

左七　なにサ、おれも鳥飼からこの人を雇つて來て、いさくさがあつちやァ氣障だ。何か間違ひの筋と聞えるが、得て武さといふ奴は、不理窟を云ひたがるもの。イヤ、理窟といへば、あの子に話があるといふ事。コレ、ずんぎり、この蒸籠を、松本へ擔ぎ込んでくりやれ。

ずん　アイ〳〵、畏りました。

九郎　そんならわつちは行かねえでも。

左七　よいとも〳〵……ア、、今日もまた友達めらが醉はにやァよいが。

ト太神樂、鞠の曲の鳴り物にて、お祭左七さきに、すん切、蒸籠をかつぎ、鳥居の内へ入る。お絲、あたりを見廻し

いと　兄さん、まだお前、心が直らんな。

九郎　そりや何を

いと　今も今とも、外聞が悪うてなるこつちやござんせん。

九郎　ハァ、この風呂敷の事か。こりやァほんに拾つたよ。おれもてまへや女房のお時が事を思つて、モウ〳〵いたぶりや、手慰みをさつぱり止めようと思へばこそ、本町へ夜番に頼まれ、大家衆のお剩り酒を飲んで、たつた月に二貫五百、一年に四兩あまり、この夜番を三十年も辛抱すりやァおぬしが身請をする程に、喜んで居やれ。

いと　何を、三十年藝者してたまるものかいなァ。

九郎　イヤサ、さう云はねえものだ。おぬしもそれを樂みに、今おれに

いと　また無心でござんすかいなァ。

九郎　イヤサ、さうぢやないが、おれも兄弟の間で言ひ憎い事だが、あの極樂水の相長屋の嚊ァとねんごろして、からく亭主に見つかり、斬るの突くのと亂騒ぎ、やう〳〵お定りの七兩二分で濟ます筈だが、肝心のその金に行き詰り、據なく來た。それで無くつて、なんぼ妹だといつて、又も今日も、どの面さげて云はれるものだ。もう〳〵これに懲りぬ事はない程に、慈悲だ、情だ、兄一人救つてくりやれ。(ト泣く)。

いと　もうお前の、その猫撫聲や空涙に、懲りたものぢやないわいなァ。

九郎　おぬしがこの金を貸してくれにやァ、おれもでんど沙汰になつて、恥面かゝうより、いつそ天水桶へ身を投げて死ぬぞよ。

いと　アレ、又あんな事を。

九郎　それで死なれにやァ、せつかいで腹を切らうか。いつその事に、手拭で首をくゝつて

ト手拭を出して首へ巻く。

いと　ア、、もうよいわいなァ。所詮さう云ひ出しては、只は去ぬまい。これなと持つてゆかしやんせ

ト後　巾を貳本抜いてやる。

九郎　こりやァ貳本で二兩か三兩、ばつたりに賣つたら、もうちつとにならうか。

いと　そんなこと云はずと、持つて行かしやんせ……イヤ、行かぬ内に聞かうと思つて居たが、アノお

前にもわたしにも、親達が下さんしたといふ、眞間の手古奈のお守、わたしや持つて居るが、お前はどうしなさんしたえ。

九郎　サア、あの手古奈の守は

ト云はんとする所へ、お卷出て來り

まき　モシ〳〵、お絲さん、ちよつて來て下さんせいなア。

いと　イエ〳〵、わたしやもう、あのお客で、松本へ行くことは否でござんす。

九郎　ハテ、さう云はずと、何も商賣、行きやれな。

まき　アレ、兄さんもあゝ云うてぢや。マア〳〵、ちよつと。

いと　アゝモウ、藝者には何がなるぞいなア。

ト辛氣な思ひ入れ。流行り唄になり、お絲とお卷、下座へ入る。

九郎　まづ妹めをせびつて、後ざし二本に有り附いた。……それにしても、この間鎧の渡で、醉どれの中間めが風呂敷包み、よい代物とちよろまかして、明けて見たれば破れ襯斗目、風呂敷ばかり貳百がものもあると持ち料にしたら、思ひがけない先刻の侍ひめが風呂敷ださうだ。危ない所を云ひ拔けた、運にまかして、よい仕事がありさうなものだが。

ト向うを見て思ひ入れして、下の方へ小がくれると、直に三味線入りの神樂、大拍子になり、向うより石塚彌三兵衞、ごましほの侍ひ、若殿、竹川お乳の人、腰元、守を持ち、跡より本庄綱五郎、近習。菖蒲革の武士、草履取り付添ひ出て、直に舞臺へ來る。この内下座より五平太出迎ひ、平伏して

五平　これは〳〵若殿樣、今日は二軒茶屋へお立寄りとござりまするゆゑ、お先へ參つて松本へ、申し付けおきましてござります。

若殿　彌三兵衞は直樣別當へ立越え、右の仔細申し達すであらうな。

彌三　御意でござります。お家の寶、小倉の色紙、卽ちこれへ持參仕つたも（ト懷中より紙紗包みの箱を出し）姫君お輿入れ御婚禮の夜の床飾り、氏神にて祈念致すが御吉例ゆゑ、この段申し入れ、相賴みまするでござりませう。

五平　して、松本へ下さるゝお目錄は。

綱五　その儀は拙者申し付け、これへ所持致し居りまする。（ト小さな文箱を出す。）

五平　お途中の儀は一色私しおかゝり、後方までに、家來にお渡し下されい。

綱五　承知いたしました。

五平　然らば私しは、お入りの用意申し付けませう。

ト五平太下座へ入る。此うち下の方より九郎兵衛聞いて居て、下の方に蹲踞ひ居眠り居る中間の脇差を盗み入る。

乳人　若様、お久し振りで富が岡への御参詣、お附きの衆も、さぞよい慰みでござりませう。

腰元　竹川さんのおつしやる通り、外珍らしい私しどもまで、見飽きませぬ春の景色、有り難うござりする。

綱五　何は兎もあれ、まづ御神前へ。

彌三　いざお入りあられませう。

ト唄になり、皆々下座へ入る、綱五郎つゞいて行かうとする所へ、九郎兵衛、今の脇差を差し、掴み手して出で來り

九郎　ヘイ〳〵、暫くお待ち下さりまし。

綱五　其方は。

九郎　私しは山住の中間、主人申し越しまするは、只今お約束の松本へ遣はさるゝお目錄、あなたへ申して持つて參る樣にと、申し付けましてござりまする。ヘイ、私しは新參、お見知りないゆゑ。これを證據に持つて參れと、即ち主人が名前の風呂敷。（ト懷中より出して見せる）。

綱五　ムウ、相違もあるまい。然らば其方に。（ト左の手に文箱を出さうとする）。

九郎　ヘイ〳〵、慥かにわたくしが（ト取らうとする、その手を綱五郎しつかり捕へる）。アイタヽヽヽこりや何となされまする。

綱五　なんとするとは、こゝな紛れ者め。

九郎　ヤア。（ト恟り）。

綱五　中間小者が、主人の供に股引穿かうか。察するところ騙りの骨頂。

九郎　南無三しまつた。

ト振り切らうとする拍子に、九郎兵衛が利腕まくれる。綱五郎、腕の彫り物を見て

綱五　ヤア、小絲命の、この彫り物は

九郎　何を。

ト立廻りに振切り、九郎兵衛一散に向うへ逃けて入る。綱五郎跡を見送り

綱五　ハテ、油斷のならぬ。

ト袴の塵を拂ふ。佃の騷ぎになり、綱五郎、悠々と下座へ入る。右の鳴り物にてこの道具をぶん廻す。

本舞臺、正面一間の屋體、向う床の間、襖、上の方に一間の離れ座敷、障子をたて、この間鐵砲垣植込み、手水鉢、下の方に正面へ見せたる萱門、建仁寺垣、二軒茶屋松本と書いたる行燈好みの通り、爰に左七、濁酒を取り、ずん切と蔦の者酒を飲み居る。お蔦、松本の女房にて、酌をして居る。蔦の者、裸にて取組みゐる。右の鳴り物にて道具とまる。

左七　こいつは面白い。夏ならば泉水へ飛び込んで擲き合ひといふ所だが、一番とれ〳〵。

兩人　どつこいな〳〵。（トつかみ合ふ）。

ずん　それ〳〵、右の足が浮いた。左をさして、それ、殘つた〳〵。

權　よんやさ。（ト八を投げ出す）。

ずん　勝角力、足場野々〳〵。（ト給仕盆を團扇のやうにあげる）。

左七　待て〳〵。あいらがのは無手だから、喧嘩がましだ。いつそずんぎり、三人がゝりをとつて見せないか。

ずん　何をするも稽古の爲だ。一番とりますべい。（ト裸になる）。

三人　こいつは面白いやァ。

ト權、八、源、かゝるを、ちよつと立廻つて、ずん切、三人を面白く投げる。

つた　勝角力、ずんぎり〳〵。

左七　こいつは身ぐるみ遣らにやァならない。（ト半纏や革羽織を投げて遣る）。

つた　東西々々、さるお方よりすんぎりに御祝儀下さる。

三人　どうでも商賣人には叶はない、いま〳〵しい。

ずん　こりやァ有り難い、半纏に革羽織併しほんの常談ここにお氣の毒、お返し申しませう。

左七　なに、常談といつて、角力に遣つた物を取返されるものか。

ずん　そんならほんに下されまするか。

左七　そこが江戸ッ子だワ、初松魚を喰つたと思やァ濟むワ。

權　こりやァずん切、仕合せ者だ。伊勢久で貳兩通用の革羽織だ。

左七　外聞の惡い事を云ふな。質や八をおくものか。只入替へて來たばかりだ。

八　おきやァがれ……時にいま〳〵しい、おればかり釘も拾はない。

ずん　お前にはこの革羽織を

源　くれるか。

ずん　なにサ、大事だから預けて置きやす。また着て歸ると、友達に借りられるから、半纏ばかり貰つた

顔サ。

源　そんならおれが預つて、闕取の内へ屆けてやらう。

左七　權やおれも裸ぢや居られない。これで仲町へ行つて、古着でも買つて來てくれ。

ト紙に包んだ金をやる。

權　モシ、古着と　氣障だな。いつそこの金を祝儀にやつて、あの料理番の松が布子でも、借りてあけやせう。

左七　そんならさうしてくりや。

つた　それまでもお寒うござりませう。ゆき丈の揃はぬ假り着より、これなと引掛けておいでなさんせいなア。（ト襖の内より夜着を持つて來て着せる）。

左七　おきやアがれ、とんだ辻法印だ。

八　オヽ、角力をとつて寒くなつた。

つた　風呂が沸いて居る、お入りなさんせ。

源　そんなら行つて溫まりやせうか。

ずん　左七さん、有り難うござります。

ト佃になり、ずん切と三人、着物を抱へて奥へ入る。

左七　ハヽヽヽ、とんだお帳につく奴サ。

いと（奥にて）又かいなア、もう〳〵云うて下さんすな。

トこれにて左七、上の方へ來る。お蔦、衝立を仕切りにする内、合ひ方になり、奥よりお絲、びんしやんして出て來るを、佐五兵衛、東林、宥めながら附いて出て

東林　これサ、お絲さん、番頭の心意氣が、肉桂薄荷ではあるまいし、さうツンとする事はないわな。

佐五　それサ、よく〳〵に思へばこそ、堀留から度々の迎ひ船、今日は出番、今日は懸取りと、いろいろと名を附けて、口說いても〳〵、さう慘くはしないものだによ。

いと　佐五兵衛さん、藝者といへばいふものゝ、取るに足らぬ小僧のわたし、とやかう云うて下さんすは、嬉しうござんすけれど

佐五　へヽヽヽ、小僧もすさまじい。提灯小僧か、屋根小僧か、どうで化されるは知れて居る、古狸の革羽織。

東林　否だといふは、外にちん〳〵の色があるな。

いと　イヽエ、ちつと古いが、色と土用干しぢやわいなア。

佐五　イヤ、そりや嘘だ。今深川で、一といつて二のない藝者のお絲がつた色男の無いは、そりやわたしが證人ぢやわいなァ。（ト衝立のかげより出る。）

東林　オヽ、こりやお蔦さん、さういふお前も一つ穴のつた　イエ〳〵、狐でない事は稲荷様も見とほし。マア、今のお絲さん、古鐵買ひに見せても、色がないとは思はねど、そこがござんせん。主の色は、たゞ酒と、人に物が遣り好き。

佐五　道理で内證は火の車、酒が好きなら、新川新堀伯父様に持つて、物が遣り好きなら、大身の槍でも管槍でも、お望み次第。色なしと聞いちやァ猶の事、これサお絲……お絲坊。

ト摺寄つて手を取らうとする。

いと　アレ、又かいなァ。思ひきりのわるい。（ト振り放す）。

佐五　ムウ、おれも本町筋で一軒の支配人、恥をかゝしてもよいか。……アノ、どうでも。

ト此の内、後へ五平太、儀助、金六出て來り

金六　否ならお絲さん、わたしが方の方を附けて下さりまし。

佐五　オヽ、こりやァ神原屋の金六、儀助、五平太さん。

五平　おれも共々取り持つて、よい身にしようと思つても、お絲が得心せにやァ、義理も絲瓜も無いから、この手合ひも

金六　ひど催促と出かけるのサ。サア、どうして下さるな。

ト お絲、金六をチロリと見て思ひ入れ。

儀助　モシ、何もさうお前、落着いて居ては悪い。私も廻しをしてゐる。何とやらも釣り方、爲になるお客、佐五兵衛さんゆゑ、昨夜も中内の二階で、耳へ章魚のいるほど言つたぢやァござりやせんか。今時お前の様な

いと　アイ、儀助どん、わたしや慾を知らぬ藝者ぢやわいなァ。

儀助　なんの事たな。人をはぐらかすやうな。さう立派な藝者衆なら、この間玉松の船頭に立替へた祝儀と、粂本の女どもに遣つた前垂れの立替、四兩貳分、返しておいて口を利くがいゝ。

金六　それサ、この神原屋の手代金六も、質の捨て利から、種なしの貸小間物屋の受合ひ、金高は覺えてござんせう。儀助がのも、おれがのも

儀助　たつた今、方を附けて、大風を云ひなせえ。

いと　サア、その金は

東林　無いのかえ。

五平　無くば佐五兵衛に得心して、方々の仕埒をつけるがよいではないか。名を取らうより、とつくり
と思案をしやれ。
ト お絲思ひ入れ。

左七　お蔦さん〳〵。

つた　アイ〳〵。（ト左七の側へ行く）。

左七　彼處のいさくさァ何だえ。

つた　サア、何ぢややら。

左七　ちよつと聞いた所が貸借り、可哀さうに藝者一人を、口を出したくつても、ちやんころ無し。エ
エ、錢のないは、首の無いより劣つたものだ。

つた　ほんに儘にならぬ世の中。マア〳〵、一ッおあがりなさんせいなア。（ト酒をつぐ）。

五平　コレ、佐五兵衛、それ、こゝが金。

佐五　ハテ、ようござります。金六どん、その金を。
ト 金六が首にかけてゐる貳百兩の財布を渡す。
コレ お絲、それ、拂つてしまやれ。

澤村田之助
尾上松助
豐國画
豐國画